

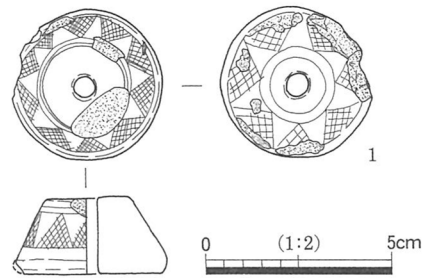
なお、出土遺物は全体に僅少であるが、調査地南端から約17mの地点で滑石製紡錘車が1点出土している。この紡錘車は溝底に接し、狭端面を上方に向けて出土している。

建物群に近接する区画溝と異なり、土器などの日常品の廃棄がみられないのは、主要な生活空間からはやや距離をおいていることと、建物群の外郭の区画する溝であることと呼応している。

B. 出土遺物 (図II-18)

溝G-2から出土した遺物で図化に耐えうるのは滑石製紡錘車の

みである。法量は下端径4.0cm、上端径2.2cm、厚さ2.0cm、穴径0.6cmを測り、重さは45gである。材質は淡緑灰色を呈するいわゆる滑石であり、形態は断面形が台形を呈し、上端面および下端面は平坦に調整される。紋様は上端面は無紋であるが、側面および下端面には線刻による紋様が施文されている。側面には上方に2条の平行沈線、下方に1条の細い沈線を線刻し、その間を10個の格子入り鋸歯紋で埋めている。さらに下端面では穿孔部を中心に2重の同心円を線刻し、その外側に円心に向かう格子入り鋸歯紋を7個配している。



図II-18

溝G-2出土紡錘車

(2) 溝G-3 (図II-16)

G地区の西寄りで検出したものであり、すでに建物G-15の報告でも記したように同建物を区画するものと考えられる。規模は最大幅1.2m、深さ15cmを測る。

おおむね南北方向を指向するものの、緩やかに逆S字に蛇行する傾向がある。この溝は等高線に平行する状況が看取され、蛇行傾向の状況は地形に影響されるかたちで掘削されたことを示している。また、この溝は北側では緩やかに西側に屈曲し、直接的にはつながらないものの、その延長線上には溝H-58が検出されている。元来は連続する溝であった可能性を有するとともに、かりに連続するものではなかったとしても、両者がその掘削段階において有機的に関連していたことは看取できる。

図化するような遺物は出土していないが、後述する井戸G-12との関連から、年代の一点が奈良時代にあるものと考えておきたい。

(3) 溝G-47

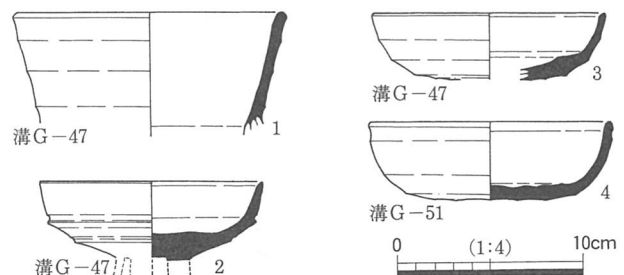
A. 遺構の状況 (図II-16)

G地区の北側で検出した東西方向の溝であり、先に報告した溝G-2の延長線上を東端とし、西側は調査範囲外にのびている。

溝G-2とは直接的には接続しないものの、位置関係や方向、規模などの点で建物群の外郭を画する溝であると考えられる。規模は平均して幅1m、深さ20cmを測る。なお、溝G-2と同様に一部が途切れるが、これについては削平によるものと考えられる一方で、ブリッジとして掘り残され、通路としての機能を有していた可能性も残る。

B. 出土遺物 (図II-19-1~3、写II-44-1)

出土遺物は僅少であるが、数点の須恵器が図化可能である。このうち、(3)は体部と底部の境がルーズであるが、杯Gと考えられるもので、7世紀後半のものであろうか。



図II-19 G地区溝出土土器

(4) 溝 G -51

A. 遺構の状況 (図 II -16)

G地区の北東隅で検出した南北方向の溝であり、先に報告した溝G-2の延長線上に位置する。当該溝はその位置関係が重要である上に、わずかではあるが時期を推定しうる遺物が出土していることから一項を設けて報告する。規模は平均して幅80cm、深さは最深部で20cmを測る。正方方位を指向し、しかも上記の通り溝G-2の延長線上に位置することなどから、溝G-47を含めて建物群の外郭を画する溝の一つであると判断できる。

B. 出土遺物 (図 II -19-4、写 II -44-2)

出土遺物で図化しえたのは杯Gのみである。丸みを帯びた体部であり、杯H蓋とみることも可能であるが、調整等の特徴からここでは杯Gの身として図化している。溝G-47と同様に7世紀後半の所産と考えられる。

3. 土坑

(1) 土坑 G -41

A. 遺構の状況 (図 II -16)

G地区における遺構密度は後述するH地区に比較すると希薄であり、北東隅および南東隅部付近に集中して土坑を検出しているが、遺物を出土した土坑はわずかである。

このうちの土坑G-41はG地区の南東部で検出されたものであり、東端が未調査であるが、直径1.5m前後、深さ40cmを測る不定形の土坑である。

B. 出土遺物 (図 II -20、写 II -44-3)

出土遺物は多くはないが、須恵器3点を掲げている。(1) および(2)は杯Gである可能性もあるが、杯Aである。(3)は頸部のみであり、全体は不明であるが、壺Qなどの広口壺である可能性が考えられる。時期的には8世紀代と考えておく。

4. 井戸

(1) 井戸 G -12

A. 遺構の状況 (図 II -16、写 II -32)

G地区の西側、建物G-12の南側13mで検出した井戸である。

形態は上端の平面形が直径1.2mの円形を呈し、断面はややラッパ状に広がるが、中位から下部にかけてはほぼ垂直に降下する。深さは検出面から94cmと比較的浅い。底部はほぼ水平であり、直径約60cmの円形を呈する。

調査段階では湧水は認められないが、黄灰色の基盤層は遺構の中位より灰白色砂礫層となっている。また、下部の埋土は礫層および粘性の強い灰色粘土であり、少なくとも水を溜める機能を有していた状況を窺うことができる。

埋土は大きく3層に分けることができ、上層は黄灰色シルト～粘土であり、遺物の包含はほとんど認められず、人為的に埋め戻されたものである可能性が高い。中層は層厚25cm前後を測る灰色粘土であり、遺物の多くは同層から出土している。

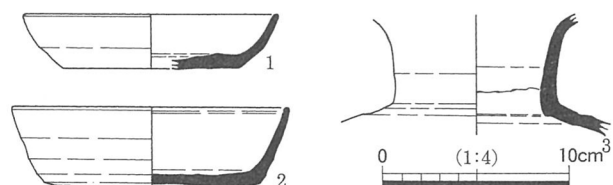


図 II -20 土坑 G -41 出土土器

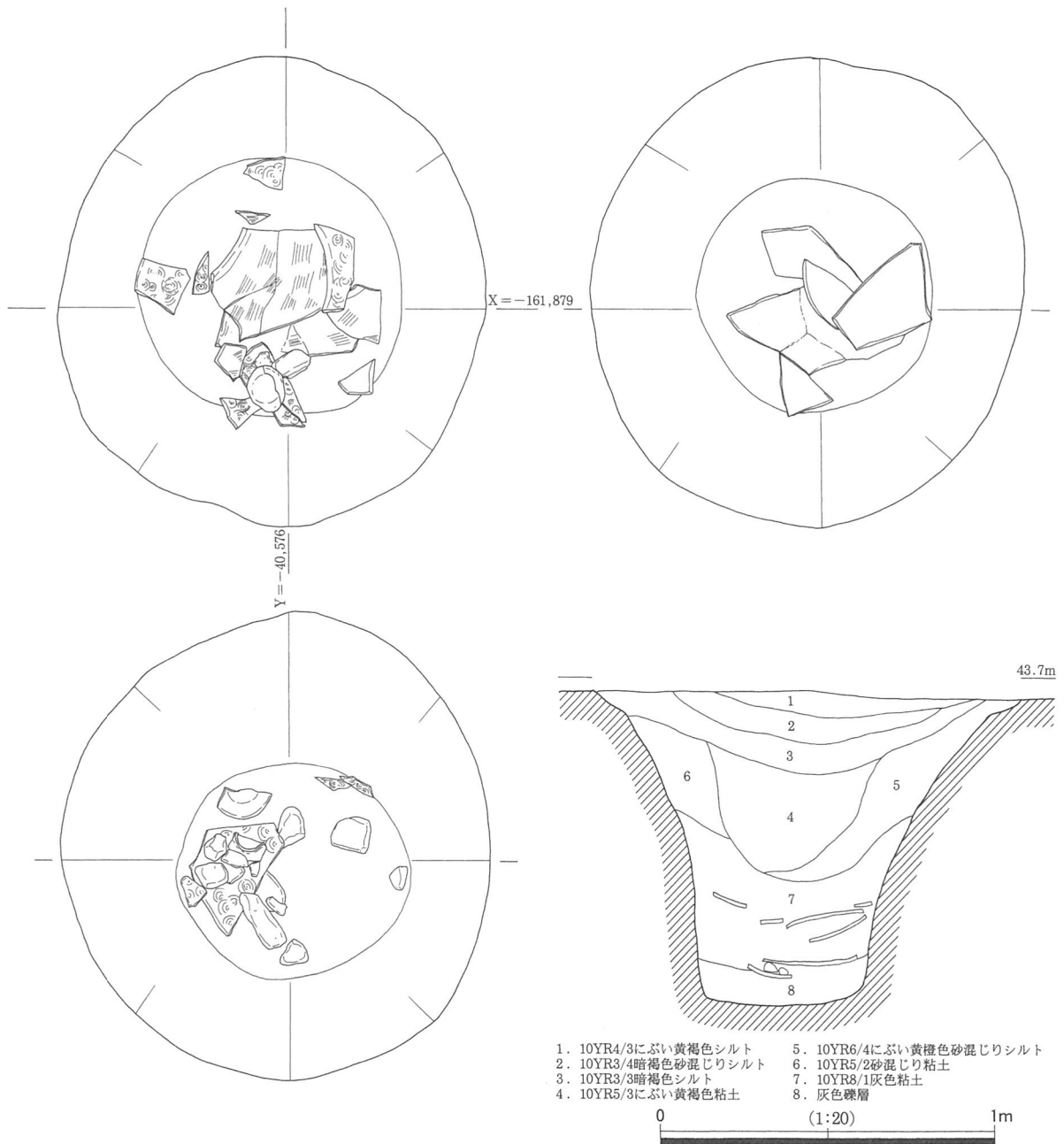
なお、同層から出土した遺物は概ね3層に分かれており、上面では須恵器の大型甕が基本的には器壁外面を上方に向けたかたちでレベルを揃えて出土している。また、その下では同一個体となる須恵器甕が器壁内面を上方に向けるかたちで出土している。

また、そのさらに下方からは先の須恵器甕片と土師器壺・須恵器杯がこぶし大の石とともにまとまって出土している。

なお、下層は灰色礫層であり、層厚は10 cm前後を測る。同層および底面直上からの出土遺物はない。

B. 出土遺物 (図Ⅱ-22-2~4、写Ⅱ-44-4,5)

(2) は最下層上面から出土した土師器壺である。2箇所に把手が付けられた痕跡があるがいずれも欠失している。外面は非常に丁寧な横方向のミガキ調整が行われるが、内面は指頭圧痕が明瞭で、下部では粘土紐の接合痕も観察される。また、底部には小振りの高台が付されている。



図Ⅱ-21 井戸G-12平面・断面図

なお、この土器は色調が赤橙色を呈する点が特徴的である点を付言しておきたい。

(3) は須恵器杯Bである。体部はやや丸みを帯びたものであり、口縁端部は外方につまみ出されている。高台は断面方形である。

いわゆる金属器模倣の須恵器であり、内外面ともにきわめて丁寧なヨコナデ調整を行っている。また、内面の見込み部分付近にはハケ状の調整痕跡が認められる。胎土にはほとんど砂粒を含まない。

(4) は須恵器の大型甕である。口縁部および胴部下半を欠いているが、とくに口縁部は頸部を境に人為的に割られたものである可能性もある。

(2) 井戸G-4

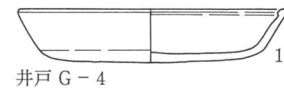
A. 遺構の状況 (図II-16)

G地区南端で検出した円形の素掘り井戸である。直径約3m、深さは75cmである。先に報告した井戸G-12同様に井戸としては浅く、現状では湧水は認められない。

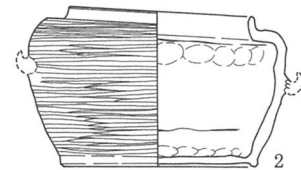
埋没の状況は井戸G-12と共通するが、出土遺物は土師器杯Aが1点図化しえたにとどまる。

B. 出土遺物 (図II-22-1)

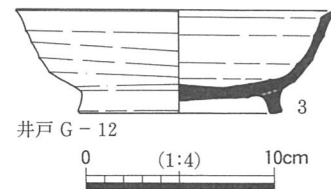
井戸G-4からの出土遺物は僅少であるが、図に掲げた土師器杯Aが出土している。全体に摩滅しており、暗文は遺存していない。同様に全体の調整技法についても不明であり、奈良時代のものと考えられるものの、時期を特定するための属性を欠いている。



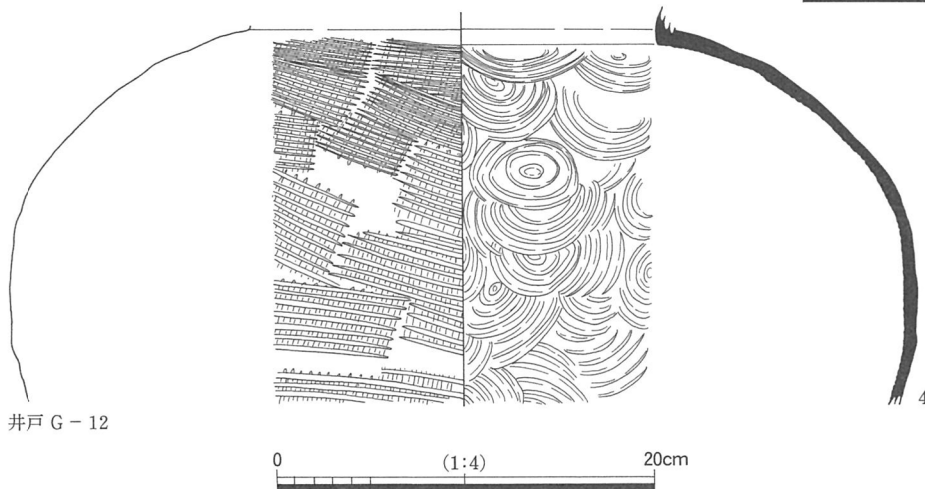
井戸G-4



井戸G-12



井戸G-12



井戸G-12

図II-22 G地区井戸出土土器

第3節 H地区の遺構と遺物

1. 掘立柱建物

(1) 建物H-3 (図II-23・24、写II-11～14)

H地区の北東部から検出した掘立柱建物跡である。構造は桁行4間、梁行2間であり、桁側の東西両面に5間の庇と考えられる柱穴が付属する。同様に南側にも2間分の柱穴が検出され、これも庇などの付帯施設である可能性が高いものと判断できる。

規模は母屋部分のみで桁行が8.3m、梁行が4.1mを測り、単純計算で面積は34.03㎡を測る。

桁行の軸線はおおむねN-5°-Eである。規模は庇とも考えられる柱穴を除き、柱間寸法は最長で2.1m、最短で2.0m、平均して約2.0mを測る。基本的には7尺等間を意図して造営されたものと判断できる。

一方、東西に付加される庇とも考えられる柱列では柱間寸法は最長で1.7m、最短で1.5m、平均して約1.6mを測る。母屋の間数が4間であるのに対して当該柱列は5間であり、当然のことながら、その柱間距離は母屋の8割に配分されている。なお、南側に付帯する柱列は母屋の南側梁行と同じで柱間寸法は平均して2mを測る。

また、東西に付加される柱列と母屋の桁行柱列の間隔は東西で微妙に異なっており、東側では2.4m



図II-23 H地区遺構平面図

を測るのに対して、西側では20 cm短く2.2 mを測る。

柱穴の平面形態は母屋の柱列がややばらつきはあり、一辺50～80 cmを測る方形である。深さは現存で平均して40 cmを測る。

柱の掘り方については母屋の南東隅の柱にあたるピットH-65および南側付帯施設柱列の西端にあたるピットH-113を除いて、木質は遺存していなかったものの、色調の変化によって柱痕跡を明瞭なかたちで確認している。ちなみに母屋部分の柱痕跡の直径は平均して20 cmを測る。

また、庇とも考えられる付帯施設の柱穴の規模は直径、深さともに比較的ばらつきが少なく、直径は平均して30 cm、深さは20 cmを測る。なお、柱痕跡の直径は10 cm前後を測るものが多い。

柱穴の埋土は基盤層の黄灰色シルトを母材とするものと灰色シルトの互層を基本としている。

なお、遺構の性格上、出土遺物は僅少であるが、柱掘り方の裏込め土中から高台が「ハ」字状に踏ん張る須恵器杯Bの破片が出土しており、時期の推定が可能となっている。

また、当該建物の北側では約3.8 mの間隔をおき、東西方向の柵H-1を検出している。この柵列H-1は建物H-3の東側桁行柱列の延長線上を起点として造営されていることから、両者は有機的に関連するものと判断される。

(2) 建物H-4 (図Ⅱ-23・24、写Ⅱ-12・14)

建物H-3の南側、約5 mで検出した掘立柱建物跡である。構造は桁行4間、梁行2間であるが、桁側の中央2間は両脇の柱間よりも柱間寸法が短く、結果として変則的な柱配置となっている。

状況としてはむしろ3間×2間の建物構造の桁行側の中央の柱間に柱が1本、付加されたものと見ることができる。

桁行の軸線はおおむねN-13°-Eであり、建物H-3とは一瞥しただけでもわかる程度に方向が異なっている。

規模は桁行6.2 m、梁行3.6 mを測り、面積は22.32 m²を測る。柱間寸法は梁側が平均して1.7 m、桁行側は上記のように変則的であり、中央を除けば平均1.8 mを測り、中央の2間は平均して1.2 mを測る。

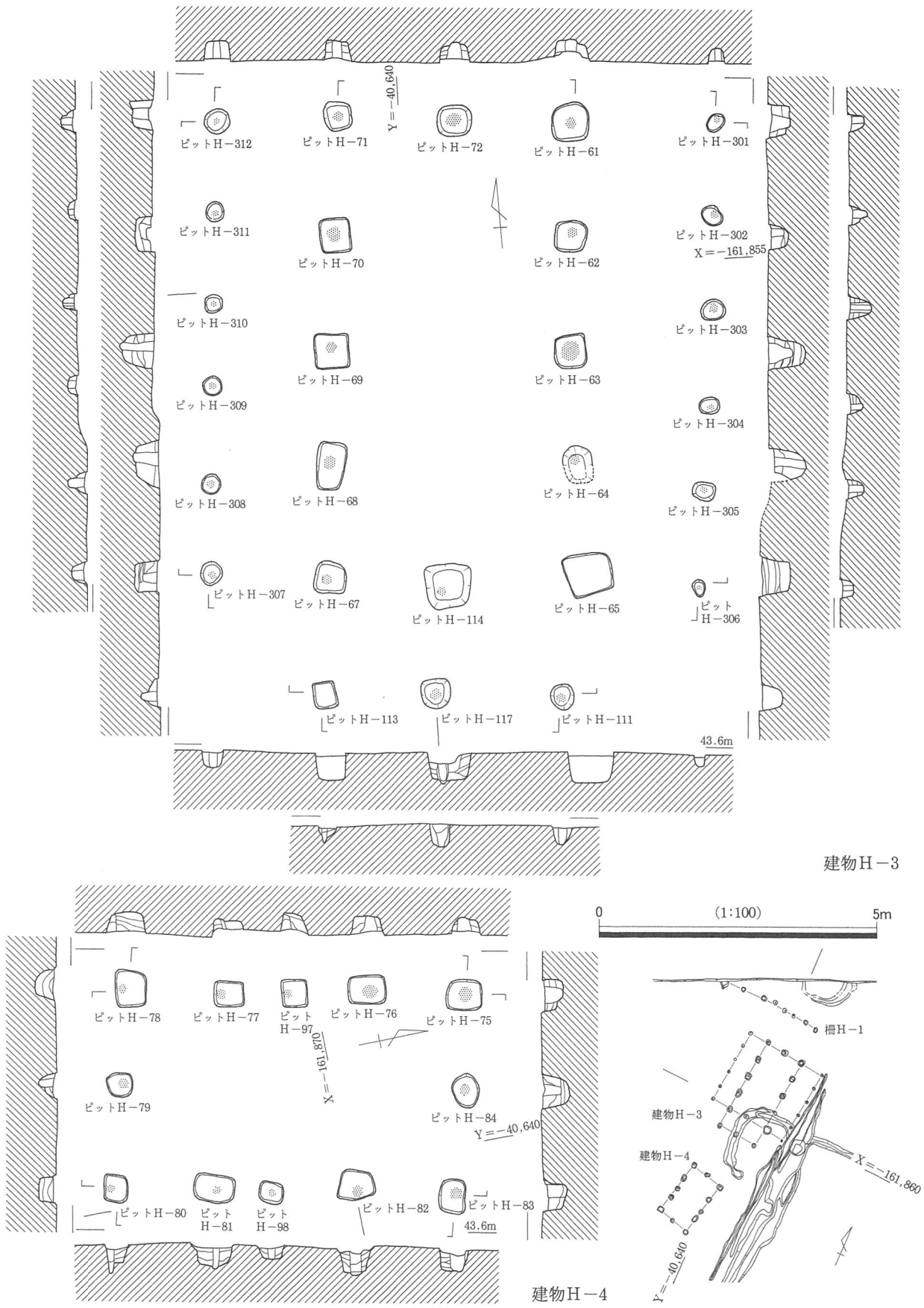
したがって、冒頭でも触れたように3間×2間の建物構造の桁行側の中央の柱間に柱が1本、付加されたものと見ることができるのであるが、もともと桁行側は等間では設計されていなかったことになる。

柱穴の掘り方の平面形はいずれも方形を呈し、個々の大きさはややばらつきがあり一辺40～70 cmを測る。なお、桁行側の中央の柱穴および棟持柱がやや小振りである。深さは検出面から最も深いもので約50 cmであり、平均して40 cm前後を測る。

なお、この建物も建物H-3と同様に柱の抜き取り痕跡はなく、ほぼすべての柱穴から柱痕跡を確認している。なお、柱痕跡の位置は必ずしも柱穴の中心とは限らず、掘り方のいずれかの壁面に接するようして検出されるものもある。なお、一部の柱穴では柱の木質がわずかに遺存しており、分析の結果樹種はシイノキであることが判明している。

柱穴の裏込め土は建物H-3と同様に褐色土と基盤層を起源とする黄灰色シルトの互層となっており、非常に堅く締まっている。なお、柱穴からは遺物は全く出土していない。ただし、近接して検出された土坑H-39からは7世紀後半の土器が出土しており、当該建物の年代を推定する一助となる。

なお、当該建物は建物H-3とは軸線を異にしているものの、柱の埋土の状況が酷似しており、さらには西側の柱列を揃えているなどの点で併存していた可能性が高いものと判断する。



図Ⅱ-24 建物H-3・H-4平面・断面図

(3) 建物H-5 (図Ⅱ-23・25、写Ⅱ-15-1)

先に報告を行った建物H-3・4とは20mの距離をおいて検出した掘立柱建物跡であり、後述する建物H-6と並列する。

構造は桁行2間、梁行2間の総柱建物であり、規模は4.4m×3.0mを測り、面積は13.2㎡である。東西方向が長く、2間×2間とはいえ東西棟であると考えられる。建物の軸線はおおむねN-2°-Wである。

柱穴の掘り方の平面形は基本的には方形を呈しており、中心の柱がやや小振りである以外は一辺40cm前後を測り、残存する深さは平均で24cmである。なお、この建物も柱の抜き取り痕跡はなく、ほとんどの柱穴から柱痕跡を確認している。遺物はまったく出土していない。

なお、当該建物は西側から検出した建物H-6と軸を一にして並列しており、構造的にも共通する点が多いことなど、同時に計画的に造営されたものと判断できる。

(4) 建物H-6 (図Ⅱ-23・25、写Ⅱ-15-2)

建物H-5の西側で1.8mの距離をおいて検出した掘立柱建物跡である。

構造は桁行2間、梁行2間の総柱建物であり、規模は3.6m×3.0mを測り、面積は10.8㎡である。建物H-5と同様に東西方向が長く、2間×2間とはいえ東西棟であると考えられる。建物の軸線はおおむねN-4°-Wである。

柱穴の掘り方の平面形は不整ながらも方形を指向しており、中心の柱がやや小振りである以外は一辺50cm前後を測り、残存する深さは平均で30cmである。

なお、この建物も柱の抜き取り痕跡はなく、ほとんどの柱穴から柱痕跡を確認している。出土遺物はまったく出土していない。なお、建物跡H-5および建物H-6の周辺からは多くの柱穴が検出されており、建物を復元するには至っていないが、少なくとも複数時期にわたる建物の建て替えがあったことが推定できることを付記しておきたい。

(5) 建物H-7 (図Ⅱ-23・25、写Ⅱ-15-3)

建物H-6の南側で5mで検出した掘立柱建物跡である。後述する建物H-8とは南北に並列する。

構造は桁行2間、梁行2間の総柱建物であり、規模は3.6m×3.4mを測り、面積は12.2㎡である。建物の軸線はおおむねN-2°-Wである。

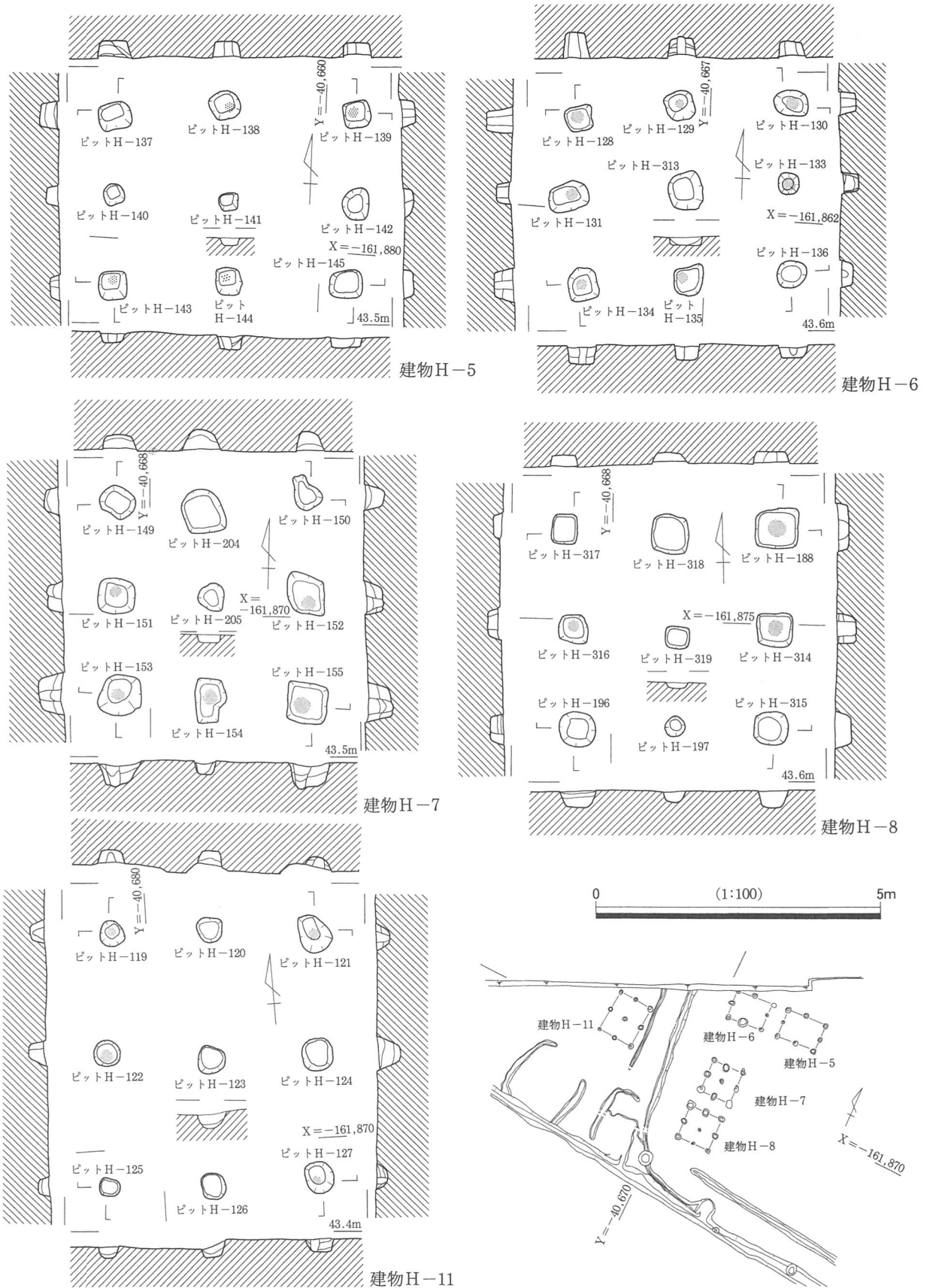
柱穴の掘り方は北側の建物H-5・6に比して大きく、一辺40～80cmの方形を呈している。残存する深さは平均で37cmである。なお、この建物では一部の柱穴で柱痕跡が認められず、柱の抜き取り痕跡が確認できる。遺物はまったく出土していない。

(6) 建物H-8 (図Ⅱ-23・25、写Ⅱ-15-4)

建物H-7の南側2mで近接して検出した掘立柱建物跡である。構造は桁行2間、梁行2間の総柱建物である。規模は3.6m×3.4mを測り、面積は12.2㎡、建物の軸線はおおむねN-2°-Wで近接して検出した建物H-7と同規模である。柱穴の掘り方は方形を呈し、一辺40～90cm、残存する深さは平均で37cmである。

なお、この建物では一部の柱穴では柱痕跡が認められず、柱の抜き取り穴は確認できないものの、柱が抜き取られた可能性もある。遺物はまったく出土していない。

なお、当該建物を構成するピットH-316は土坑H-47に切られている。この土坑H-47からは須恵器杯Gが出土しており、当該建物の時期を推定する上での一助となっている。



図Ⅱ-25 建物H-5・H-6・H-7・H-8・H-11平面・断面図

(7) 建物H-9 (図Ⅱ-23・26、写Ⅱ-9-2、17-2)

H地区の東寄り、建物H-3の南東側10mで検出した掘立柱建物跡であり、溝H-58などによって区画されている。構造は桁行3間、梁行2間の南北棟建物である。規模は6.0m×3.6mを測り、面積は21.6㎡を測る。柱間寸法は最長2.0m、最短で1.6m、平均して1.8mを測る。建物の軸線はおおむねN-2°30'-Wである。

柱穴の掘り方はいずれも方形を呈し、一辺60～80cm、残存する深さは平均で40cmである。なお、西側桁行柱列では南西方向に柱の抜き取り痕跡が確認でき、これ以外の柱穴でも柱痕跡は一部の柱穴で確認できるのみであり、基本的には柱の抜き取り行為があったものと判断される。

なお、すでに触れたように当該建物は溝によって区画されるが、とくにL字状の溝H-58との関係では北側、西側ともに4.4mの距離を隔てており、計画的に造営が行われていることが看取される。また、西側では建物のほぼ正面にあたる部分に陸橋が掘り残されており、通路としての機能を想定することが可能である。

(8) 建物H-10 (図Ⅱ-23・26、写Ⅱ-9-2、17-2)

建物H-9と重複して検出した掘立柱建物跡である。構造は2間×2間であるが、南北方向に長い長方形プランを呈する。規模は4.8m×3.2mを測り、面積は15.4㎡を測る。建物の軸線はおおむねN-2°-Wである。

柱穴の掘り方はいずれも方形を呈し、一辺50～70cm、残存する深さは平均で37cmである。明確な抜き取り穴が確認されないものの、いずれの柱穴ともに他の建物跡の柱穴に見られるような柱痕跡は確認できない。

なお、当該建物は建物H-10と切り合い関係にあり、先行するものである。また、当該建物の西側柱列は後述する建物H-14の東側柱列と軸を一にしている状況が看取できる。

(9) 建物H-11 (図Ⅱ-23・25)

H地区の建物群中で最も西側で検出した掘立柱建物跡である。構造は2間×2間の総柱構造を有するものであり、南北方向がわずかに長い長方形プランを呈している。規模は4.4m×3.6mを測り、面積は15.8㎡を測る。建物の軸線はおおむねN-2°-Eである。

柱穴の掘り方は円形に近い隅丸方形を呈し、一辺40cm前後を測る小振りのものが多い。残存する深さは平均で32cmである。明確な抜き取り穴が確認されないものの、柱痕跡は一部の柱穴でのみしか確認できない。

(10) 建物H-12 (図Ⅱ-23・27)

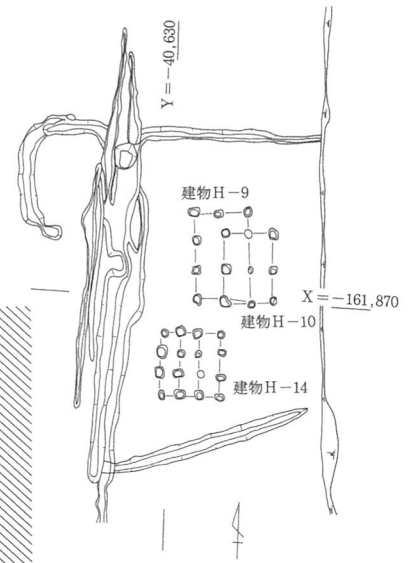
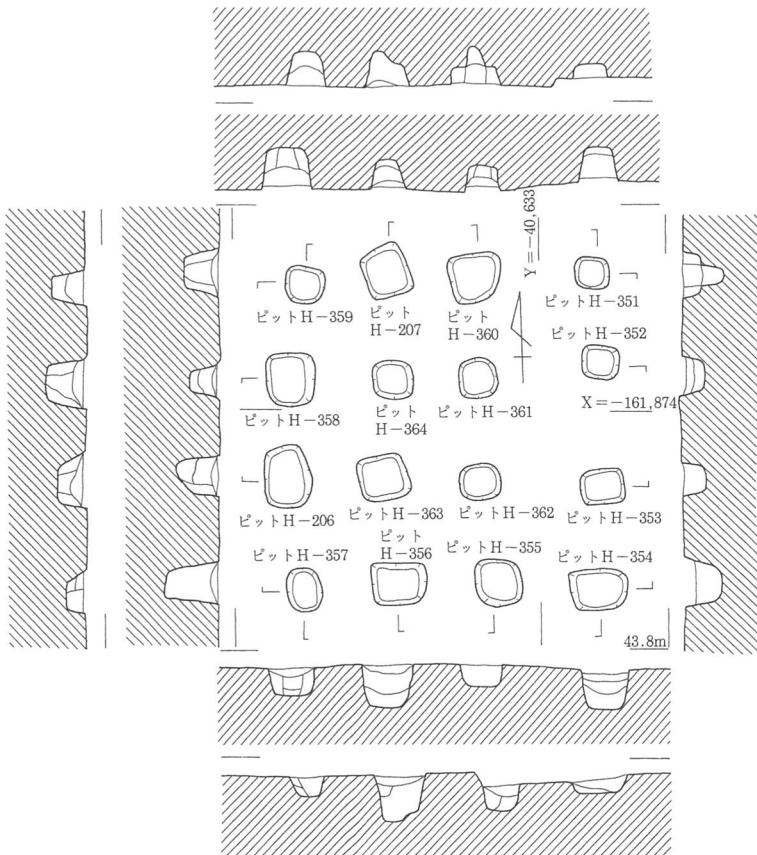
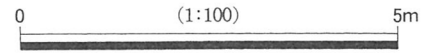
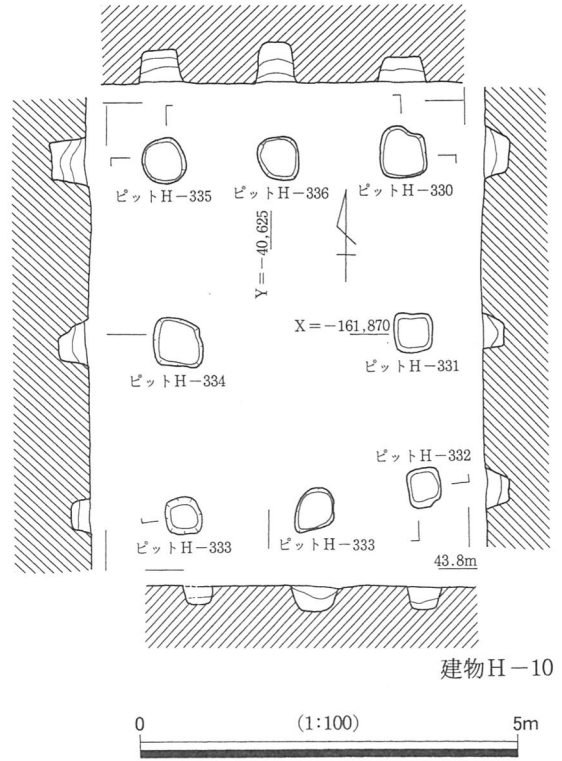
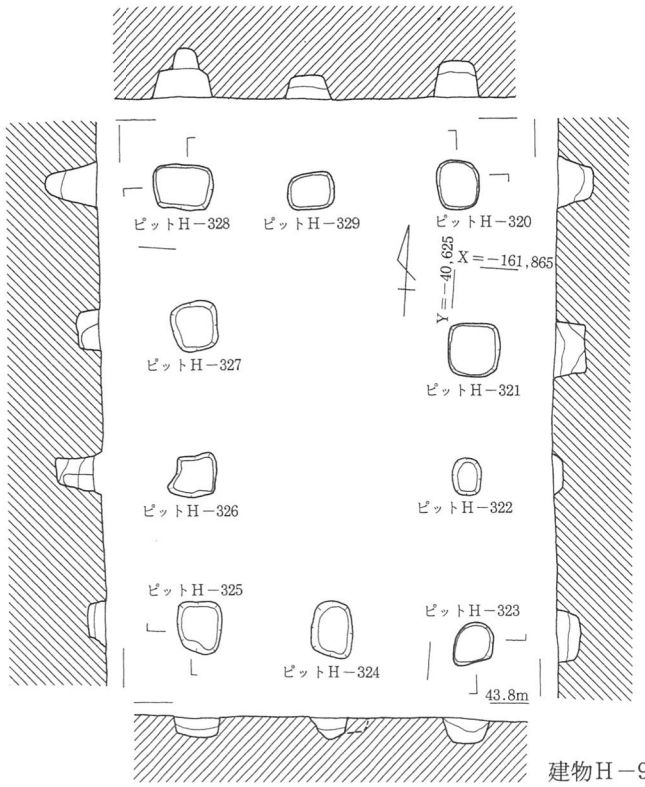
建物H-8の南約13mに位置し、すでに報告を行ってきたH地区北半の建物群とはやや距離をおいている。構造は桁行2間、梁行2間の建物であり、東西方向がわずかに長い長方形プランを呈している。規模は4.2m×3.0mを測り、面積は12.6㎡を測る。建物の軸線はおおむねN-4°-Eである。

柱穴の掘り方は隅丸方形を呈し、一辺40～70cm前後を測る。残存する柱穴の深さは平均で29cmである。一部の柱穴では柱痕跡が確認できる。

なお、当該建物を構成するピットH-340は7世紀後半以降の土器を包含する溝H-71に切られており、年代推定の一助となっている。

(11) 建物H-13 (図Ⅱ-23・27)

建物H-12の南約10mに位置し、H地区北半に集中する建物群とはやや距離をおいている。



図II-26 建物H-9・H-10・H-14平面・断面図

構造は桁行2間、梁行2間の建物であり、南北方向がわずかに長い長方形プランを呈している。規模は4.2m×3.9mを測り、面積は16.4㎡を測る。建物の軸線はおおむねN-19°-Eである。

柱穴の掘り方は一辺40cm前後の隅丸方形を呈し、柱穴の深さは現状で平均で27cmである。北側の柱穴列では明瞭に柱痕跡が確認できる。

なお、当該建物の西側柱列中央の柱穴は須恵器杯Bを出土する溝H-8に切られて消滅している。

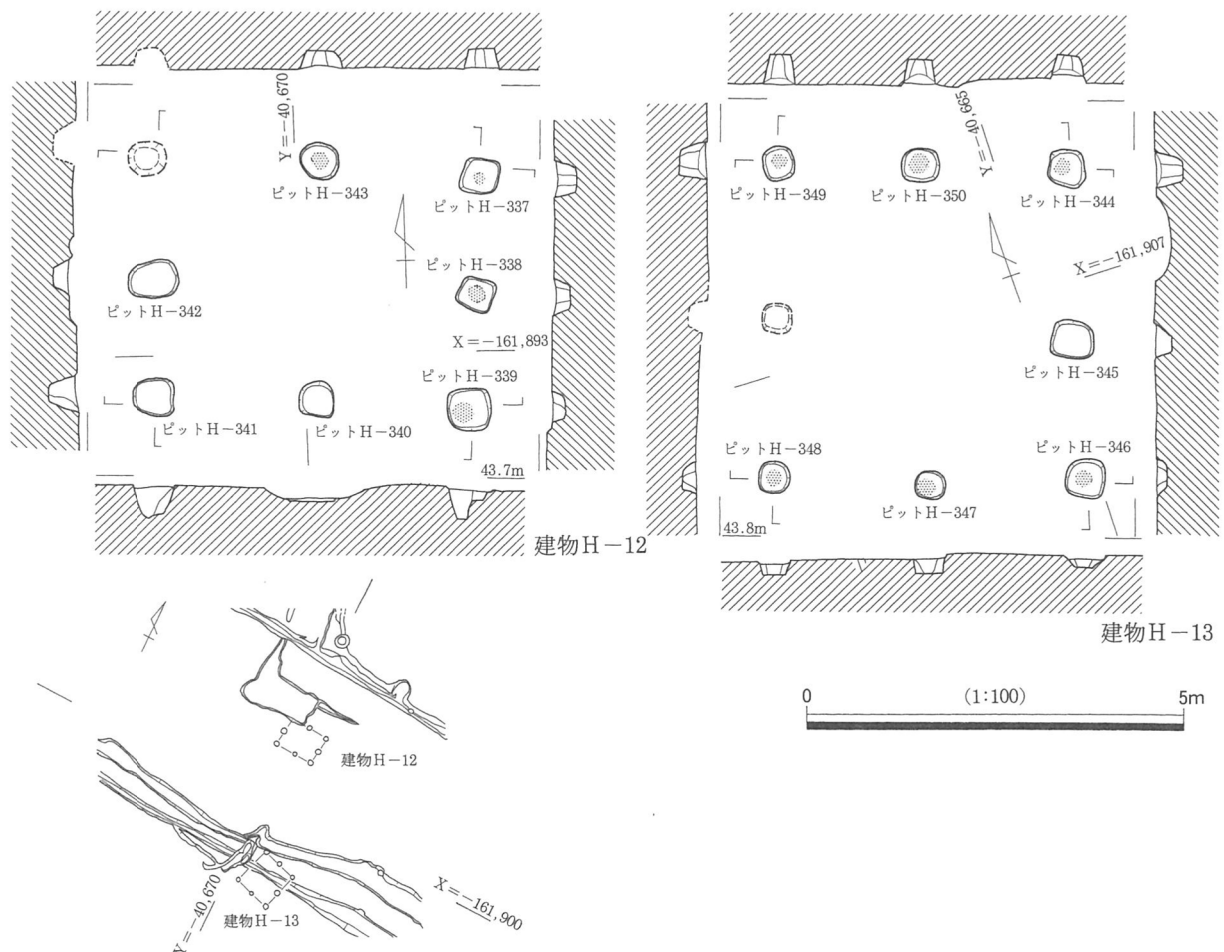
(12) 建物H-14 (図Ⅱ-23・26、写Ⅱ-9-2、17-2)

建物H-9・10の南側から近接して検出した掘立柱建物跡であり、溝H-58に囲まれた区画内に包括される。構造は3間×3間の総柱建物であり、南北方向にわずかに長い、ほぼ正方形に近い平面形を呈している。

規模は4.2m×4.0mを測り、面積は16.8㎡である。建物の軸線はほぼ座標北にのっている。

柱穴の掘り方は一辺40cm～80cmを測る方形プランをもつものであり、深さは平均して41cmである。なお、一部の柱穴を除けば柱痕跡は見いだせず、抜き取り穴は明瞭ではないが、柱が抜き取られている箇所も存在すると考えられる。

なお、当該建物は東側柱列の延長が建物H-10の西側柱列にあたるほか、同様に建物H-9の中軸線にも対応している状況を看取することができる。また、巨視的に見た場合、当該建物の南側柱列を西に向かってのぼすと、建物H-8の南側柱列に近い部分を通ることとなり、出土遺物が少ない中において建物造営の併存関係を考える上においては重要である。



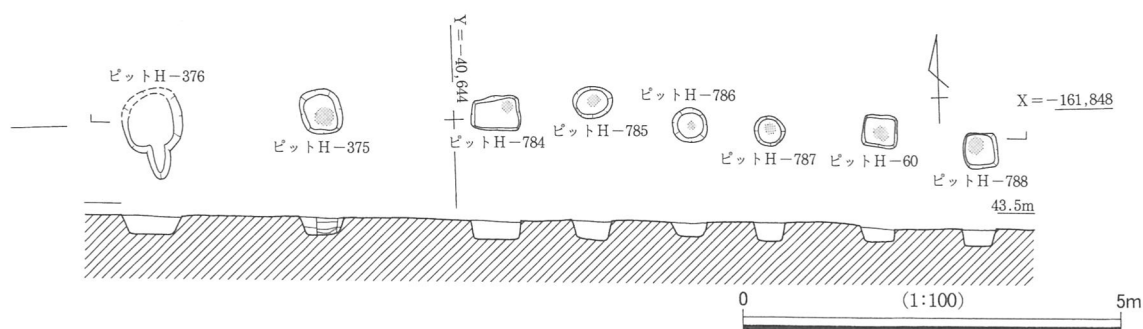
図Ⅱ-27 建物H-12・H-13平面・断面図

2. 柵

(1) 柵H-1 (図II-23・28)

H地区の北東で検出した東西方向の柵列である。北側には平行して溝H-53および溝H-54が掘削されており、南側に展開する建物群の北側を画するものと考えられる。柱穴は円形プランのものと方形プランのものが混在しており、大きさは一辺40～80cm、深さ25cm前後を測る。柱間寸法は最短で1.1m、最長で2.4mとかなりばらつきがある。

必ずしも直線的に並ばず、柱間寸法もまちまちであるが、他の遺構との位置関係などから、建物を区画する柵列であると考えておきたい。また、後に報告を行うがI地区の南東で検出した柵列I-2も同様に北側に2条の溝が掘削されており、同じような構造を有している状況が看取できる。



図II-28 柵H-1平面・断面図

3. 溝

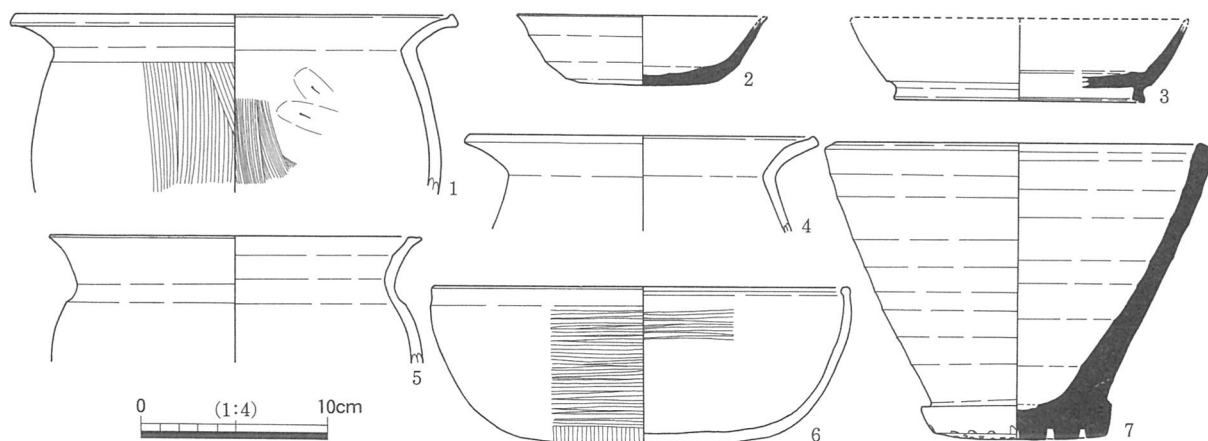
(1) 溝H-8

A. 遺構の状況 (図II-23)

G地区の南西隅、H地区の南東隅から西に86m以上続く溝である。正方位を指向する溝であり、条里区画とも関連して掘削されたものであると考えられる。東端は調査範囲外にのびているが、西端は地形的に低くなるI地区にはいって収束する。幅は平均して1.3m、深さは40cm前後である。

B. 出土遺物 (図II-29、写II-44-6～8)

出土遺物は土器のみであり、土師器では鉢・甕、須恵器では杯A・杯B・すり鉢が出土している。甕のうち、(5)はいわゆる南河内型である。必ずしも残りはよくないが、杯Bが出土しており、その埋没年代が少なくとも7世紀には遡らないことを示している。



図II-29 溝H-8出土土器

(2) 溝H-53

A. 遺構の状況 (図II-23)

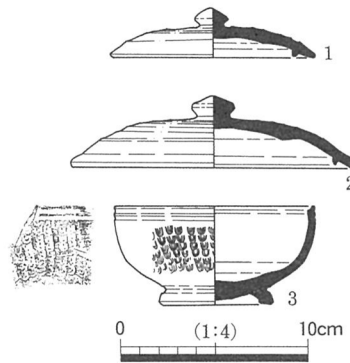
H地区の北東から検出した東西方向の浅い溝である。東側は完結しているが、西側は調査範囲外にのびている。南側で検出した溝H-1および北側で検出した溝H-54とは平行しており、総体として建物群の北側を画する区画であると考えられる。

B. 出土遺物 (図II-30・31-1、写II-45-1,2,5,10)

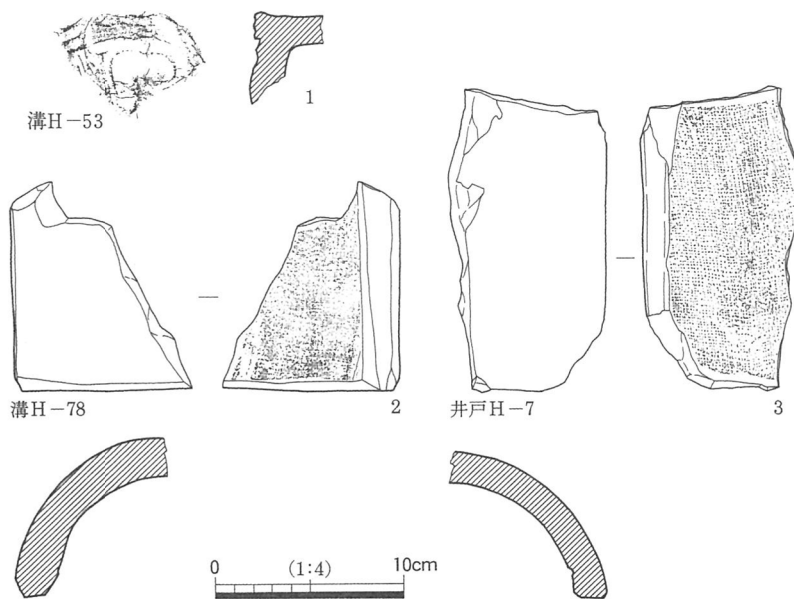
土師器・須恵器が出土しているが、土師器はいずれも細片であり、図化に耐えうる資料はない。図には須恵器および統一新羅の陶器を掲げている。(30-1) および (30-2) は杯G蓋、(30-2) については法量が大きく、あるいは杯Bの蓋になる可能性も残る。

(30-3) は椀形の体部と口縁部の2条の凹線、スタンプによる施文が特徴的である。形態や施文などの点で統一新羅のいわゆる印花文陶器である。本来はかえりを有する蓋がセットとなるものであり、盒と称される器種にあたる。なお、体部外面には縦方向に連続するU字形の文様が施されるが、その文様の施文原体は縦一列が一体となったものであることが看取される。胎土・焼成ともに堅緻であり、統一新羅からの搬入品であると判断される。

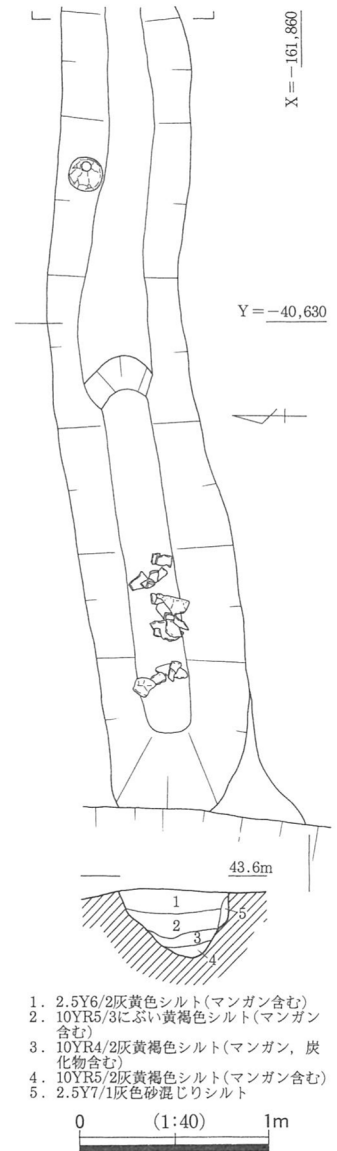
(31-1) は細片ではあるが、当調査区で出土した唯一の瓦当である。外縁に圈線が巡らされる点や蓮弁の形状が特徴的であり、細片のために断定はできないが上田睦氏による西淋寺式軒丸瓦C3類(善正寺式)の軒丸瓦の範疇で捉えることができるものと判断される。型式は上田分類のC3-B型式か。



図II-30 溝H-53出土土器



図II-31 H地区溝・井戸出土瓦



図II-32 溝H-58平面・断面図

1. 2.5Y6/2灰黄色シルト(マンガン含む)
2. 10YR5/3にぶい黄褐色シルト(マンガン含む)
3. 10YR4/2灰黄褐色シルト(マンガン、炭化物含む)
4. 10YR5/2灰黄褐色シルト(マンガン含む)
5. 2.5Y7/1灰色砂混じりシルト

(3) 溝H-57

A. 遺構の状況 (図II-23、写II-13)

建物H-3の東側で検出した南北方向の溝である。建物H-3と呼应するように南北で収束しており、同建物に関連する溝であると考えられる。

B. 出土遺物 (図II-33)

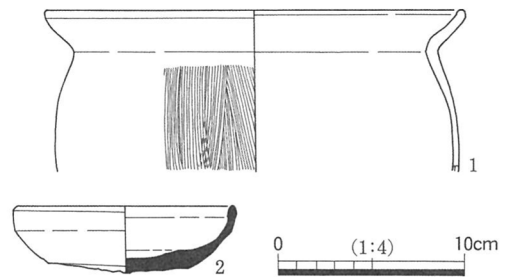
土師器・須恵器がわずかに出土しているのみである。(1)は土師器甕、(2)は須恵器杯Gである。(2)は体部と底部の境界が明瞭ではなく、杯Hの蓋の可能性も残る。しかしながら、後に報告する溝H-63での杯Gの形態をみる限りにおいては当該土器は杯Gの範疇で捉えるべきものであると考えられる。ちなみに周辺の遺構からは杯Hの身は細片ですら出土していない。

(4) 溝H-58・60

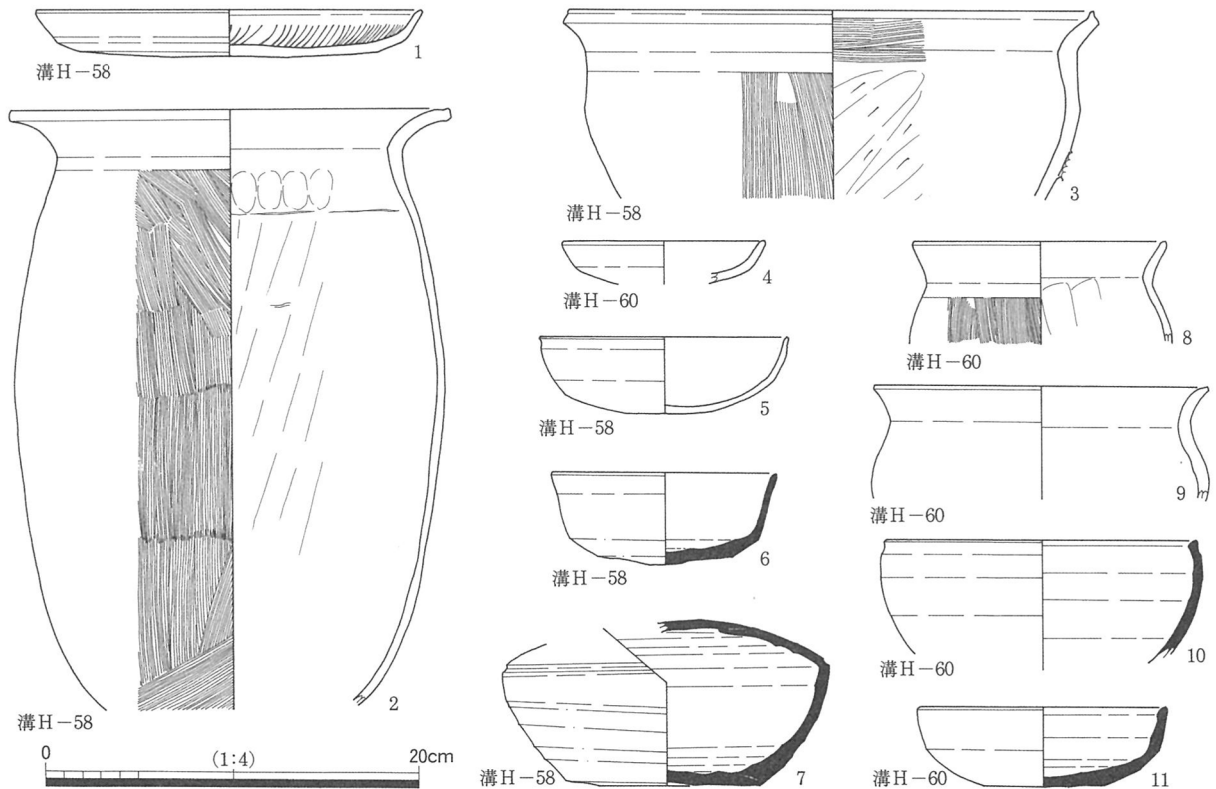
A. 遺構の状況 (図II-23・32、写II-9・17)

溝H-58はすでに報告を行った建物H-9・10・14を囲むようにして検出したL字形の溝である。北辺では平瓶などの土器が比較的まとまって出土している(図II-32)。埋土は人為的に埋められた状況を呈しており、遺物については埋め戻しの際に混入したものであると考えられる。

また、西側では建物H-9の項でも触れたように、建物H-9のほぼ正面となる部分に上端で幅1m弱のブリッジ状の掘り残しが認められる。また、この部分ではほぼ中央から柱穴が検出されているが、同時に掘られたものかは不



図II-33 溝H-57出土土器



図II-34 溝H-58・H-60出土土器

明である。

また、溝H-58の東側では平行する溝H-60を検出している。この溝は南では溝H-78に接続する。小規模な溝ながら比較的多くの遺物が出土している。

B. 出土遺物 (図II-34、写II-45-3,4,6~9)

溝H-58からは土師器・須恵器が出土している。土師器には杯C・皿・甕・鍋などがあり、須恵器では杯Gのほか、平瓶が出土している。平瓶(7)は口縁部を欠失しているものの、正位でほぼ完形で出土したものである。(5)の杯Cは器表面があれており暗文は観察できないものの、径高指数は30であり、年代推定の一助となる。

出土遺物が人為的に埋められた際のもので、埋没年代を示すものと考えれば、当該溝は奈良時代には埋められていたと考えられる。

(5) 溝H-63

A. 遺構の状況 (図II-23・35・36、写II-16・19-1)

H地区のほぼ中央を東西にはしる溝である。すでに報告した建物群の南を画する溝であり、ほぼ磁北に直交する方向を指向する。検出長は82mであり、幅は平均で1.3m、深さは一部に土坑状の落ち込みが見られるものの、平均して31cmを測る。

東側はH地区とG地区の境界部分の現在の用水路部分で不明瞭となるが、少なくともこれを貫いてG地区まで続いていく状況は見いだしがたい。なお、上記の南北用水路に切られながらも重複して溝H-9を検出しており、当該溝を東限としていた可能性が高い。

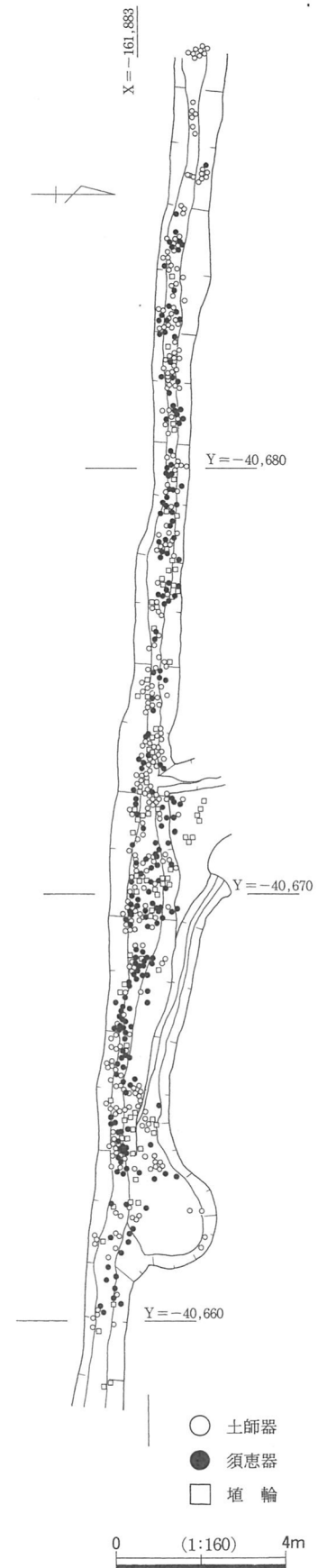
なお、西側はH地区西端で途切れている。しかし、これは現代までの耕作にともなう南北方向の段差に対応しており、本来はもう少し西にのびていた可能性が高い。

しかし、南北方向の段差は最終的には現代の耕作によって形成されたものであるが、地形的にもこれを境に西側は開析谷となっており、また、これ以西では遺構の分布が希薄となることから、この段差の辺りが古代においても建物群の西限であった可能性も考慮しておく必要がある。

埋土の状況は他の多くの溝と同様に流水による水成堆積は認められない。また、当該溝では下層を中心に埴輪片を含む比較的多くの遺物が出土しており、とくに井戸H-10付近を中心とする30m前後の範囲に集中する傾向が看取できる。

B. 出土遺物

溝H-63からは須恵器・土師器のほか、埴輪片、さらには金環が1点出土している。以下では土器を先行して報告し、金環および埴輪については後述することにした。



図II-35
溝H-63遺物出土分布

須恵器 (図Ⅱ-37-2~15・38、写Ⅱ-46・47-2~4,6~8)

当該溝から出土した須恵器の多くは杯や皿などの供膳具であり、これ以外に甕などの瓶類がわずかに出土しているのみである。

杯には杯Bと杯Gがある。杯Gの身には底部と体部の境界が明瞭な一群(38-9~16)とあたかも杯Hの蓋を天地逆にしたような大振り的一组(38-17~33)に分かれる。また、前者では口径が10cm以下のものと10cmを越えるものとにわかれる状況が看取される。なお、後者の一群については一瞥しただけでは杯Hの蓋のようではあるが、これを杯Hの蓋とした場合、それに見合う杯身が皆無であることや、法量的にみて同時に出土した杯G蓋に対応することなどから、杯Gであると判断している。

(38-1~8)の杯蓋はいずれもかえりをもつものであり、杯身同様に法量的には2種類程度に分類できそうである。なお、これについては杯Gの蓋となるものが多いことは認めてよいが、大振りの一群では杯Bの蓋として使われたものも含まれているものと判断される。

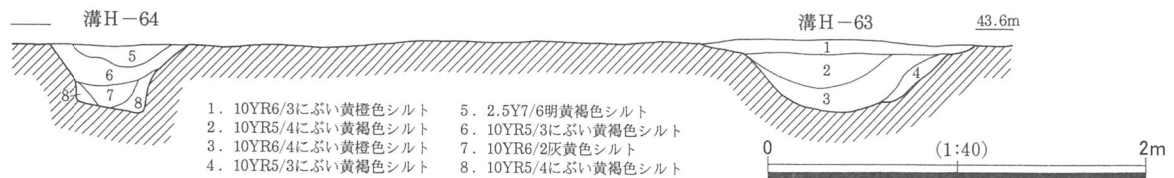
(37-6~10)は杯Bであり、(6)は口径9.9cmの小型品である。高台部分が外方に強く張り出すものと断面方形を呈するものにわかれ、後者などは奈良時代に下っても違和感のないものである。

これ以外に須恵器では皿(37-13)・鉢(38-35)・大型蓋(38-34)のほか、壺・瓶類(37-2~5,9,38-29)や甕(38-30~32)などが出土している。

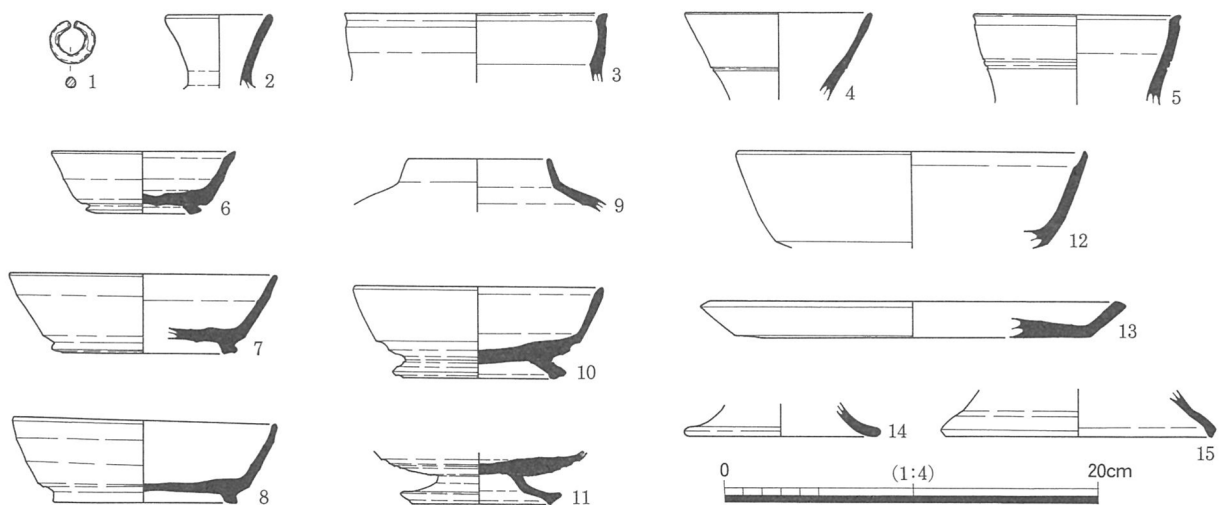
土師器 (図Ⅱ-39、写Ⅱ-48-1~4,6~8・49-1~3)

当該溝から出土した土師器には杯・鉢・壺・甕・鍋・甑などがある。出土破片数のみでは先に報告した須恵器を大きく上回るものの、埋没条件のためか、土師器の残りはきわめて悪く、図化可能な形まで復元できるものは少ない。

したがって、ここでは図Ⅱ-39の30点の土師器しか掲げていないが、その背景には復元不能な多数



図Ⅱ-36 溝H-63・H-64断面図



図Ⅱ-37 溝H-63出土遺物(1)

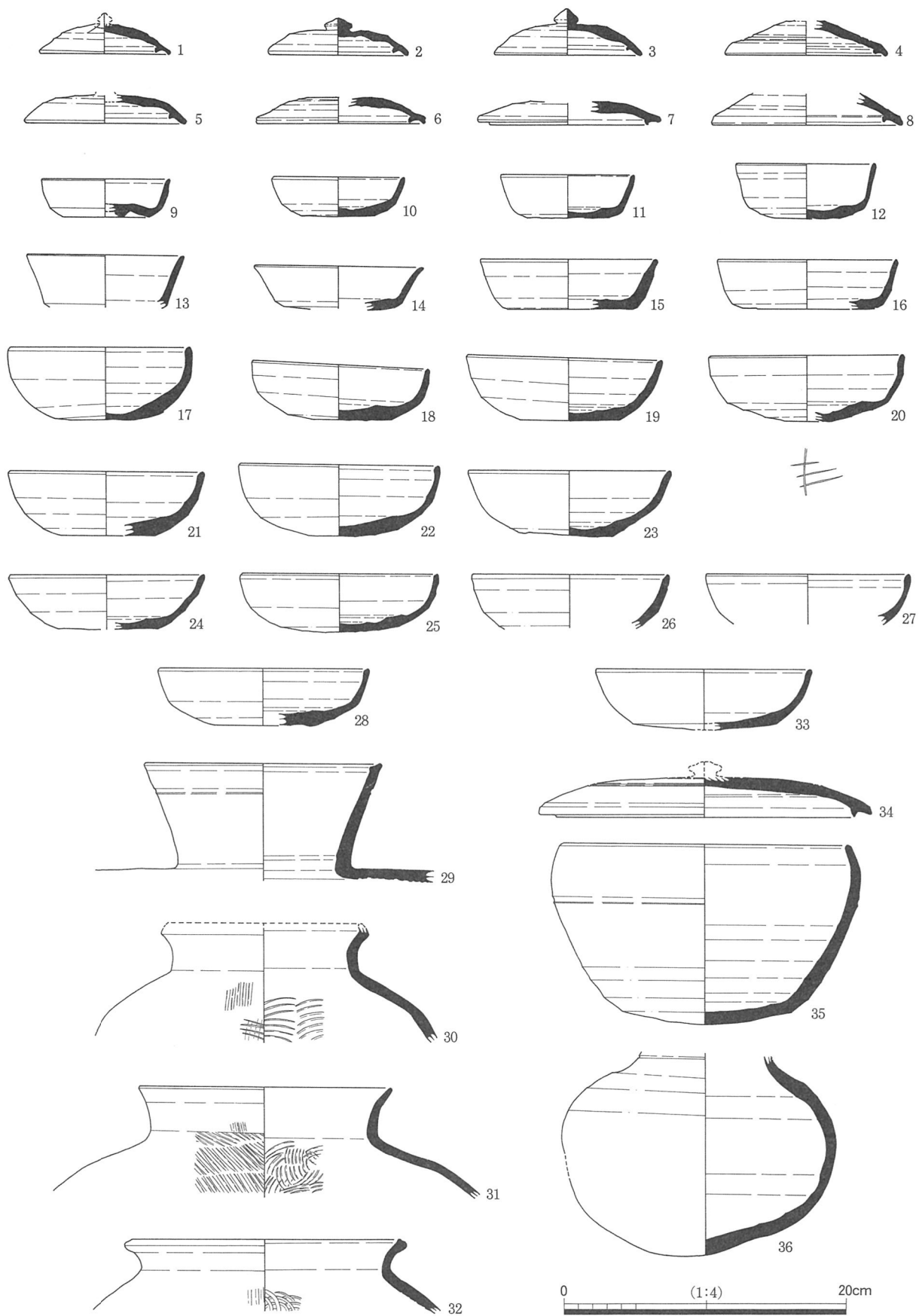
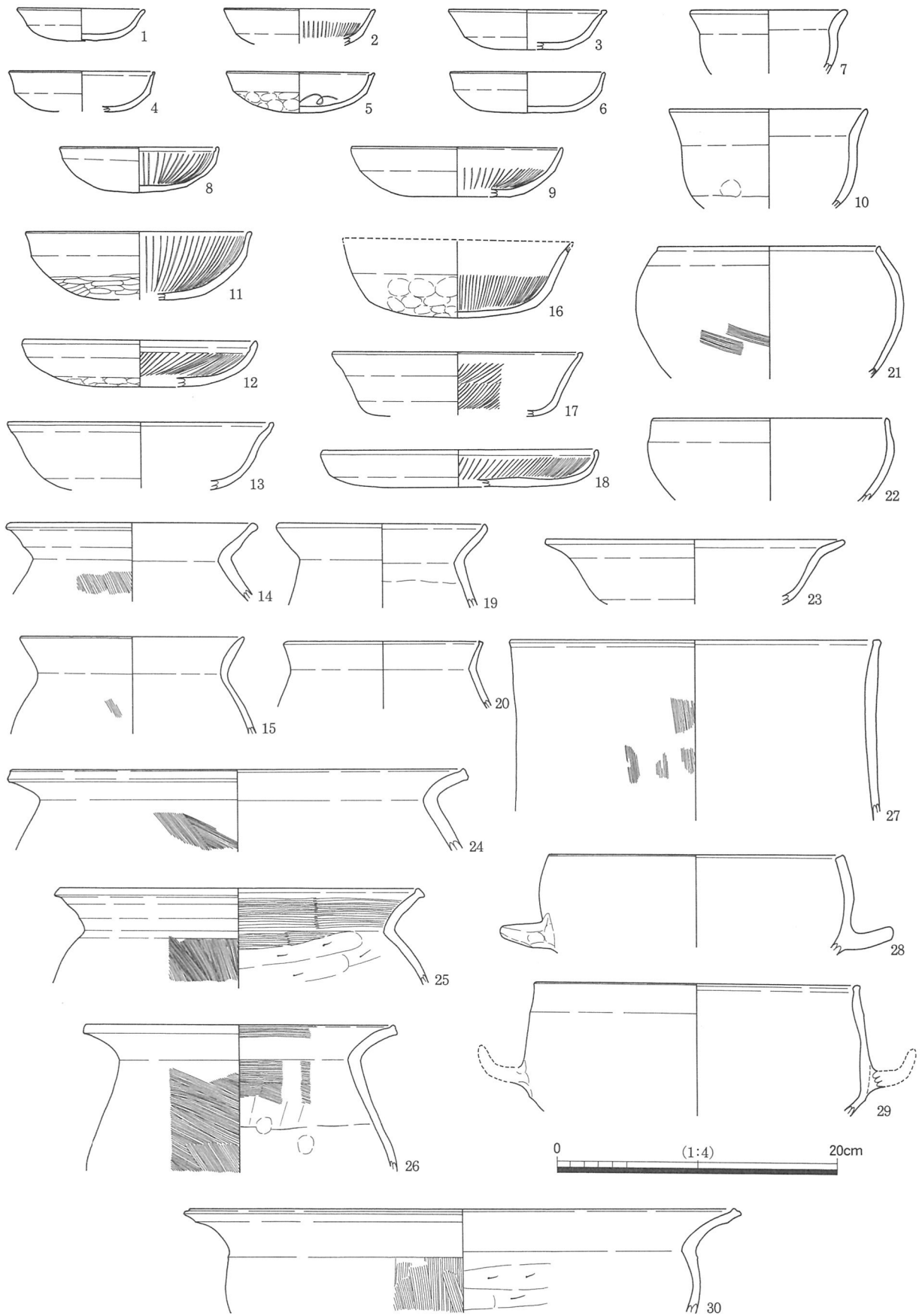


图 II -38 溝H -63 出土遺物 (2) 須惠器



図Ⅱ-39 溝H-63出土遺物(3) 土師器

の土師器片があることを留意しておきたい。

さて、杯は図化しえなかった破片を含めて杯Cが主流を占めている傾向を看取することができるが、出土土器中には杯A（13,16,17）が一定の割合で確実に含まれている。

また、他の遺構では土師器甕の中に一定程度のいわゆる南河内型甕が含まれているのに対して、当該遺構ではその数はきわめて少ない。

いずれにしても杯Aを含むことは明らかであり、当該溝の埋没は7世紀末葉ないしは8世紀初頭以降であると判断できよう。

金属製品（図Ⅱ-37-1、写Ⅱ-47-1）

溝H-63からは上記の土器以外に金属製品として金環が1点出土している。最大径は2.5cm、断面はほぼ円径を呈し、直径は約5mmである。錆化著しく、表面の状況は不明である。古墳から流出したものと考えられるが判然としない。

埴輪（図Ⅱ-48-2～4、写Ⅱ-53-1,2,5）

溝H-63からは土器に混じって比較的多くの埴輪片が出土している。ここではすべてを報告することはないが、鋸歯文が施文される特徴的な円筒埴輪のみを抽出して掲げておくことにしたい。

いずれの埴輪も円筒埴輪の上部の破片と考えられるものであり、調整はタテハケ1次調整のみである。鋸歯文は線刻によって施文されているが、波状文のごとく鋸歯文を連続的に施文するもの（2）と一画ずつ丁寧に線刻するもの（3,4）に分かれる。なお、同様の文様をもつ埴輪片が井戸H-10からも出土しており、その特徴からいわゆる日置荘窯系の埴輪であるといえる。

（6）溝H-64

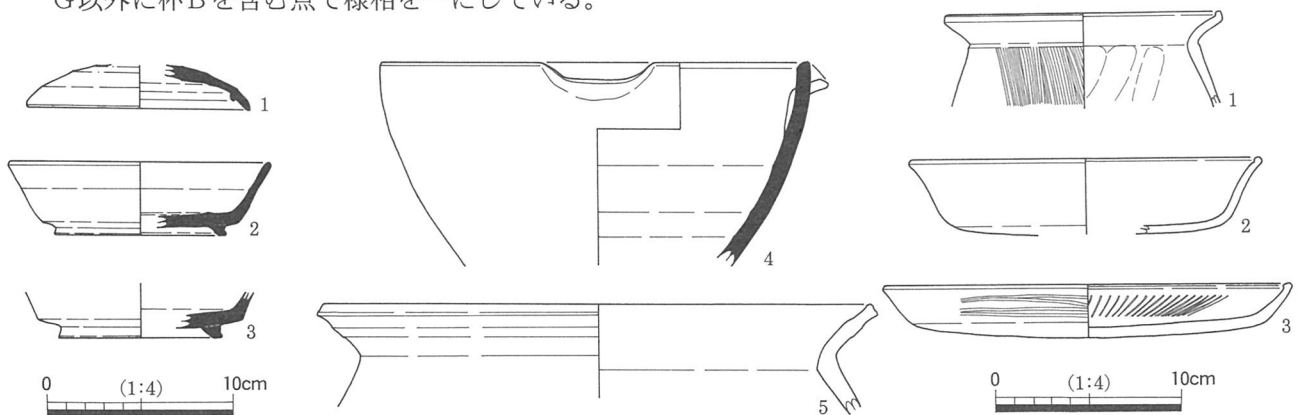
A. 遺構の状況（図Ⅱ-23・36、写Ⅱ-10）

溝H-63の北側で平行する形で検出した東西方向の溝である。溝H-58の南端付近を東端とし、西側は溝絵落ち68の東側で収束する総延長30.5mの溝である。幅は平均して80cm、深さは30cmを測る。溝H-63との間隔は心々距離で3.8m前後、上端では2.5m前後を測る。

溝H-63とはほぼ完全に平行していることや他の溝との配置などを勘案するならば、掘削の先後関係は別として同時存在であった可能性が示唆され、とくに溝H-63との関係でいえば、両溝間の遺構は希薄であり、通路などの機能を有していた可能性も考慮しておきたい。

B. 出土遺物（図Ⅱ-40、写Ⅱ-49-4,5）

当該溝からは須恵器では杯G蓋・杯B・片口鉢、土師器では甕が出土しており、溝H-63と同様に杯G以外に杯Bを含む点で様相を一にしている。



図Ⅱ-40 溝H-64 出土土器

図Ⅱ-41 溝H-65 出土土器

(7) 溝H-65

A. 遺構の状況 (図II-23、写II-34-1)

H地区の南西端で検出した東西方向の溝であり、後述する溝H-66と平行している。検出長は6.5m、幅80cmを測る。なお、当該溝は西側では不明瞭となるが、I地区で検出した溝I-86がほぼ延長線上で検出されており、これに接続していた可能性も残る。

南側では近接して柵I-2を検出しており、一連の区画を構成するものであると考えられる。また、北側で検出した溝H-66とは心々距離で3.5mの間隔で平行している。

B. 出土遺物 (図II-41)

土師器・須恵器が出土しているが、須恵器では図化できるものはない。土師器は杯A・皿A・甕が出土している。(2)の杯Aは器表面があれており、暗文は不明である。(3)の皿Aは内面に斜放射暗文、外面は横方向のミガキを施すものである。

(8) 溝H-66

A. 遺構の状況 (図II-23)

H地区の南西端で検出した東西方向の溝であり、その西側はI地区にのびているが、遺構名を総括して溝H-66としていることからここで報告する。この溝は上記溝H-65および柵I-2と平行する形で検出したものであり、すでに報告を行った溝H-53と溝H-54、溝H-63と溝H-64の関係と似ている。ただし、遺構を俯瞰すると北半で検出している東西溝群とは微妙に方向を異にしている。

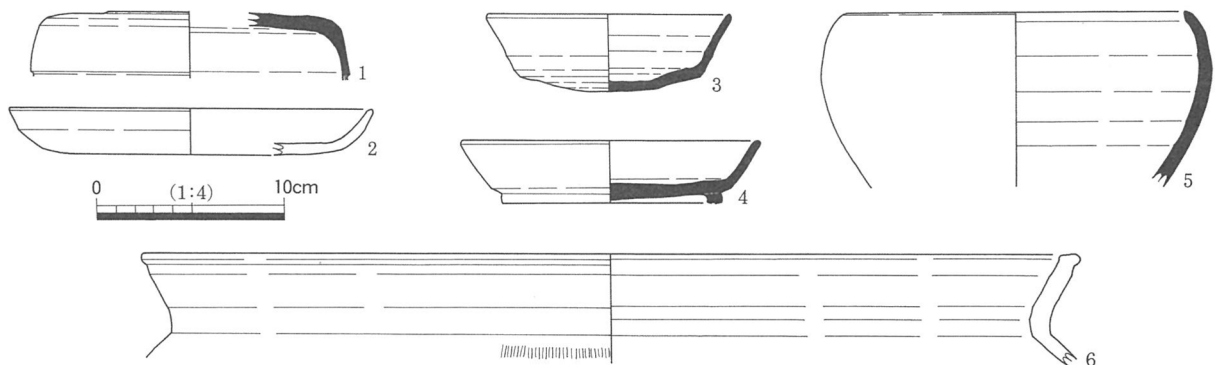
検出長は29.5mであるが、東端は調査範囲外にのびている。西側は地形的に低くなる部分で収束している。当該溝は最大幅1.7m、深さ45cmを測るものであり、当地区で検出した溝としては規模が大きい部類に属する。

なお、当該溝で特徴的な点は溝の北側では遺構がきわめて希薄であるのに対して、南側では数多くのピットが検出されている点であり、溝H-65および柵I-2とともに南側に展開する遺構群の北端を画する区画溝であると判断される。

B. 出土遺物 (図II-42・68-8・69-2、写II-52-7,8・69-1)

土器のほかにトリベ・轆羽口などの鋳造関連遺物が出土している。

土器では須恵器杯A・杯B・鉢のほか、壺Aの蓋と考えられるものが出土している。また、土師器では皿A・大型の壺が出土している。なお、当該溝からは破片を含めて須恵器杯Gは出土しておらず、先に報告を行ったH地区北半の遺構群よりも新しい様相を呈している。



図II-42 溝H-66 出土土器

鑄造関連遺物ではほぼ関係となるトリベと鞆羽口が出土している。トリベ (68-8) は半裁した甕胴部を転用するものであり、一箇所に注口が付されている。鞆羽口 (69-2) は送風孔が煙管状に横方向に向くものである。これらの鑄造関連遺物については、後に報告する鑄造関連遺構の項で詳述する。

後述する鑄造関連遺構は奈良時代前半のものと考えられ、当該溝から鑄造関連遺物が出土している事実は当該溝の埋没が少なくとも奈良時代前半以降であることを示している。実際、出土した土師器も年代的に矛盾するものではなく、H地区北半の遺構群に比して新しい様相を示すものといえる。

(10) 溝H-69・70

A. 遺構の状況 (図II-23)

溝H-69はすでに報告した溝H-8と溝H-63の間から検出した東西方向の溝である。また、溝H-70はそれに直交する形で検出した南北方向の溝である。下記の通り、わずかながら古代の土器が出土しており、奈良時代以前の遺構であると考えられるが、その性格は不明である。

B. 出土遺物 (図II-43、写II-52-1)

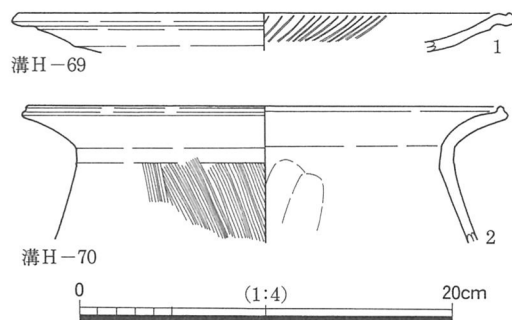
溝H-69からは土師器高杯 (1) が、溝H-70からは土師器甕 (2) が出土している。

(11) 溝H-74

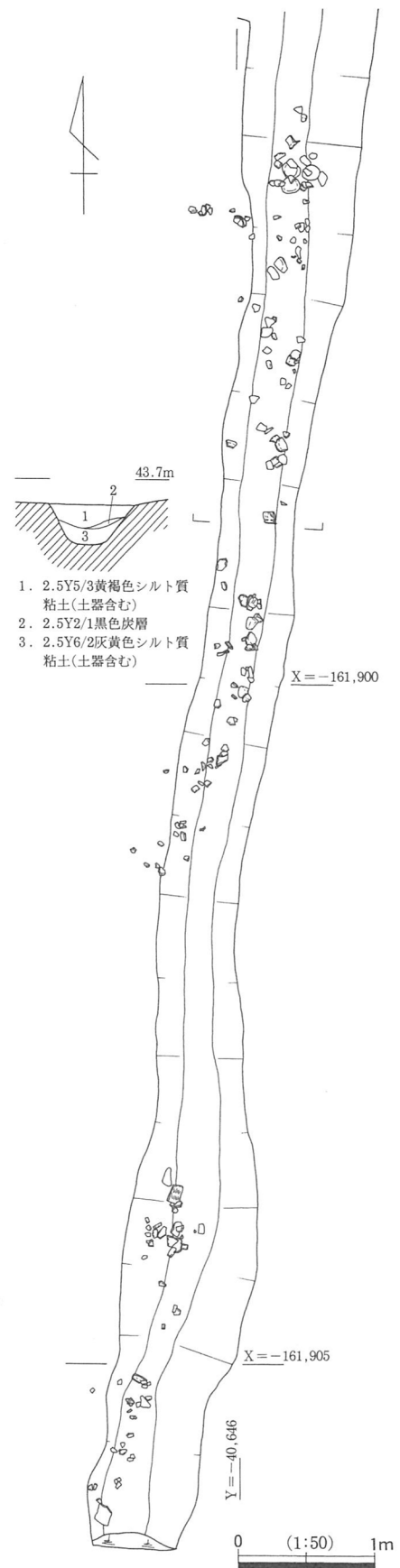
A. 遺構の状況 (図II-23・44、写II-23-4・25-2)

鑄造工房H-3の南東端を発し、鑄造工房H-2の東側を共有しながら南側調査範囲外へと伸びる南北方向の溝である。検出長は44.5mであり、北側での幅は70cm前後であるが、南側では幅が広く1.8m近いところもある。深さは最大で37cmである。

なお、この溝は地形の傾斜とは逆に北側が高く、南側が低い。ちなみに検出範囲内での比高差は30cm前後である。南側での状況は不明であるが、少なくとも水は鑄造工房H-3に流れ込むのではなく、鑄造工房H-3からの排水を意図したものである可能性が高い。



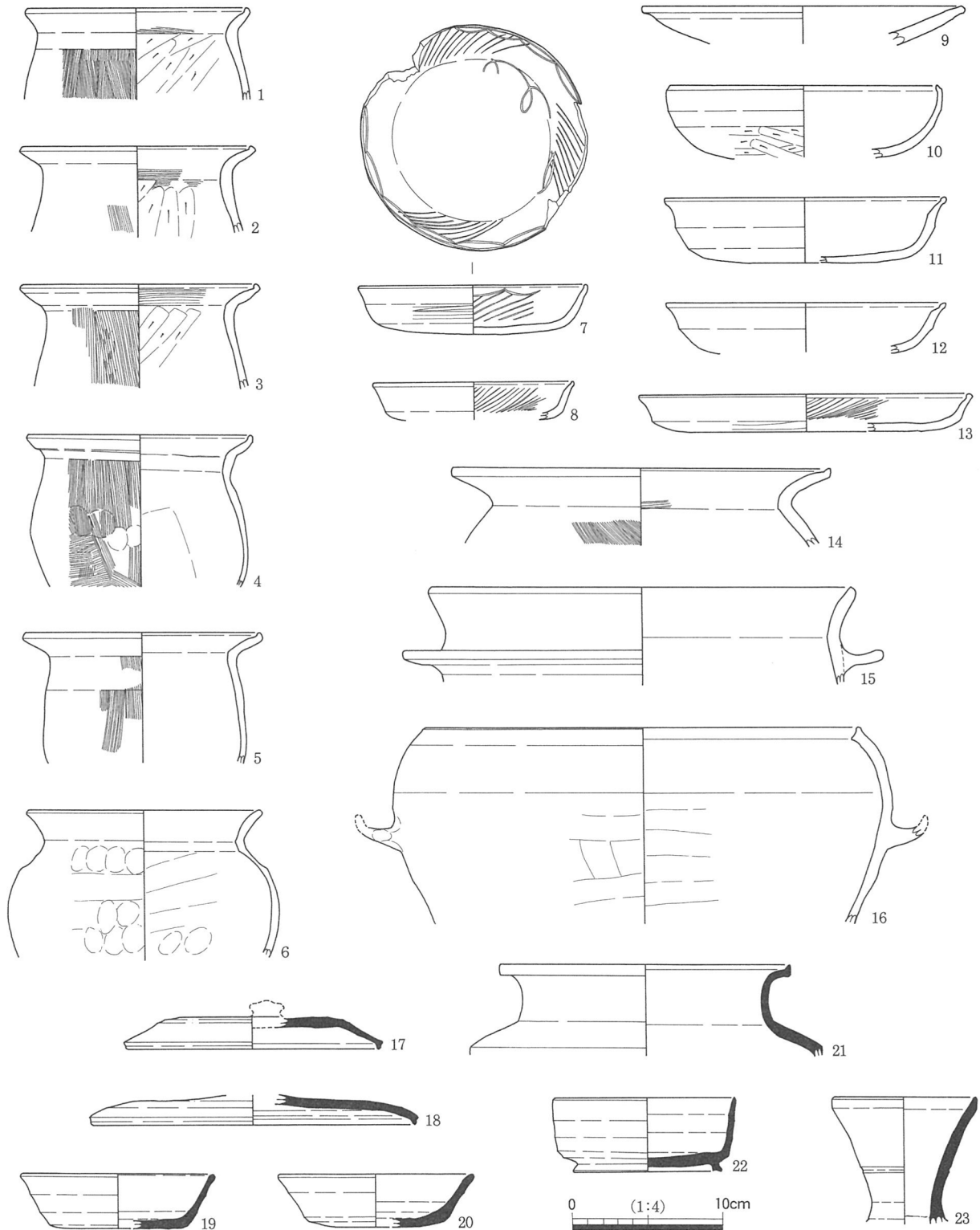
図II-43 溝H-69・H-70出土土器



図II-44 溝H-74平面・断面図

断面形状は北側では緩やかなV字形を呈し、南側では浅いU字形を呈している。また、切り合い関係からは遺構の先後関係として溝H-8に後出するものであることが判明している。

埋土は鑄造工房H-3との接合部分を中心として鑄造工房H-3の下層炭層に対応する炭層が間層もしくは下層埋土として堆積しており、その上面には地山土を起源とする土砂が堆積している。ただし、



図II-45 溝H-74出土土器

顕著なかたちで流水もしくは滞水の状況は認めがたい。

なお、北側部分では炭層部分を中心に多量の遺物を包含しており、層位的にも切り合い関係からも両者は併存していた状況が看取され、鑄造工房との関連で掘削された遺構であると考えられる。なお、その性格については調査所見からは断定はできないものの、少なくとも鑄造工房H-3から南側に向かって溝底が傾斜している点を考慮するならば、排水溝として掘削されたものとするのが妥当であると判断している。

B. 出土遺物 (図Ⅱ-45、写Ⅱ-50・51-1~6・61-9・64-7・65-4・66-5・67-2・69-2,8)

溝H-74はすでに記してきたように鑄造工房との関連が考えられる遺構であり、その埋没過程においても、とくに鑄造工房H-3とは機を一にしているものと考えられるものである。したがって出土遺物の組成も鑄造工房と様相が似通っており、土器以外にトリベや鞆羽口などが比較的多く出土している。

土器には土師器では杯A・皿A・高杯・鉢・甕・羽釜、須恵器では杯A・杯B・壺Qなどが出土している。このうち、(7)の土師器杯Aは暗文を良く残しており、斜放射暗文の上方に連弧状の暗文を施している。また、土師器甕では(6)のみが内面を板ナデシ、外面に指頭圧痕を残すいわゆる南河内型の甕である。そのほか、羽釜(15)は胎土中に角閃石を多く生駒西麓産の羽釜である。

須恵器杯では破片を含んで杯Gは認められず、H地区北半部の遺構群に比して、明らかに新しい様相を呈するものである。土器群としては平城宮編年と対比した場合、平城Ⅱを前後する段階のものと考えられ、概ね奈良時代前半に帰属する土器群であると判断しておきたい。

なお、当該遺構から出土している鑄造関連遺物は鑄造工房H-3の項で報告を行う。

(12) 溝H-77

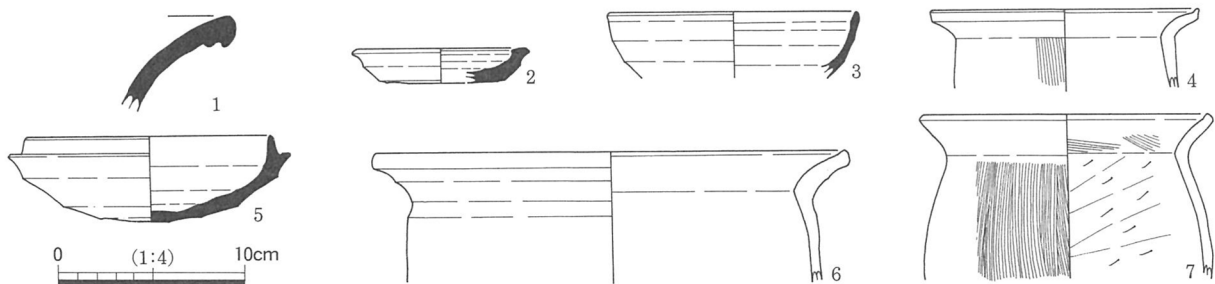
A. 遺構の状況 (図Ⅱ-23、写Ⅱ-19-2)

溝H-74の東側で検出した南北方向の溝である。溝H-74とは平行し、切り合い関係から溝H-8に後出するものである。検出長は約40m、幅は最大で1.3m、深さは平均して20cmを測る。なお、当該溝は途中で細い溝2本に分かれるが、切り合いは認められなかった。性格は不明ながらも、溝H-74および鑄造工房H-3と関連する溝である可能性もある。

B. 出土遺物 (図Ⅱ-46・48-6、写Ⅱ-52-2~6・53-6・70-2)

須恵器は杯H・杯G・皿・甕、土師器では甕が出土している。杯H(5)は口径13.2cmを測るものであり、底部はヘラ削りである。(2)は小型の皿、(3)は杯Gと考えられるが細片のために不明である。(4,5)の土師器甕は内面をケズリ、外面をハケ調整する通有のものであり、(6)は鍋と考えられるものである。

杯H(5)を重視する立場をとれば、当該溝の年代は7世紀初頭以前ということになるが、溝H-8と



図Ⅱ-46 溝H-77 出土土器

の切り合い関係や他の土器との関連を勘案するならば、奈良時代に下る遺構とみるのが穏当であると判断する。

なお、これ以外に土師質の陶棺片が出土している。外面は緩やかにカーブし、底面側には直径12cmの円形の剥離痕跡が認められる。底面および側面はハケ調整であり、内面は器表面が剥離し、粘土紐の接合痕が明瞭に観察できる。

(13) 溝H-78

A. 遺構の状況 (図II-23、写II-17-2・19-1)

溝H-58と重複しながら南へとのびる南北方向の溝であり、南端は溝H-8をわずかに越えた地点で収束する。検出長は42m、幅は80cmで深さは平均して25cmである。溝底はおおむね平坦である。

なお、当該溝は溝H-8および溝H-63に切られている。

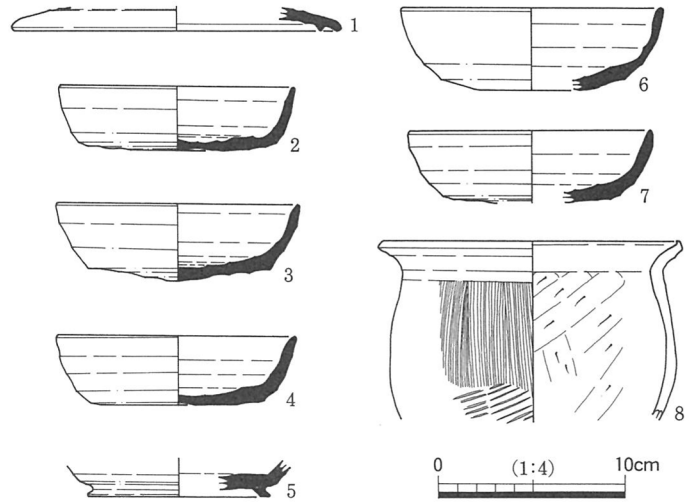
B. 出土遺物 (図II-47、写II-49-7~10)

須恵器は杯G・杯Bのほか、大型の蓋が出土している。

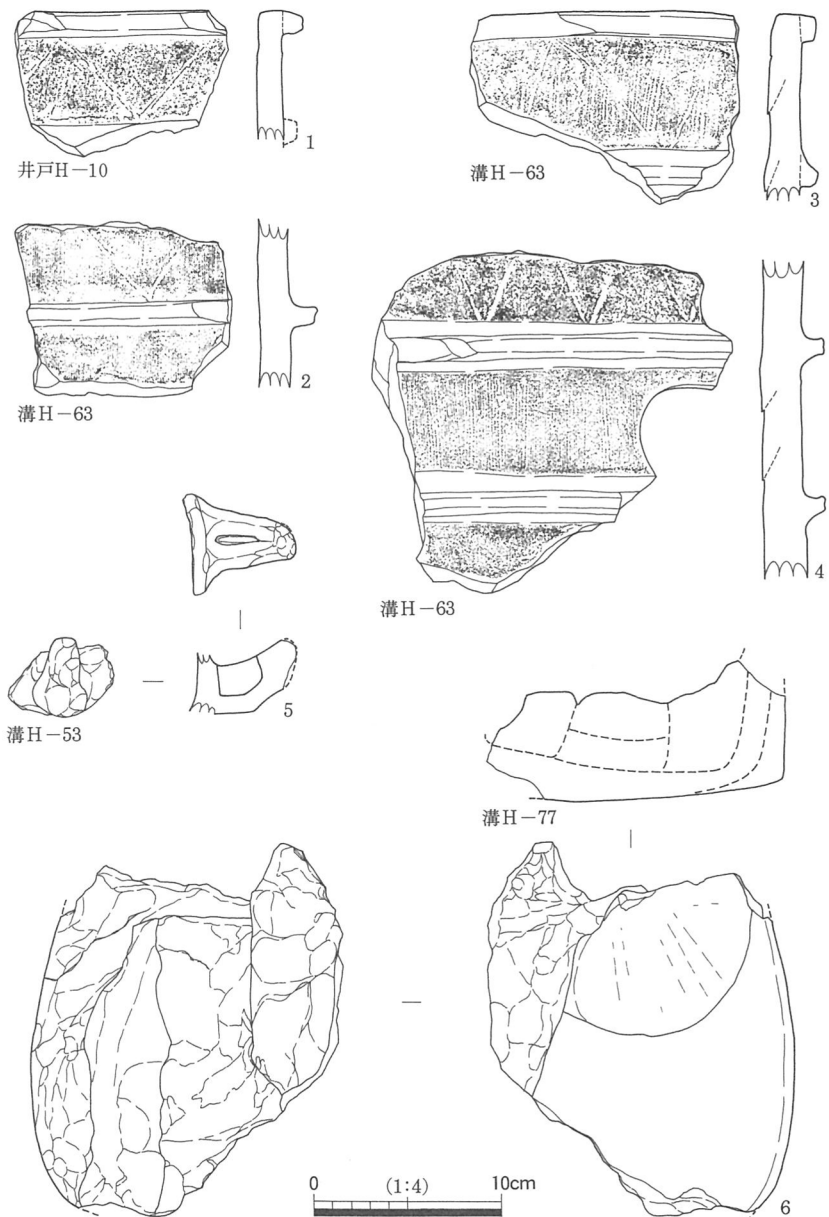
杯Gはいずれも身であり、(6)がやや丸みを帯びる大振りのものである以外は法量形態ともに近似している。

杯B(5)は底部のみの破片であるが、高台が底部のやや内側から外方に踏ん張る形態をもつ古い様相をもつものである。

土師器甕(8)は胴部外面下半をタタキ調整する点が特徴的である。



図II-47 溝H-78出土土器



図II-48 H地区遺構出土埴輪・韓式系土器・陶棺

4. 井戸

(1) 井戸H-10

A. 遺構の状況（図Ⅱ-23・49、写Ⅱ-26～31）

H地区の北半で溝に囲まれる形で検出した一連の建物群の南西隅で検出した井戸である。円筒埴輪を井戸枠として転用する特異な構造を有している。なお、遺構の先後関係では溝H-68を切っている。

平面形は円形であり、掘り方の壁面はほぼ垂直に降下している。規模は検出面での上端が直径1.35m、底部では直径90cmである。深さは4.7mを測る。

当該井戸は冒頭でも記したように4段に積み上げた円筒埴輪を井戸枠とする特徴的な構造を有するものである。この井戸を構築順にみてゆくと、まず掘り方の掘削後、底面には直径20cm前後の自然礫を円周状に敷き詰めている。一部、高さの調整のためか、円筒埴輪片を用いている部分もみられる。

この上に最下段となる円筒埴輪を敷設し、掘り方掘削土と考えられる地山起源の粘土層を裏込め土として埋め戻している。なお、すべてのスカシ孔で確認したわけではないが、スカシ孔については基本的には円筒埴輪の小片を用いて塞ぎ、土砂の流入を防いでいる。

なお、スカシ孔とこの円筒埴輪小片と隙間には裏込め土とは異なる粘性の高い灰色粘土が詰まっており、裏込めの際にははずれないように接着剤がわりに意図的に充填されたものであると判断できる。また、最上段のスカシ孔には上方に紐ずれの痕跡が確認でき、掘り方内に正置する際に紐を用いて降ろした状況が復元できる。

こうして埋置した1段目の円筒埴輪の上にやや径の大きい円筒埴輪をのせて、1段目よりはやや細かい単位で裏込めを行っている。スカシ孔を別の埴輪片で塞ぐ点については1段目埴輪と変わるものではない。

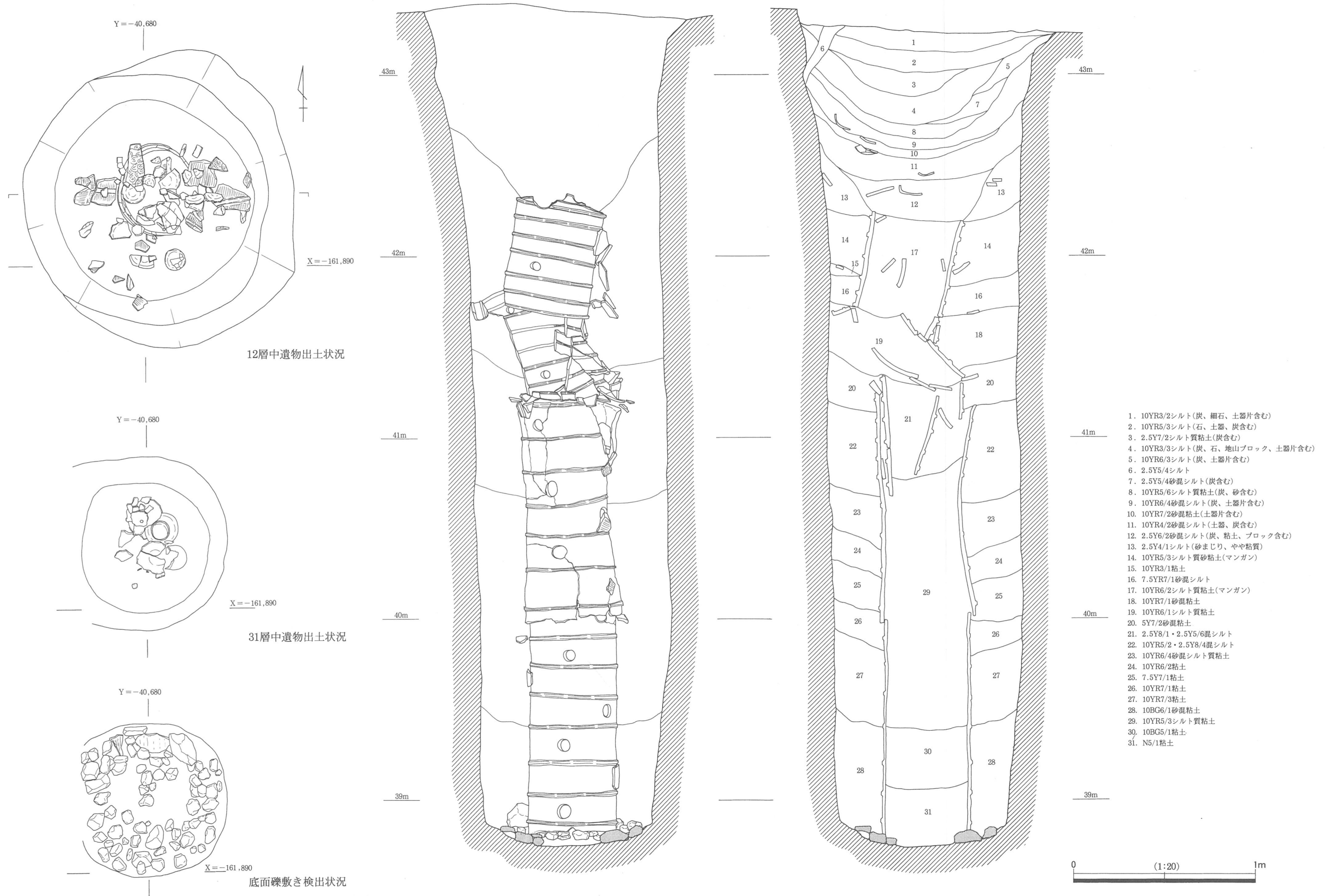
さらに、この2段目埴輪の上方に3段目の埴輪をのせているが、この埴輪は後述するように鱗付きの円筒埴輪であるが、鱗の部分は完全に打ち欠き、倒立で用いている。また、この埴輪は井戸枠に転用された埴輪の中で最も器壁が薄いものであり、結果的にこれを遠因として当該埴輪が崩壊し、この井戸は使用不能となっている。したがって、3段目の井戸枠に用いられた円筒埴輪は原位置を保っておらず、下半部は2段目の埴輪の中に落ち込み、また、上半は斜めに傾いている。

最上段となる4段目の埴輪は本来の形からすると倒立して用いられており、割れることなく、埋設当時の状況を残している。しかしながら、上記のように3段目埴輪の崩落に引きずられるようにして斜め下方にずれている状況を看取することができる。なお、崩れた3段目の円筒埴輪は高さ1.35mに復元されるものであり、これを2段目の井戸枠の上に積み上げ、さらに最上段の4段目の埴輪をのせると、掘り方の掘り込み面近くまで上がることになる。

なお、埴輪のジョイント部分にはスカシ孔と同様に別の円筒埴輪小片を外方から巻き付けるようにして塞いだ部分も看取される。

遺物の出土は大局的にみると2つに分かれる。一つは井戸枠内の最下層から出土した土器群であり、これについては当然のことながら、井戸の使用期間中に落下などによって埋没したものである。出土遺物の詳細については後述するが、口縁部に紐を巻き付けた甕など釣瓶に使われた土器が出土しているほか、穿孔のあるひょうたんも出土しており、これについては他の出土事例から柄杓として使われていたものが落下した可能性が高いものと考えている。

二つ目は図Ⅱ-49の断面図中の1～12層中から出土した遺物群であり、すでに報告したように3段



図II-49 井戸H-10平面・断面図

目埴輪の崩壊によって使用不能となり、深さ1m前後の土坑状を呈することとなった井戸の跡に廃棄された土器群である。なお、土器の多くは9～12層に集中して出土している。

B. 出土遺物

出土遺物は大きく井戸枠に転用されていた埴輪と使用中もしくは廃絶段階に混入した土器に分かれる。以下、大きく土器と埴輪に類別して報告を行う。

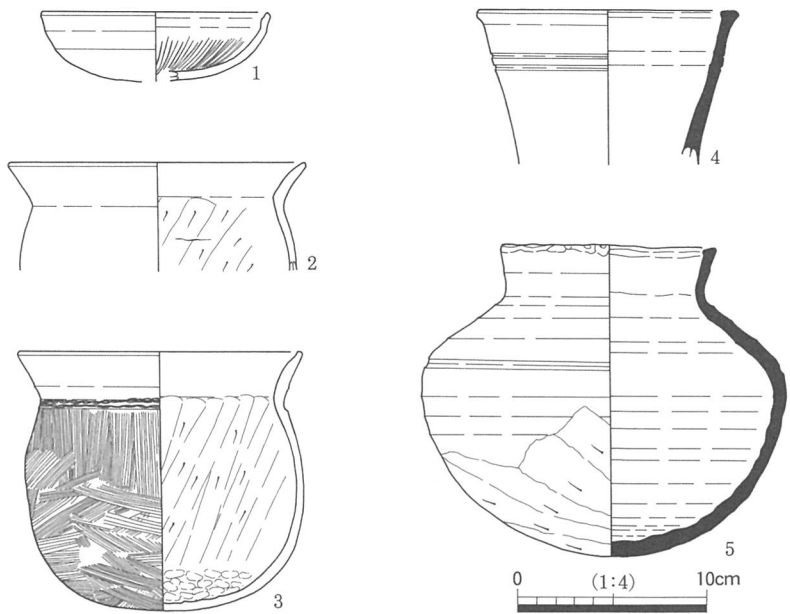
土器 (図Ⅱ-50・51、写Ⅱ-54・56-3,3')

図Ⅱ-50には井戸枠内の最下層から出土した土器を掲げている。土師器では杯C(1)、甕(2,3)が出土している。このうち、(3)の甕はほぼ完形であり、頸部には撚りのある3重の縄が巻かれている。釣瓶として用いられていたものが転落したものと考えられる。なお、頸部に巻かれた縄は部分的に残るのみであり、釣り手がいかなる形状であったかは不明である。

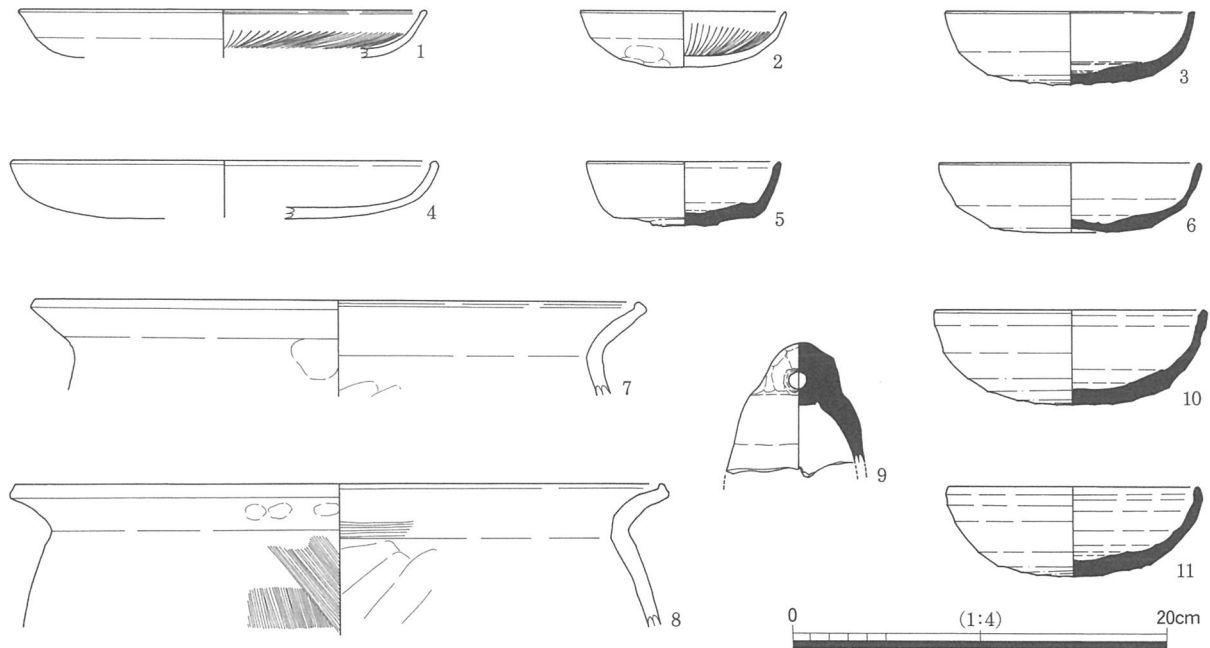
杯C(1)は見込み部分に比較的密な放射状暗文を施文するものである。底部が完存しておらず、不確定要素を含むが、経高指数は31である。

須恵器では壺(5)と瓶類(4)の口縁部片が出土している。(4)は細片であるが、(5)の壺は完形品である。口縁端部の外方が押圧剥離状に細かく欠けている。

釣瓶として用いられた可能性もあるが、縄等は検出できな



図Ⅱ-50 井戸H-10(最下層)出土土器



図Ⅱ-51 井戸H-10(上・中層)出土土器

かった。

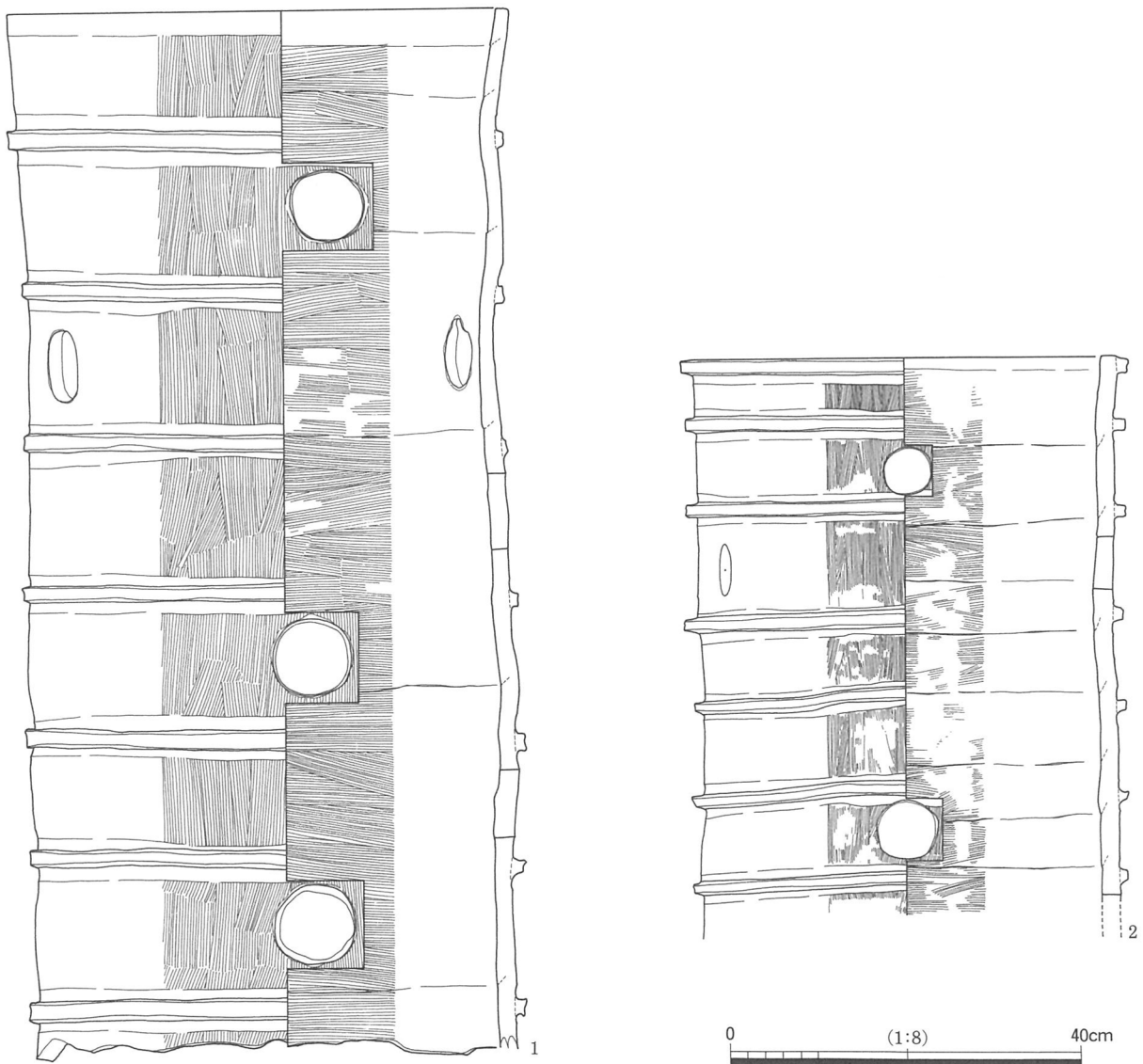
なお、劣化が著しく、しかも変形しているために図化できなかったが、ひょうたんが出土している。このひょうたんは切り欠きがある上に人為的な穿孔も確認できるものであり、他遺跡での類例を勘案するならば、柄杓として利用されていたものが転落したものであると考えられる。

上層から出土した遺物は土師器と須恵器である。

土師器では杯C・皿A・甕がある。杯Cは内面見込みに放射暗文を施すものである。径高指数は28前後と最下層出土の杯Cに比して浅く、形式的組列と層位関係の間に矛盾はない。須恵器では杯Gが目立っている。溝H-63出土土器と同様に底部と体部の境が不明瞭で丸みを帯びた大振りのもの(3,6,10,11)と小振りで通有の形態をもつもの(5)に分かれている。このほか、破片ではあるが蛸壺(9)の破片が出土している。

埴輪(図Ⅱ-48-1・52・53、写Ⅱ-53-4・55・56-1,2)

(52-1)は井戸枠に転用されていた最下段の円筒埴輪であり、後述する2段目の埴輪(53-2)と同



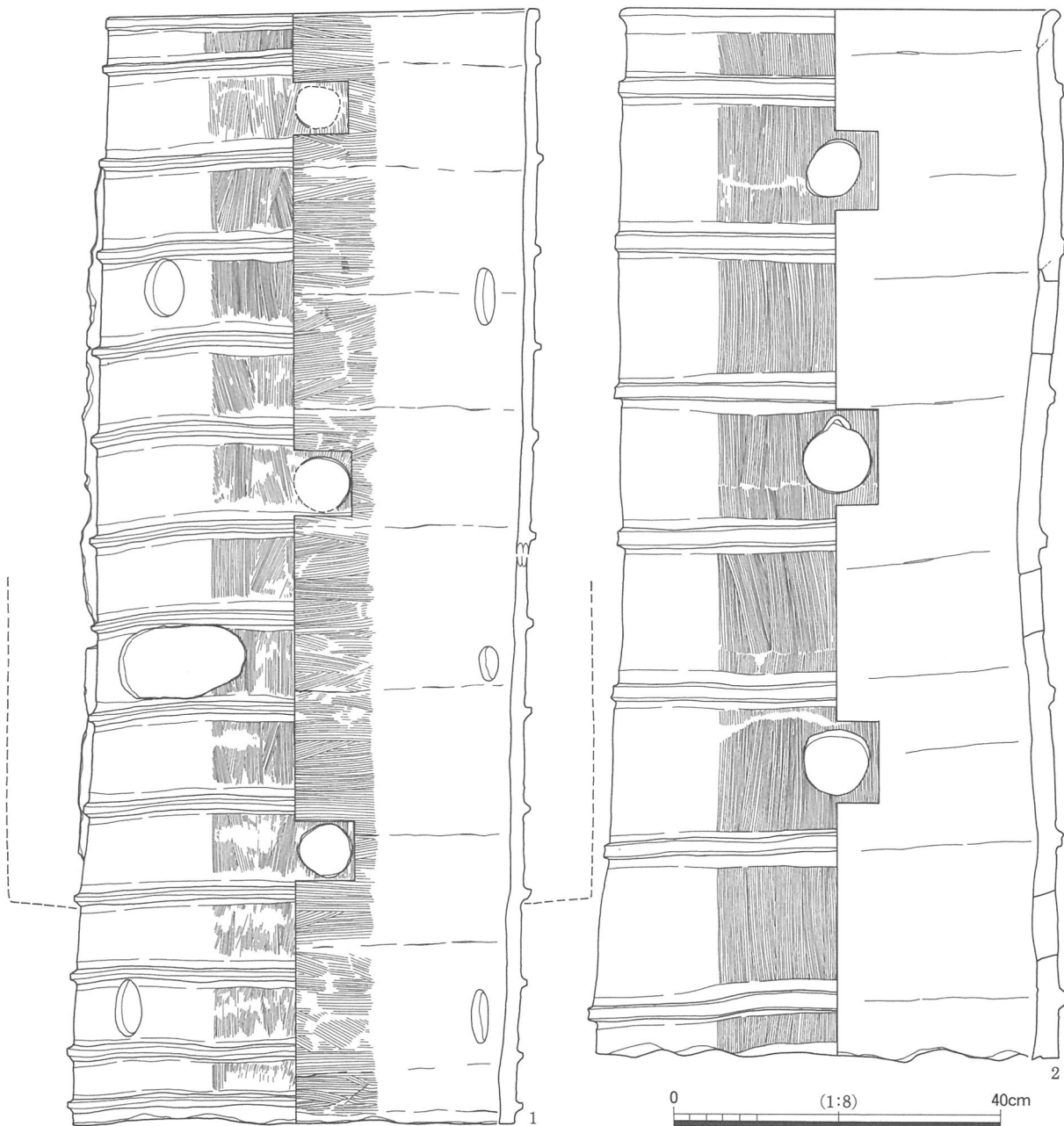
図Ⅱ-52 井戸H-10井戸枠転用埴輪(1)

様に基部を打ち欠いている。

法量は残存高119cm、口径57cm、基部径54cm、厚さ1.5～2.0cmを測り、2段目埴輪とほぼ同大で、特徴も共通している。タガは7本で間隔は16～20cm、スカシ孔は2～7段目にそれぞれ穿たれている。スカシ孔はいずれもほぼ円形を呈し、2・5・7段目の透かし穴が対応している。4・6段目の透かし穴はこれに直交、3段目はこれらと45度前後振っている。調整は1次調整として粗いタテハケを施し、その後に粗いタテハケ調整を行う。2次調整は行わない。内面は全体に粗いタテハケ調整を行う。

なお、当該埴輪には3段目のスカシ孔に紐ずれと考えられる欠失部分が確認でき、掘り方内に埴輪を正置する際の紐掛けによるものと推定される。

(53-2) は井戸枠に転用されていた2段目の円筒埴輪であり、基部は意図的に打ち欠いている。



図II-53 井戸H-10井戸枠転用埴輪(2)

法量は残存高 118 cm、口径 57 cm、基部径 54.5 cm、厚さは平均して 2 cm を測る。タガは 7 本であり、断面形状は幅広で低平である。また、口縁部にはタガは巡らせず、タガ間の間隔も平均して 19 cm と広い。

スカシ孔は 2～7 段目にそれぞれ 2 個ずつ穿たれており、不整な円形を呈するものが多い。調整は全体に粗雑であり、1 次調整のタテハケのみが観察できる。内面は下半部では部分的に粗いヨコハケ調整が行われるが、大半は横方向の粗いナデ調整である。なお、最下段の円筒埴輪同様に 4 段目のスカシ孔には紐ずれの痕跡が認められる。

(53-1) は井戸枠 3 段目に転用されていた埴輪である。この埴輪のみ鱗付きの円筒埴輪である。ただし、鱗については転用の際に打ち欠かれたのか、まったく残存していない。しかし、他の埴輪が基部まで残らないのに対して、当該埴輪は部分的ではあるが基部まで残存している。法量は高さ 135 cm、口径、基部径とも 53 cm、厚さは平均して 1.5 cm を測る。タガは口縁部のものを含めて 14 本で、間隔は最上段が 4.5 cm、最下段が 6 cm と狭い以外は 12 cm 前後を測る。タガは細く、断面形状は台形を絵蔓ものが多い。

スカシ孔は 2 段目から偶数段に穿たれており、全体に直径約 7 cm で円形を呈している。そのうち、2・6・10 段目は鱗に直交する形で 2 個、他の部分では鱗近くに 2 個ずつ計 4 個を穿孔している。なお、4 段目のスカシ孔の一つは後述する最上段の埴輪同様にスカシ孔穿孔時のコンパスによる線刻が残るのみで実際の穿孔は行われていない。また、穿孔されたスカシ孔が小さい部分ではその周囲にコンパスによる線刻が残る部分もある。そのほか、8 段目のスカシ孔の一つは人為的に拡張されている。

なお、鱗は 11 段目タガの直下から貼り付けられており、剥離した部分では斜格子の刻みが観察できる。また、この鱗はタガを穿孔して貼り付けた後、鱗の付く部分のタガを切除していることも窺われる。

調整は全体に丁寧であり、外面は 1 次調整としてヨコハケ後、細かいタテハケであり、2 次調整は行わない。ただし、鱗の貼り付け部分には横位にハケ調整が行われている。内面は外面のハケ調整とは異なる原体による粗いヨコハケ調整である。

(52-2) は井戸枠として転用されていた最上段の埴輪である。下半を欠失している以外は割れることなく完存している。法量は現存で高さ 66 cm、口径 52 cm、厚さは平均して 2 cm を測る。タガの間隔には幅があり、1 段目が 60.5 cm と狭く、3 段目が 13 cm である以外は概ね 10 cm 前後の間隔である。タガは口縁部のものも含んで 7 本が残っている。

スカシ孔は 2 段目および 3 段目に 2 個の円形スカシが直交する形で穿たれており、6 段目および 7 段目も同様である。なお、スカシ孔はあらかじめコンパス状の工具によって穿孔場所が線刻されており、3 段目では穿孔場所を変更したためか、コンパスによる線刻がそのまま残存している。スカシの穿孔にあたってはこの線刻を目安としている状況が看取され、したがって穿孔はいずれも正円形であり、直径も 7 cm 前後にまとまっている。

調整は 1 次調整に粗いヨコハケ後に細かいタテハケ調整を行うのみであり、内面は全体にヨコハケ調整であり、粗いハケと細かいハケの 2 種類の原体が認められる。

このほか、上段に鋸歯文を線刻した円筒埴輪片が 1 点出土している (48-1)。溝 H-63 で出土した埴輪片と共通する特徴を有するものであり、転用された埴輪の供給源を考える上で重要な位置を占めている。なお、これまでに記してきたように埴輪は大きく二群に分かれ、一方は井戸枠に転用された 1 段目と 2 段目の円筒埴輪、他方は 3 段目と 4 段目の埴輪および鋸歯文を有する埴輪片である。

後者は比較的丁寧な製作技法と鋸歯文の施文や鱗付き埴輪など特徴的な埴輪群であり、いわゆる日置荘窯系の埴輪群である。

5. 土坑

(1) 土坑H-39

A. 遺構の状況 (図II-23・54、写II-10-1・18-2,3)

建物H-4の北西側で近接して検出した土坑である。長さ1.37m、幅87cmを測る楕円形プランをもつ土坑であり、深さは残存で18cm前後である。埋土は灰黄褐色シルトの単層であり、北側に偏って遺物が出土している。遺物には後述する土師器、須恵器があるが、これに混じって礫も出土している。これらの遺物はいずれも坑底からやや浮いた状態で出土している。埋土の状況や遺物の出土状況には特筆すべき点はなく、その性格は不明である。

B. 出土遺物 (図II-55、写II-57-2~4)

土師器杯C・鉢・甕、須恵器杯Gが出土している。杯C(2)はやや間隔を置く放射暗文を施すものである。甕(6)は指頭圧痕が明瞭で、部分的に板ナデがみられるいわゆる南河内型の甕である。須恵器杯Gは大振りりで丸みを帯びた形態をもつものである。

(2) 土坑H-47・48

A. 遺構の状況 (図II-23、写II-19-1)

土坑H-47は建物H-4の西側、土坑H-48は溝H-63の南側で検出した土坑である。特筆すべき点はないが、遺物が出土しているので掲げている。

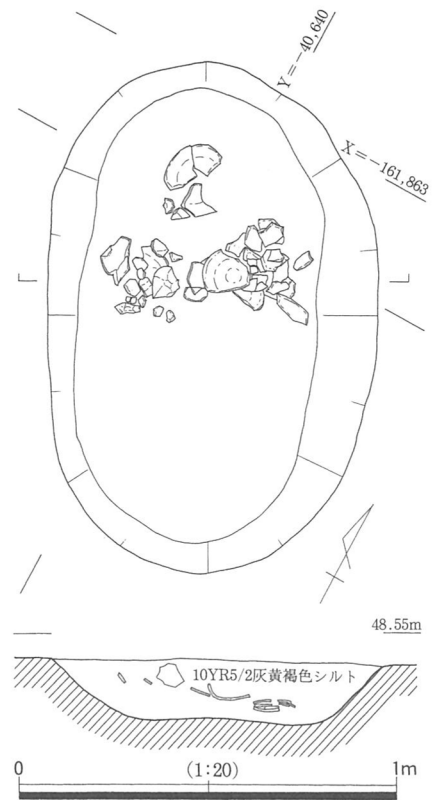
B. 出土遺物 (図II-56、写II-57-1)

土坑H-47からは須恵器杯G、土坑H-48からは土師器蓋が出土している。

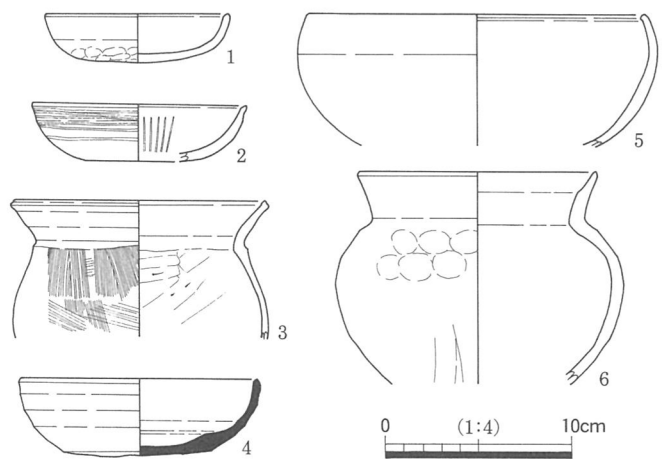
6. ピット

(1) ピットH-184・208

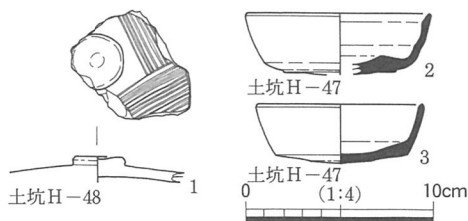
鑄造工房H-2の南側で検出したピットH-208のほか、北半の建物群の中間で検出したピットH-184では図II-57に掲げた土器がまとまって出土している。前者は土師器杯Aを含み、鑄造工房とほぼ同時期と考えられ、後者は須恵器杯Gのみであるが、近接する建物群に関連するものと考えられる。



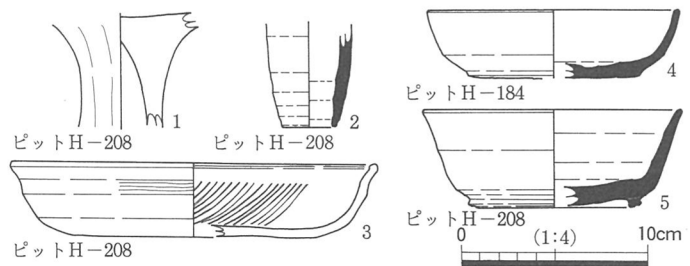
図II-54 土坑H-39平面・断面図



図II-55 土坑H-39出土土器



図II-56 H地区土坑出土土器

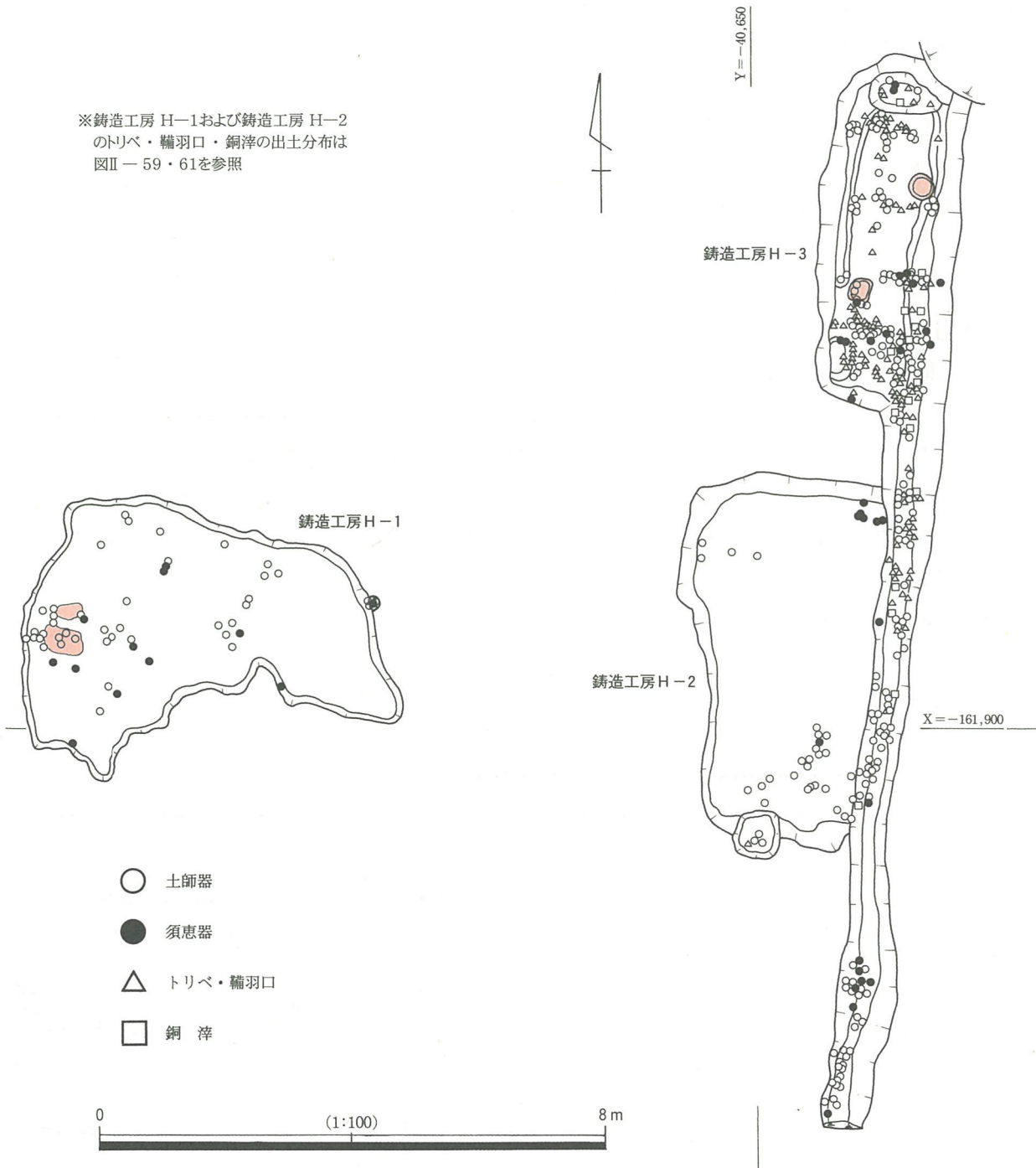


図II-57 H地区ピット出土土器

7. 鑄造工房

すでに報告を行ったようにH地区では溝H-63を南の区画とする北半の建物群と溝H-66を北側の区画とする建物群の存在が明らかとなっている。

一方、その間では溝H-8が東西に走るものの、建物跡をはじめとする遺構密度は全体に希薄である状況が看取され、空間利用の在り方が推定可能となっている。ただし、ここで報告するように上記の遺構が希薄なH地区の中央部では銅製品の鑄造に関連する奈良時代の遺構を、東半を中心に検出している。したがって、少なくとも奈良時代の前半代には居住域に近接しながらも、区画を異にして銅製品の鑄造



図II-58 鑄造工房全体図

が行われていた状況を看取することができる。

なお、個々の遺構の詳細については後に報告するが、鑄造に関連する遺構群はいずれも近接して検出したものである。確認した遺構としては鑄造工房H-1・H-2・H-3、溝H-74のほか、これに付随する土坑やピット、焼土土坑や焼土溜まりが鑄造に関連する遺構群である。いずれの遺構からも多かれ少なかれトリベや鞆羽口などの生産に関わる遺物や生産活動の結果生じた銅滓などが出土している。

以下では鑄造工房H-1～3を中心に報告を行ってゆくことにしたい。

(1) 鑄造工房H-1

A. 遺構の状況 (図Ⅱ-58～60、写Ⅱ-19・20)

鑄造関連遺構群の中で最も西側に位置するもので、鑄造工房H-2とは約5mの距離を隔てる。

削平のためか、全体に遺存状態は悪く、そのために平面形態も西辺がほぼ直線的であるのに対して東側はいびつな形状を呈している。

規模は南北が4.5m、東西は6mを測る。深さは東側ほど浅く、西側の深い部分でも20cm前後を測るに過ぎない。なお、床面は北側を中心に凸凹が認められるが、南西部は比較的平坦である。

埋土は基本的には3層に分層可能であり、上層および中層からは多量の銅滓のほか、トリベなどの破片も出土している。ただし、これらの遺物はいずれも床面からは若干、浮いた状態で出土しており、遺構の廃絶に伴って混入したものである可能性が高い。

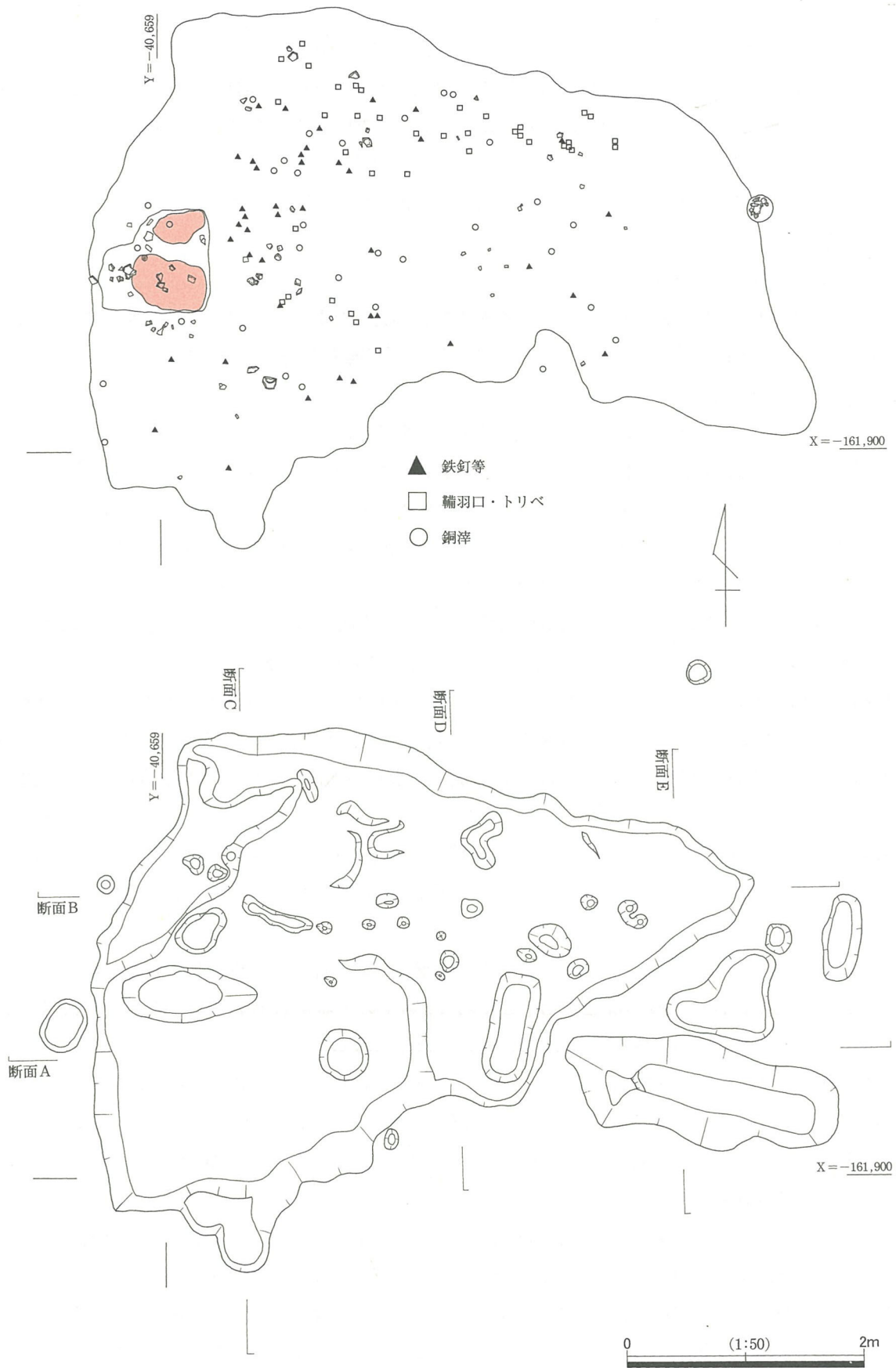
なお、西辺中央の床面において2箇所から焼土溜まりを検出している。このうち、焼土溜まりH-1とした南側のものは大きくとれば、東西長1.1m、南北長約50cmで、厚さ5～10cmの厚さで盛り上がった状態で堆積している。ただし、この焼土はその下層に炭化物粒および土器を含んだシルトの薄層が堆積している。したがって、この焼土は直接的にこの地点での被熱によって生じたものではなく、2次的に堆積したものであると判断される。なお、この焼土溜まりの上面からは銭文を下方に向けた状態で同開珎1枚が出土している。

北側の焼土溜まりH-2は5cm前後の窪みに堆積したもので東西長40cm、南北長30cm、厚さは10cm前後を測る。焼土溜まりH-1とは異なり、地山との間には間層を挟まず、床面直上に堆積している。遺物は全く含んでいない。

なお、すでに記したように出土遺物のほとんどは遺構の廃絶に伴って廃棄されたものと考えられるが、床面の直上からも銅滓やトリベなどが出土しており、若干の土器類も出土している。ただし、多くは細片であり、しかも原位置を留めるものはないものと考えられる。

また、当該遺構からは上部構造を推定しうるような柱穴等は検出できず、いかなる構造を有していたのかは不明である。ただ、周辺および内部からは若干のピットおよび土坑を検出している。このうち、ピットH-379は直径40cm、深さ10cmの円形を呈する土坑であり、埋土上層はシルトであるが、最下層には薄く焼土が堆積している。

また、平面形が長方形を呈する土坑2基を検出している。西側の土坑H-68は南北に主軸をもつものであり、長さ90cm、幅40cm、深さ67cmを測るものである。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、若干の銅滓などが含まれる点で同時期に掘削されたものと考えられるが、埋土には特別な状況は見いだしがたく、性格は不明である。土坑H-69は東西に主軸をもつ土坑であり、規模は長さ1.4m、幅70cm、深さ38cmを測る。掘削深度のある土坑でありながら、埋土にも特別な状況は見いだしがたく、性格は不明である。



図Ⅱ-59 鑄造工房H-1 遺物出土分布（上）・完掘後床面（下）

なお、建物を復元するまでには至っていないが、当該遺構の東側から南東にかけて、方形の柱穴が1.8 m～2.0 mの間隔で南北方向を中心に並んでいる状況を看取することができる。

すでに記してきたように鑄造工房H-1単体では構造復元が困難な状況下において、近接して柱穴列が検出されている点は重要であり、これに付帯する構造物である可能性も含めて、周辺遺構との関連で総体として捉える必要もある。

B. 出土遺物

土器では土師器・須恵器、鑄造関連遺物ではトリベ・轆羽口が出土しており、これ以外に銭貨・鉄製品が出土している。

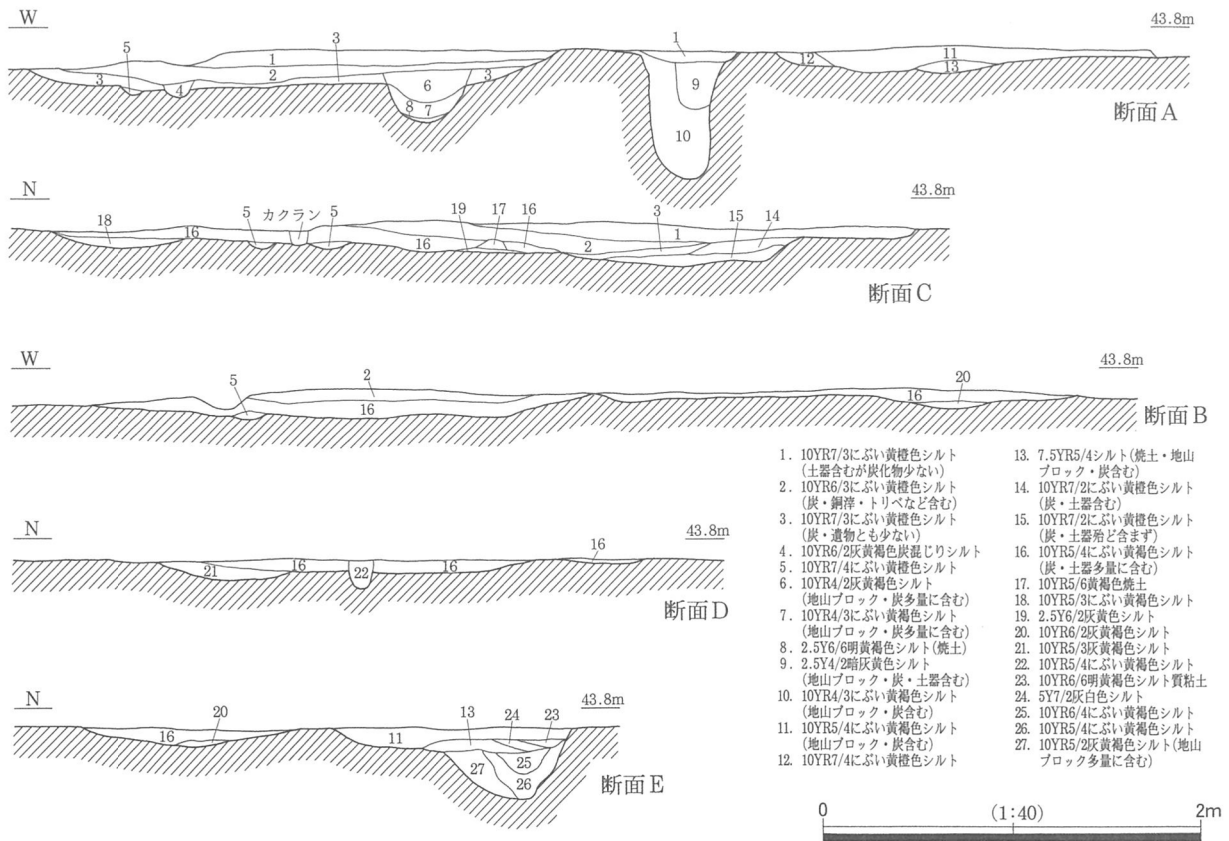
土器 (図Ⅱ -62-1~4,6,12~15,18,19、写Ⅱ -57-5~7・58-1~4)

土師器は杯A・皿A・蓋・甕・鍋などが出土している。土師器はいずれも残存状態が悪く、図化に際しての直径、傾きについては不確定要素を残す。杯A・皿Aについてはいずれも1段のみの斜放射暗文であり、破片を含めても杯Cなどの古い要素をもつものは出土していない。

須恵器は杯Aと杯Bが出土している。須恵器でも杯Gなどは破片を含めても見いだすことができず、北半の建物群との年代差が看取されるところである。

鑄造関連遺物 (図Ⅱ -69-8、写Ⅱ -68-2)

トリベと轆羽口が出土している。ただし、トリベについてはいずれも細片であり、図化に耐えうるものは出土していない。轆羽口は1点のみ形状を残しており、風の吹き出し口が煙管状に作り出される当調査区出土の轆羽口に通用の形態をもつものである。直径は5.8 cm、残存長13.0 cmを測り、内径は2.5 cmである。先端には溶融した金属滓が付着している。



図Ⅱ -60 鑄造工房H-1 断面図

鉄製品 (図Ⅱ -71-1 ~ 3,5 ~ 7,9 ~ 13)

出土した鉄製品はいずれも錆化が進んでおり、さらに欠損等により元来の形状を残すものは少ない。しかし、全体として断面が一辺7mmから1cm前後の方形を呈する棒状のものが多いことは事実である。また、(11)などは先端を折り返して釘状に作っており、出土鉄製品の中のいくらかは釘であったと判断できる。しかし、(6)は原形をかなり損なってはいるものの、3cm以上の直径を有しており、鑄造に関わる鉄製の工具であった可能性がある。

銭貨 (写Ⅱ -47-5)

焼土溜まりH-1の上面から出土した和同開珎である。細かく割れているが、ほぼ完存する。きわめて残りが悪く、拓本すらとれない状態であるが、いわゆる新和同の銅銭である。

(2) 鑄造工房H-2

A. 遺構の状況 (図Ⅱ -61、写Ⅱ -19・25-1,2)

鑄造工房H-1の東5m、鑄造工房H-3の南側に位置する。

平面形は南北に長い隅丸長方形を呈し、北西部がやや広がる。

断面観察によると東側は溝H-74に切られているが、平面では明確な切り合い関係は認められなかった。

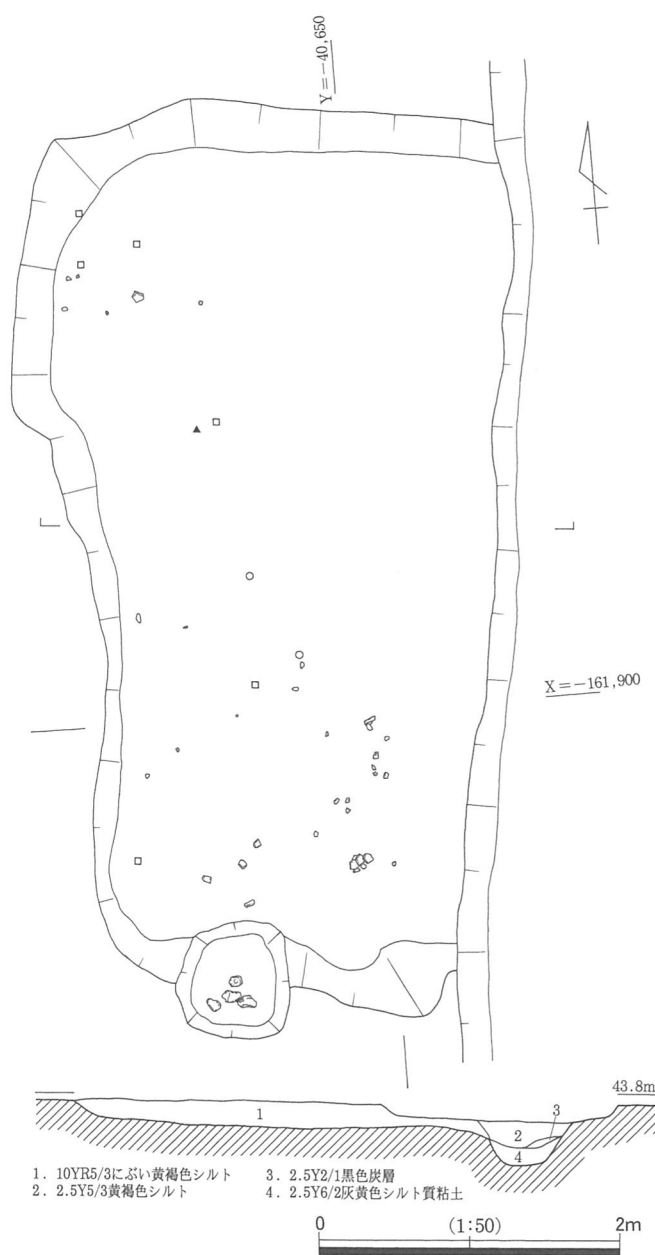
規模は南北6.2m、東西3.4mであるが、北西部の張り出し部分はさらに1m弱、西に広がっている。深さは平均して18cmを測るのみである。

埋土は黄褐色シルトの単一層であり、特筆すべき点はない。また、床面は比較的平坦ではあるが、鑄造工房H-1と同様に様に浅い凸凹が認められる。

出土遺物は鑄造関連遺構群の中で最も少なく、南東部を中心に土器片や銅滓等が出土しているが、いずれも原位置を留めるものではない。

なお、当該遺構についても鑄造工房H-1と同様に上部構造は不明であり、現状では上屋構造をもつものであるのかの判断もできない。

また、当該遺構の場合、周辺を含めて柱穴らしきものは近接しては検出できず、単独で機能していた施設なのか何らかの施設に付帯するものであるのかも不明である。



図Ⅱ -61 鑄造工房H-2平面・断面図

B. 出土遺物

土器では土師器・須恵器、鑄造関連遺物では鞆羽口、これ以外に鉄製品が出土している。

土器 (図Ⅱ -62-5,7~11,16,17,20,21、写Ⅱ -58-5~8・59-1~5)

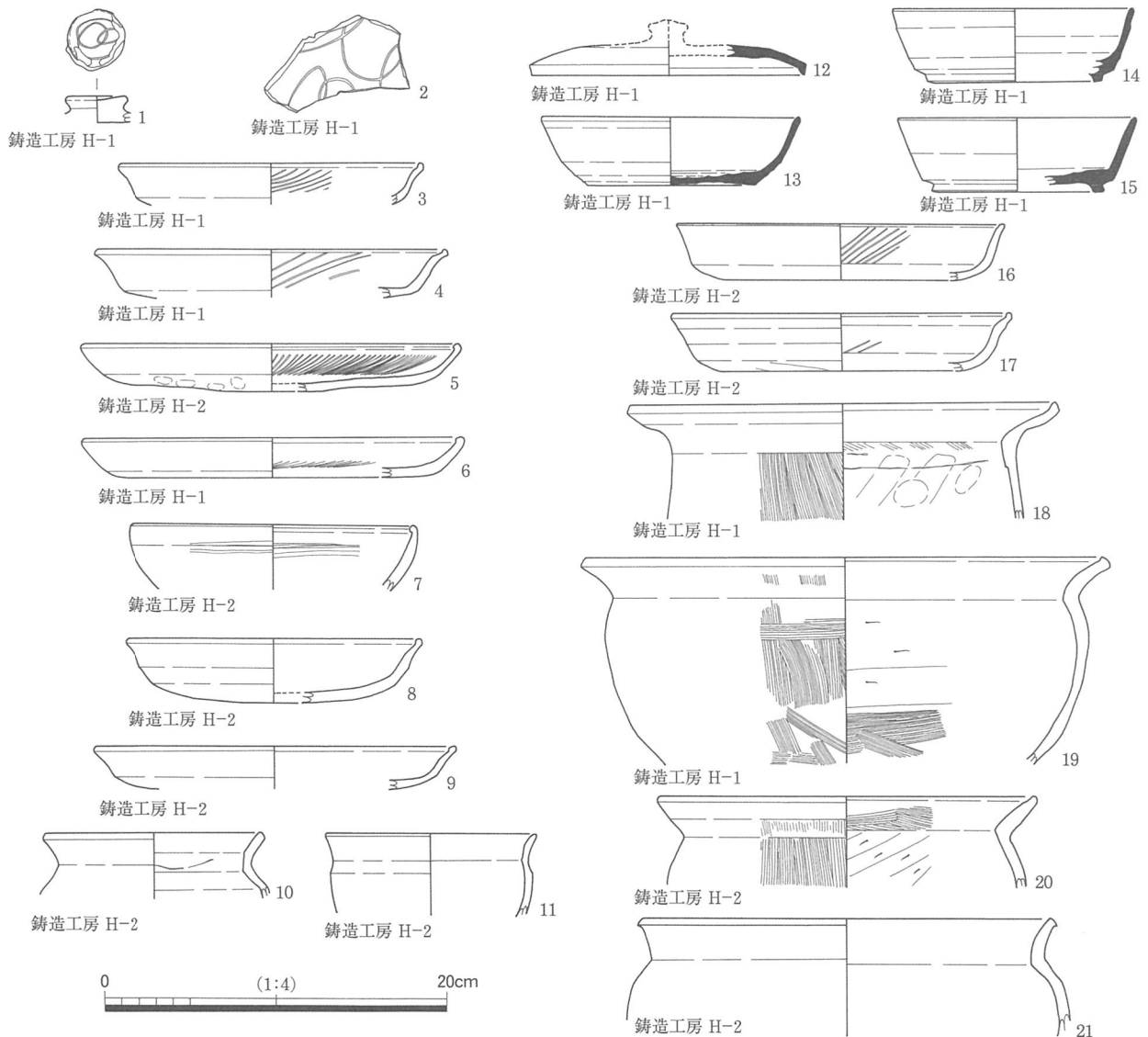
須恵器は若干出土しているものの、凶化に耐えうるものはない。土師器では杯A・皿A・壺・甕などが出土している。鑄造工房H-1と同様に土師器はいずれも残存状態が悪く、凶化に際しての直径、傾きについては不確定要素を残す。杯A・皿Aについてはいずれも1段のみの斜放射暗文であり、破片を含めても杯Cなどの古い要素をもつものは土器群の出土は確認できない。

鑄造関連遺物 (図Ⅱ -70-2,5、写Ⅱ -69-6,7)

トリベの破片も出土しているが、いずれも細片である。鞆羽口も送風孔が部分的に出土したのみである。銅滓も出土しているが、その数は多くない。

鉄製品 (図Ⅱ -71-8,16)

鉄製品では断面円形の棒状を呈するもの (8) と厚さ4~5mmで中央が直線的に突帯状に隆起する板状の製品 (16) が出土している。前者は鉄釘の可能性はあるが後者の性格は不明である。



図Ⅱ -62 鑄造工房 H - 1 ・ H - 2 出土土器

(3) 鑄造工房H-3

A. 遺構の状況 (図Ⅱ-63・64、写Ⅱ-19・21・22・23-1~3・24・25-3)

鑄造関連遺構群の中で最も北側に位置するもので、鑄造工房H-2の北側約2mで検出した。

平面形は南北方向に長い隅丸長方形を呈している。南東隅ではすでに報告を行った溝H-74とつながっている。遺構全体としての残りは良好であるが、北東隅は近世以降の井戸による攪乱を受けている。

現存での規模は南北約6.2m、東西約2.2m、深さは平均して35cm前後を測る。

埋土は大きく5層に分かれる。上層は2層からなり、最上層は黄褐色シルトで、その下には黄橙色シルトが堆積している。いずれも地山を起源とする土砂であり、最終的には人為的に埋め戻された状況を看取することができる。その下面には多量の炭化物を含んだ堆積層が確認される(上層炭層)。

さらにその下層には地山起源の土層を間層としてはさみ、土砂を全く含まないピュアな炭層の堆積が認められる。ただし、このような状況は南半部に限られた状況であり、北側では上層炭層が基盤層に接する部分も多く、したがって下層炭層についても北側には広がらない。

各層からは下図に示したように下層炭層および底面から非常に多くの遺物が出土している。遺物ではとくに鑄造に関わるトリベや轆羽口、銅滓などが顕著であり、他の鑄造関連遺構とは異なり、完形のまま廃棄されたと考えられるものもある。上記のように、地山土を起源とする土層で埋め戻されていることから、当該遺構の廃絶に伴い、人為的に埋め戻しが行われる際に最も深度のあった当該遺構に鑄造



図Ⅱ-63 鑄造工房H-3平面図

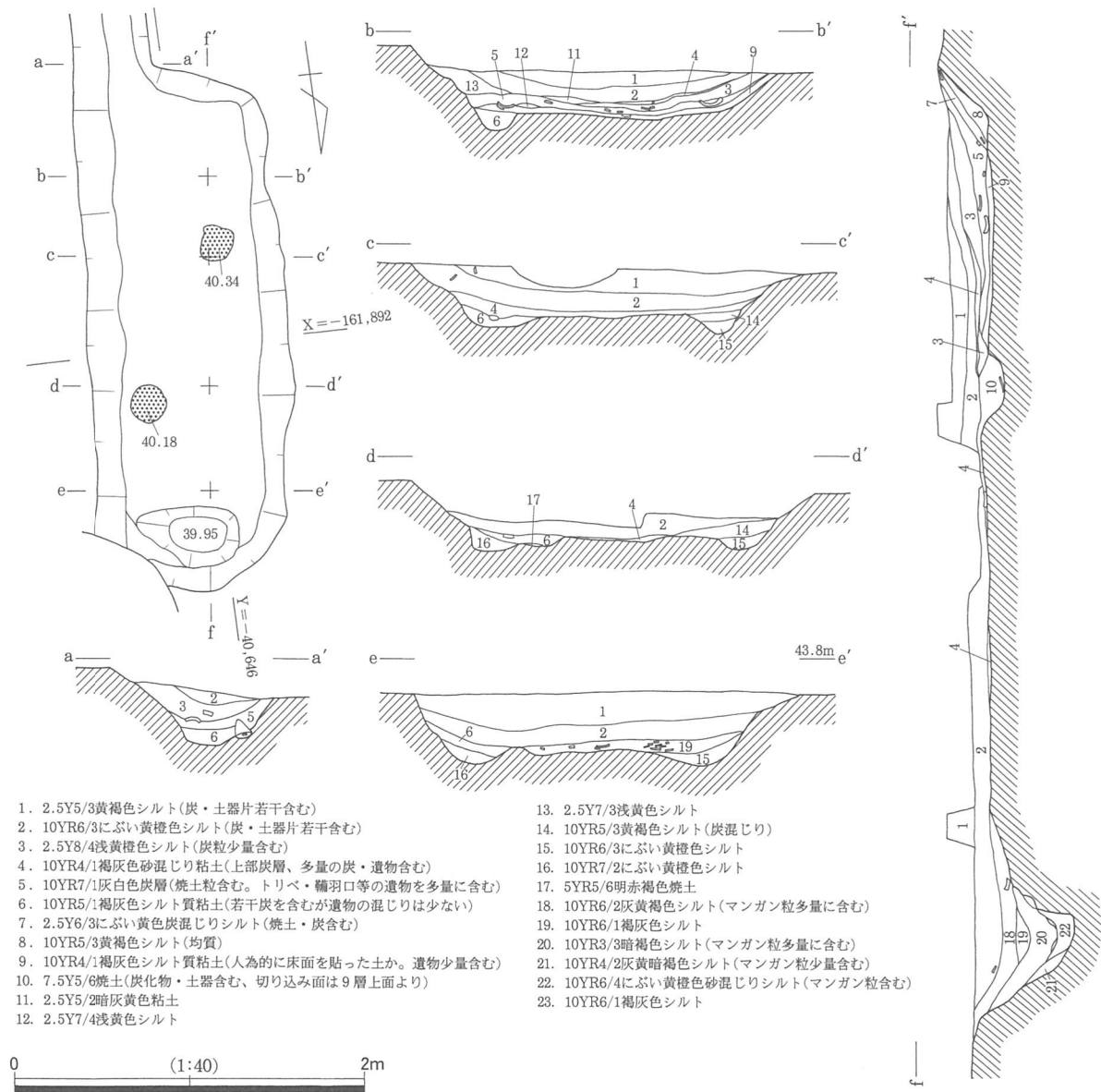
関連遺物の多くが廃棄されたものと考えられる。

以下では層位順にしたがって個々に記述を進めてゆくことにしたい。

上層 上層炭層の上部に堆積したものであり、基本的には2層に分かれる。両者ともに若干の炭化物を含むものの混じりは少なく、地山を起源とするものである。層厚は南側で約20cm、北側で約30cmを測る。堆積は全体に及んでおり、厳密には時期は特定できないものの、人為的な埋め戻し土である。

当該層での遺物の出土分布は南半部および中央やや北西寄りに偏り、その大半が南半部に集中している。遺物にはトリベ・鞆羽口・銅滓・鉄製品・土器類がある。また、特筆すべきものとしては溝H-74とつながる南東部の壁面付近から出土したわずかに湾曲する薄い銅板をあげることができる。そのほか、トリベ等はいずれも破砕した状態での出土である。

上層炭層 上層に堆積する人為的な埋め戻し土であるシルト層を除去した段階で検出した炭化物を多量に含む土層である。当該層は南壁から緩やかに傾斜して堆積しており、北側では底面に接する部分も



図II-64 鑄造工房H-3断面図

見られる。すでに記したように南半部を中心に堆積しており、最も厚い部分でも層厚は8 cmである。

なお、当該炭層では全般にわたって多量の鑄造関係遺物が出土しており、とくにトリベなどは上層と比較するとその数ははるかに多い。トリベは南半部で出土したものに完形品が多く含まれ、しかも非常にまとまった状態で出土する状況を看取することができる。そのほか、鞆羽口・銅滓・土器類も多く出土しているが、炉壁や鑄型などは確認できなかった。

なお、当該層はその状況から、当遺構の廃絶に伴う人為的な埋め戻し土であると考えられ、鑄造作業の過程で生じた炭化物と不要となった鑄造関係遺物を廃棄したものであると判断される。

下層炭層 底面整地土直上に堆積する炭層であり、この炭層も上層炭層と同様に南半で顕著で一部は溝H-74に広がっている。ちなみにその範囲は南壁から北におよそ1.5 mまでである。したがって、北半部ではわずかに炭化物を含む層が確認できるものの、南半部との差は歴然である。

当該炭層は圧密を受けながらも最大で12 cmの厚さを測り、土砂の混入が見られない炭化物の純層である。

また、上層炭層と同様にトリベや土器など、多量の遺物が出土している。遺物の出土分布を俯瞰すると、当然のことながら、同層が堆積する南半に集中する傾向が見られ、とくに溝H-74との接合部分から多くの遺物が出土している。トリベのほとんどは完形の状態で出土しているが、出土状況としては正置と倒置が混在している。同じように土師器や須恵器などの土器も出土しているものの、その出土状況には法則性は見いだしがたく、一連の廃棄によるものであると考えられる。

なお、冒頭でも記したように当該炭層は南半部に集中しており、北半部では基盤層が露出している。この段階で底面の北東で焼土土坑H-1を検出している。

この土坑は平面形が正円形を呈するものであり、直径40 cm、深さは10 cmを測る。断面形状は緩やかに湾曲する弓状を呈している。全体に均質な砂質の焼土が堆積し、上面からは炭片が出土している。地山自体には被熱による赤変は見られないが、上記の焼土は周辺に散乱することなくまとまっていることから、この焼土は上部からの熱によって赤変したものである可能性も高い。この場合、この焼土が砂質の土壌を起源としていることから、炉の一部であるとは考えがたく、炉床として炉の下部に意図的に敷かれていたものであると考えることもできる。

底面 下層炭層を除去した段階で南半部では底面に貼ったと考えられる灰色粘土層が検出され、その上面から掘り込まれた焼土土坑H-2を西寄りで見出している。また、底面の北端では東西方向に長い楕円形の土坑H-70を検出している。

また、底面の長軸側、すなわち東西の壁面沿いには幅約25 cm、深さ10 cmで浅い側溝が掘削されている。東側の側溝は北端の土坑H-70からそのまま南へのび、最終的には溝H-74につながっている。西側の側溝は西壁の中央付近から北側に掘削されており、土坑H-70につながっている。なお、すでに報告したように溝H-74の溝底は北から南に向かって傾斜しており、同様に当該遺構の東側側溝も南半では北から南、すなわち溝H-74に向かってわずかながら傾斜している状況が看取される。また、北半では下記の土坑H-70に向かって緩やかに傾斜している。状況からみて基本的には排水溝的役割をもつ溝であると判断される。

このように、東西に側溝が掘られることによって、当該遺構の底面は結果的に蒲鉾状を呈して高まっている。

なお、底面の北端で見出した土坑H-70は上端で東西60 cm、南北32 cm、深さ45 cmを測るものであ

り、平面形は楕円形である。壁面の立ち上がりは北側では緩やかであるが、床面をつながる南側ではほぼ垂直に落ちている。なお、当該土坑の底面は東西30cm、南北15cmの隅丸方形を呈し、ほぼ平坦である。

埋土は中位に薄い焼土層が確認された以外には特別な状況は見いだしがたく、性格は不明である。先に報告した側溝とは切り合いは認められず、少なくとも同時に存在し、かつともに埋没したものであると判断される。したがって、当該土坑が側溝と同時に機能していたのであれば、少なくとも東西の側溝のいくらかはこの土坑に流れ込んでいたものと判断される。

また、この土坑H-70の埋土中からは遺物がかなりまとまって出土している点の特筆に値する。とくに下層では完形のトリベがまとまって出土し、鞆羽口も3点が出土している。いずれも、当該土坑の埋没段階に廃棄されたものであると考えられるが、鞆羽口がかたまっている点は炉の場所を推定する上において重要な意味をもっている。

なお、先に若干触れたが、南西寄りでは焼土を埋土とする土坑をもう1基確認している。焼土土坑H-2としたこの土坑は南半部でのみ検出した貼り土である灰色粘土層の上面から掘り込まれた土坑である。平面形はややいびつな隅丸方形を呈するもので、規模は一辺38cm、深さは中心の最深部で13cmを測る。焼土土坑H-1と同様に断面形は弓状を呈しており、壁面の立ち上がりは緩やかである。埋土は下層に灰色シルトが堆積し、土器・銅滓のほかに炭化物を含んでおり、その上面に焼土が堆積している。

現状では積極的な根拠には欠けるものの、状況から見て焼土土坑H-1と同様に炉床であるものと判断しておきたい。

また、当該遺構が炉を内部にもつ鑄造工房であると考えれば、当然のことながら、何らかの上部構造を有しているのが自然であるといえる。しかし、調査所見としては中世以降の削平が著しいとはいえ、周辺を含めて柱穴はまったく検出していない。当該遺構より古い段階の建物群の柱穴が比較的良好に遺存している事実を考えると、もとより、しっかりとした上屋構造をもつものではなかったと考えるのが穏当であるといえる。

底面での遺物の出土状況をみると、その分布は上層との状況と同様に南半部に多く、トリベ・鞆羽口・銅滓・土器類・鉄製品が出土している。なお、下層炭層と同様に多量のトリベが出土しているが、下層炭層とは異なり正置した状態で出土するトリベが多いことを付記しておく。

なお、当該遺構中からは鋳型や炉壁はその破片を含めてまったく出土していない。

B. 出土遺物

土器では土師器・須恵器、鑄造関連遺物では鞆羽口、これ以外に鉄製品が出土している。

土器（図Ⅱ-65・66、写Ⅱ-49-6・51-8・59-6~9・60・61-1~8・62・63-1~5）

土師器では杯A・杯B・皿A・蓋・高杯・甕・鍋などが出土している。

杯および皿類は基本的に斜放射の1段暗文をもつものである。なお、他の遺構では見られない高杯や杯Bが出土しているのも特徴的である。また、甕では外面をハケ調整、内面を削り調整する通有のものが主流を占めるものの、(66-7~8)のように球形に近い体部をもち、外面に指頭圧痕、内面に板状工具による削り気味のナデ調整を行ういわゆる南河内型甕も含まれている。

いずれにしても、当該遺構中から出土した土器類には完形に復元されるものは少なく、鑄造工房の廃絶段階において鑄造関係遺物と同様に廃棄されたものであると考えられる。したがって、厳密に言えば、出土土器はその造営時の年代を示すものではなく、造営期間の下限を示すものといえるが、いずれにし

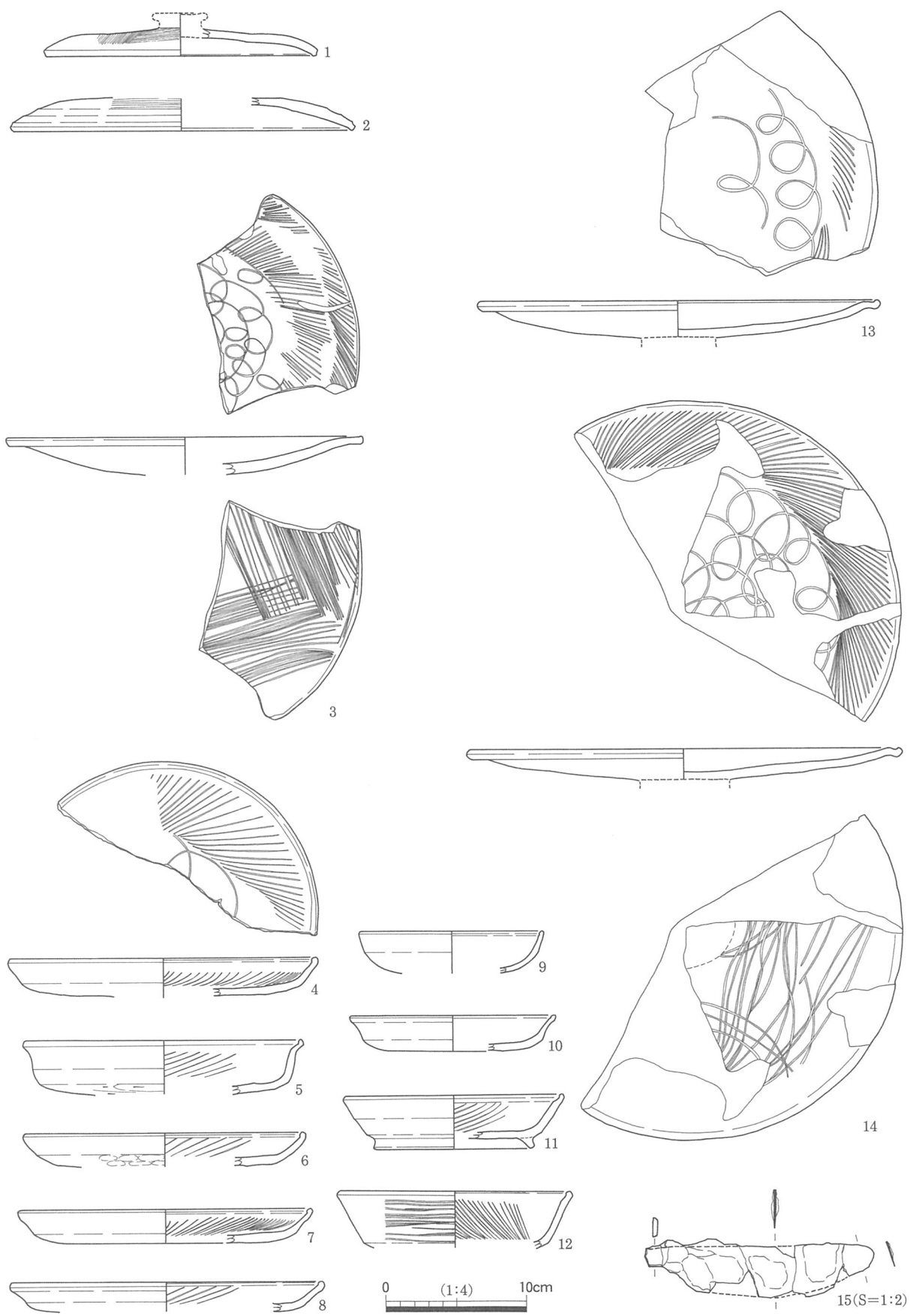
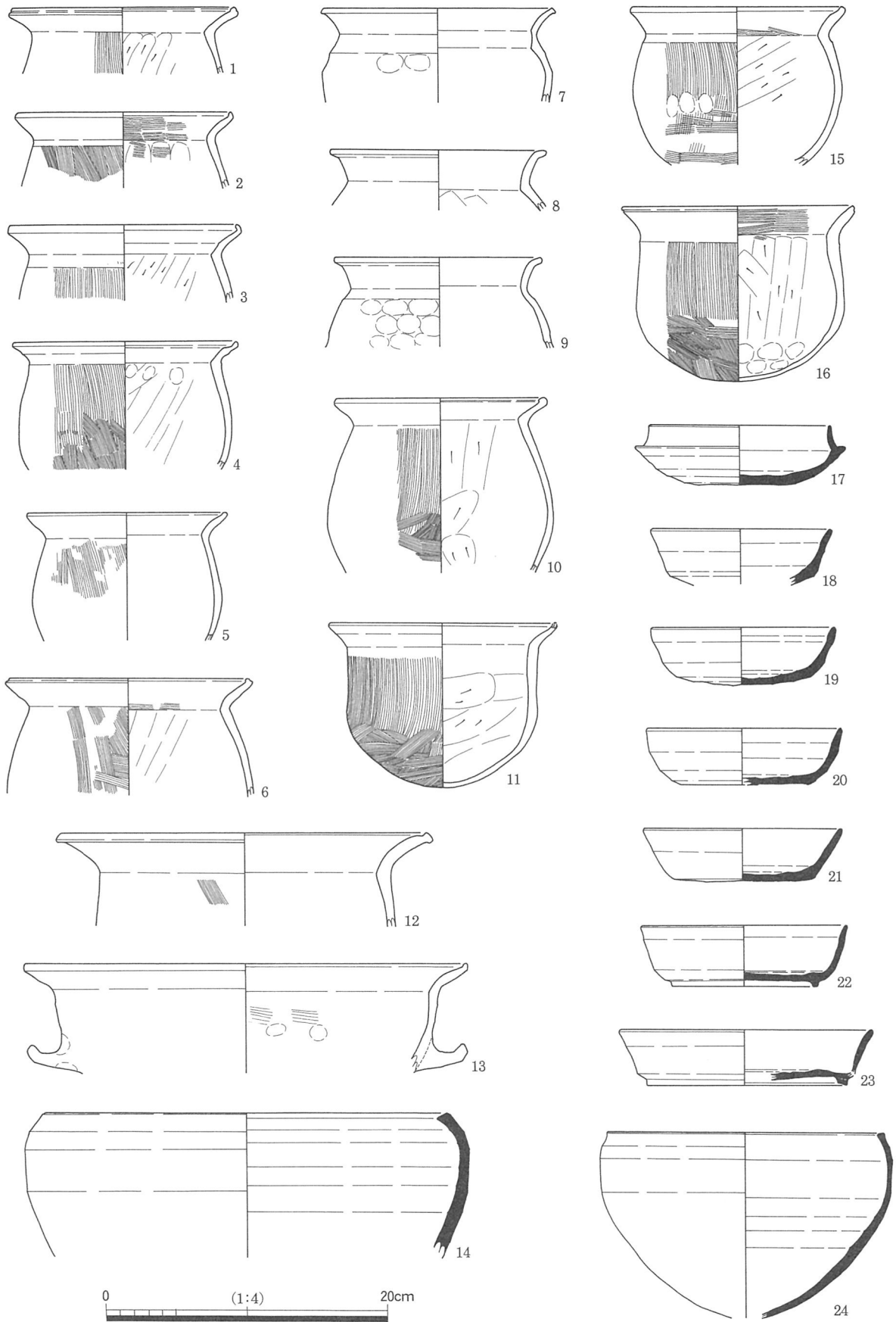


图 II -65 鑄造工房 H - 3 出土遺物 (1)



図Ⅱ-66 鑄造工房H-3出土遺物(2)

ても北半部建物群に関わる土器群より新しいものであることに違いはない。

鑄造関連遺物（図Ⅱ-67～70、写Ⅱ-63-6～8・64～67・68-1,3～5・69-3～5,9）

すでに各遺構の項で記してきたが、鑄造工房H-3と溝H-74とは切り合い関係を持たず接続しているとともに、埋没過程において同様の経過をたどっている状況が看取される。したがって、ここでは両者からの出土遺物を分けることなく、一括して報告しておくことにしたい。

トリベは当調査区で検出した鑄造関連遺構全体では破片も含めて約280点が出土しているが、その多くは破碎した状態で出土している。しかしながら、ここで報告する鑄造工房H-3では完形のまま、もしくは復元によって完形となるものが30点を超えている。

出土したトリベは形態的には一部では扁平なものもあるものの、多くは半球形の椀形を呈するものである。ただし、その製作技法をみると土器を外容器として用い、その内面に粘土を貼り付けた一群と外容器をもたずに製作された一群に大別が可能である。また、前者では甕の胴部を半裁して転用したものや片口をもつ専用と考えられる椀状の土師器を利用したものが確認され、わずかではあるが土師器皿を転用したものも確認される。

なお、全般を通していえることは、いずれも注口をもつこと、内面には金属成分が溶融して付着しており、いずれも使用されたものであることである。

(67-1～5)は外容器をもたない一群であり、基本的には手づくねによる成形を行う。外容器に規制されないこともあって全体に径口指数は大きい。なお、わずかではあるが底面は平底気味に作られるものがあり、例外なく注口が付されている。

すべてを詳述することはしないが、最も小型の部類に属する(67-1)は直径11.2cm、高さ6.5cm、器壁は平均して2cm前後を測るものである。容量は137ccである。同様に(67-3)は直径11.0cm、高さ5.6cm、器壁は平均して1.7cmを測るものである。容量は128ccである。なお、当該トリベは外面に異なる粘土を貼り付けている状況が顕著に観察される。

また、最も多くを占めるものが土器を外容器として内面および口縁部に粘土を付加したものである。さらに、この中でも甕の胴部を半裁して転用したものが大勢を占めている。

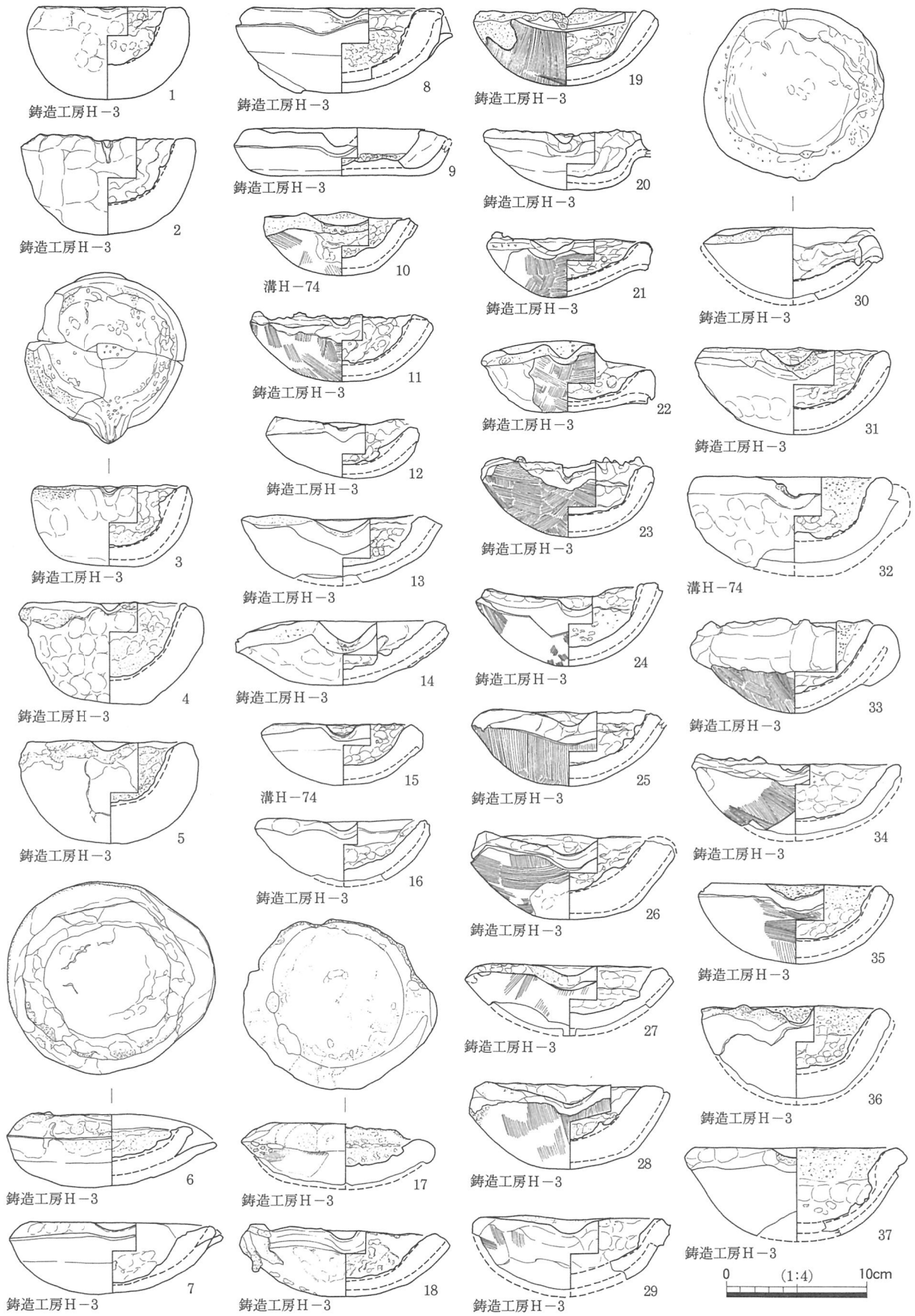
土師器甕を転用しているもの、もしくはその可能性が高いもので図化したものでは、(67-10～37・68-1～7)である。

なお、一瞥して分かることは外面にハケメをそのまま残している一群とハケメをもたない一群とが見られる点である。もちろん、使用段階における摩滅などによってハケメが完全に消滅している可能性も皆無ではないが、むしろこの状況は転用した甕の種類に起因しているものと判断される。とくに、(67-14,31,32)などでは転用された甕の胴部外面に指頭圧痕が残っており、これらの多くはいわゆる南河内型甕の胴部を転用したものであることが窺われる。

この事実は非常に重要な意味をもっており、トリベの製作が南河内型甕の分布範囲で行われたことを示唆しており、当然のことともいえるが、遺跡周辺の地において鑄造関連の道具が生産されたいた状況を復元することが可能である。

なお、多くの場合、甕は縦位に半裁して口縁部は打ち欠かされている。また、注口部分については(67-24,26)のようにあらかじめV字状もしくはU字状に打ち欠いているものもあるが、(67-19)のごとく頸部のカーブをそのまま注口にあてているものもある。

ちなみに法量的に小さい部類に属する(67-15)では直径は12.0cmを測るものの、器高は4.3cmで容



図Ⅱ-67 鑄造工房H-3・溝H-74出土トリベ

量は132 ccである。そのほか、(67-12)も容量は148 ccで小さい部類に該当する。

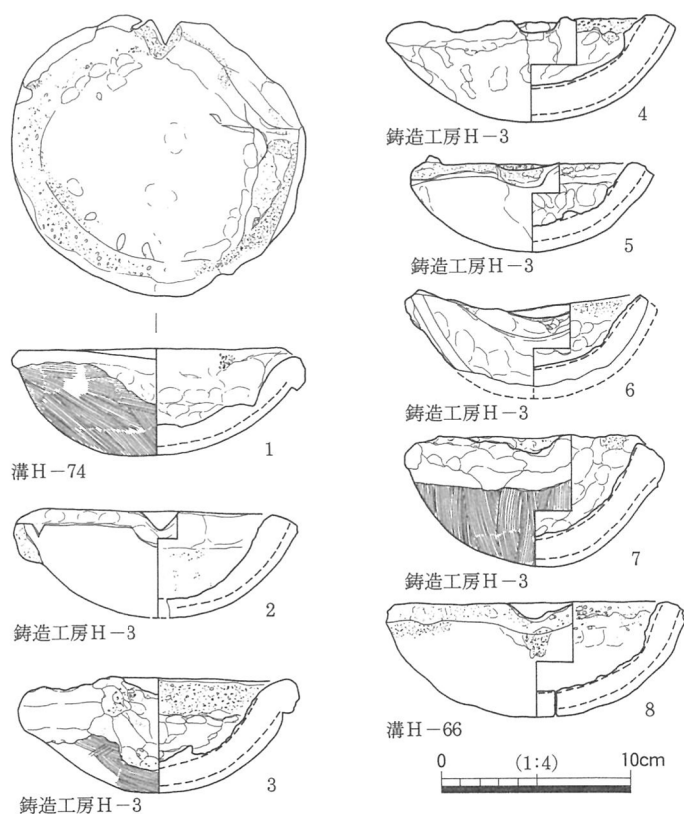
また、(67-33)は口径16.0 cm、高さ6.7 cm、口縁部は2.8 cmで肥厚するものである。容量は313 ccを測る。同様に(68-4)は口径14.6 cm、高さ6.1 cmを測り、容量は279 ccである。これらはいずれも先に報告した小型の一群のトリベのほぼ2倍の容量をもつものである。

そのほか、当遺跡出土のトリベを特徴付けているものとして専用の外容器を用いている点は特筆に値する。専用の外容器を用いていると考えられるものは(67-6~8)であり、いずれも整形段階において片口が付けられているなどの特徴を有する。底部は丸底気味であり、杯というよりは碗に近い形態をもつものである。わずかな数をもって一般化することは困難であるが、いずれも直径15 cm前後を測るなどのまとまりがある。器高にはややばらつきがあるものの、それでも4~5 cm前後におさまるものである。ちなみに(67-6)の容量は154 ccである。

現状では既知の奈良時代の土師器組成中から当該トリベの外容器と同様の器種を見いだすことはできない。また、深めの碗形にしている点や、幅広の片口をあらかじめ作り出していることから、当初よりトリベの外容器とすべくして製作されたものと判断される。この事実は先に記したように転用土師器甕の地域性ととも重要な所見であるといえる。

また、これ以外では1点のみであるが、土師器皿を転用したものが出土している(67-9)。破片のために全容は不明であるが、口縁部の一部を打ち欠いてその部分に注口を付している。

以上、溝H-74出土のトリベを含めて報告を行ってきた。なお、口縁残存率が80%を越える資料で全体的傾向を概観すると、口径は最大で16 cm、最小で11 cm、平均で13.7 cmを測る。また、器高は最大で7.1 cm、最小で2.8 cm、平均で5.4 cmを測る。なお、容量については最大で315 cc、最小で94 cc、平均で195 ccを測る。



図Ⅱ-68 鑄造工房H-3・溝H-66・74出土トリベ

鞆羽口は鑄造工房H-3で破片を含めて10点以上出土しているほか、すでに報告を行った鑄造工房H-1や鑄造工房H-2、溝H-66からも出土している。

ここでは鑄造工房H-3およびそれに付随する遺構である溝H-74から出土した鞆羽口について報告を行う。なお、当調査区検出の鑄造関連遺構から出土した鞆羽口はいずれも風の吹き出し口がまっすぐに開かず、側方を向く特徴的な形態を有するものである。

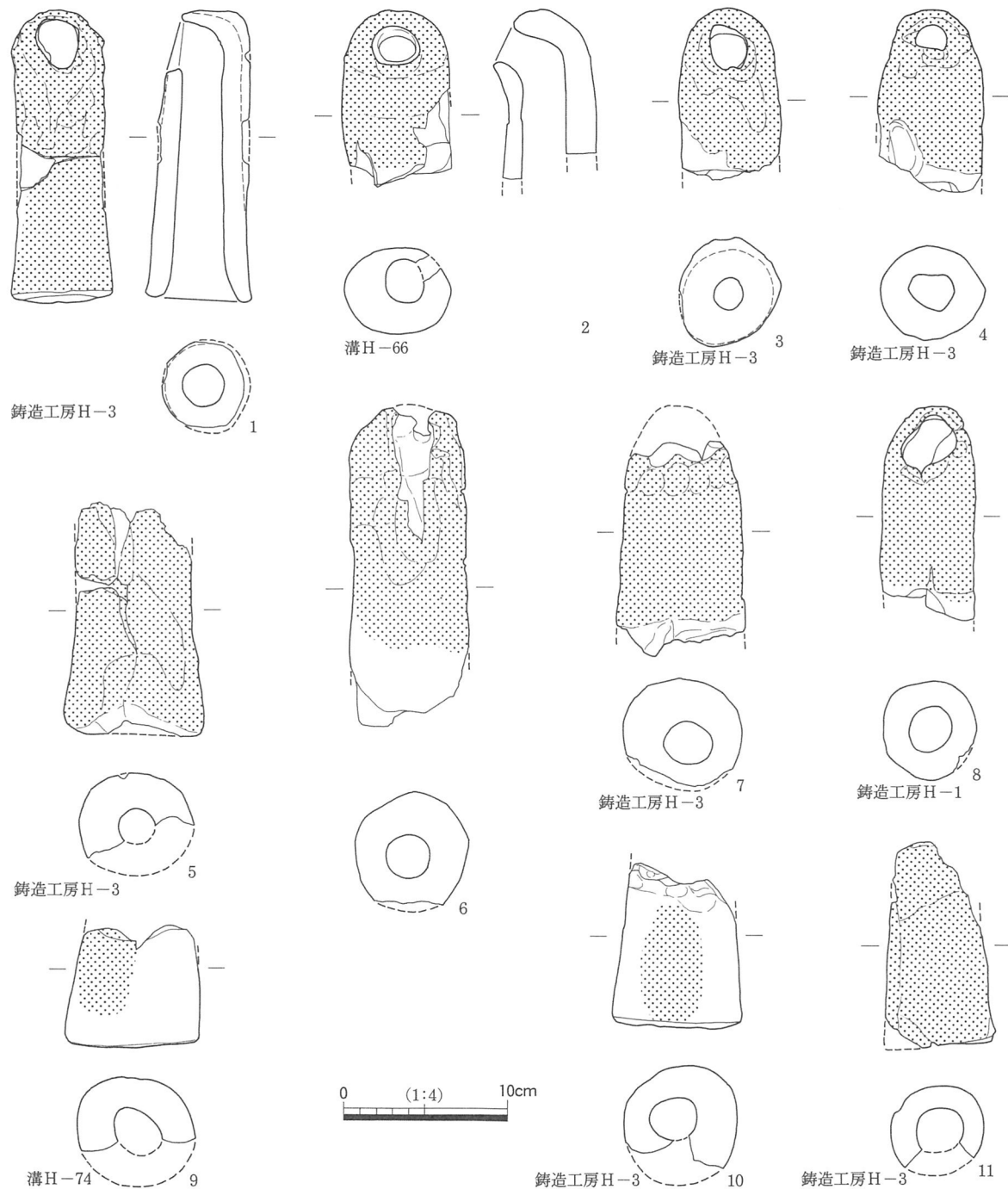
さて、上記の両遺構から出土した鞆羽口のうち、(68-1)は完形に復元されるものであり、長さは18.1 cm、外径は鞆側で直径は6.8 cm、炉側では5.7 cmであり、炉側でやや径を減じている。

同様に内径は鞆側がラッパ状に開いていることもあって4.3 cm、炉側では2.4 cmで

細くなっている。なお、吹き出し口の形状は卵形であり、径は3.0×2.4cmである。

その他の鞆羽口も基本的には同法量、同形態を呈するものであり、外径は6～8cmで若干幅があるものの、内径は2.5cm前後と共通している。基部のみの破片の場合、全容は不明であるが、同様の形態を呈するものと判断できる。

そのほか、図Ⅱ-70には被熱した粘土塊を掲げている。現状ではトリベや鞆羽口では理解できない形状を呈しており、丸みを帯びた端部が高温により発泡するなどして変質している。用途不明ながらも比熱による変質を受けており、鑄造に関わるものであることは明らかであろう。



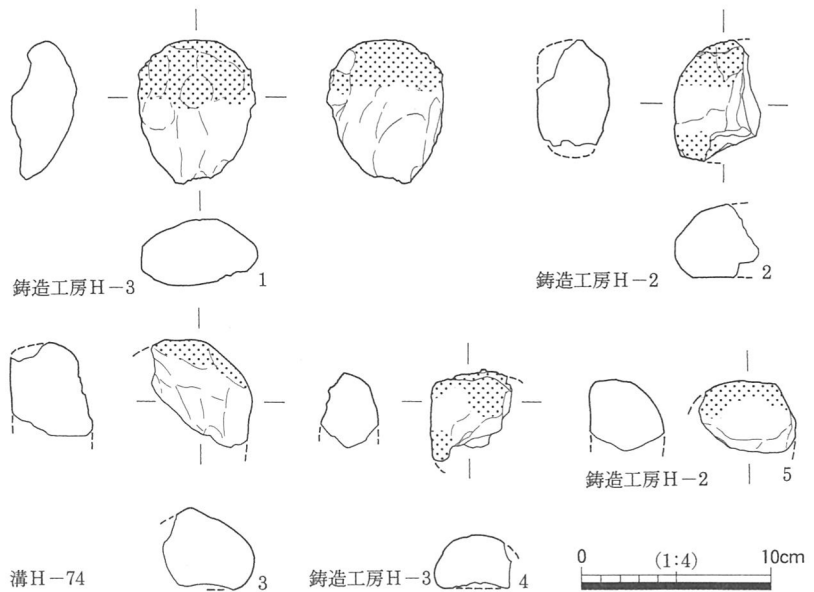
図Ⅱ-69 鑄造工房・溝出土鞆羽口

鉄製品 (図Ⅱ -65-15・71-15)

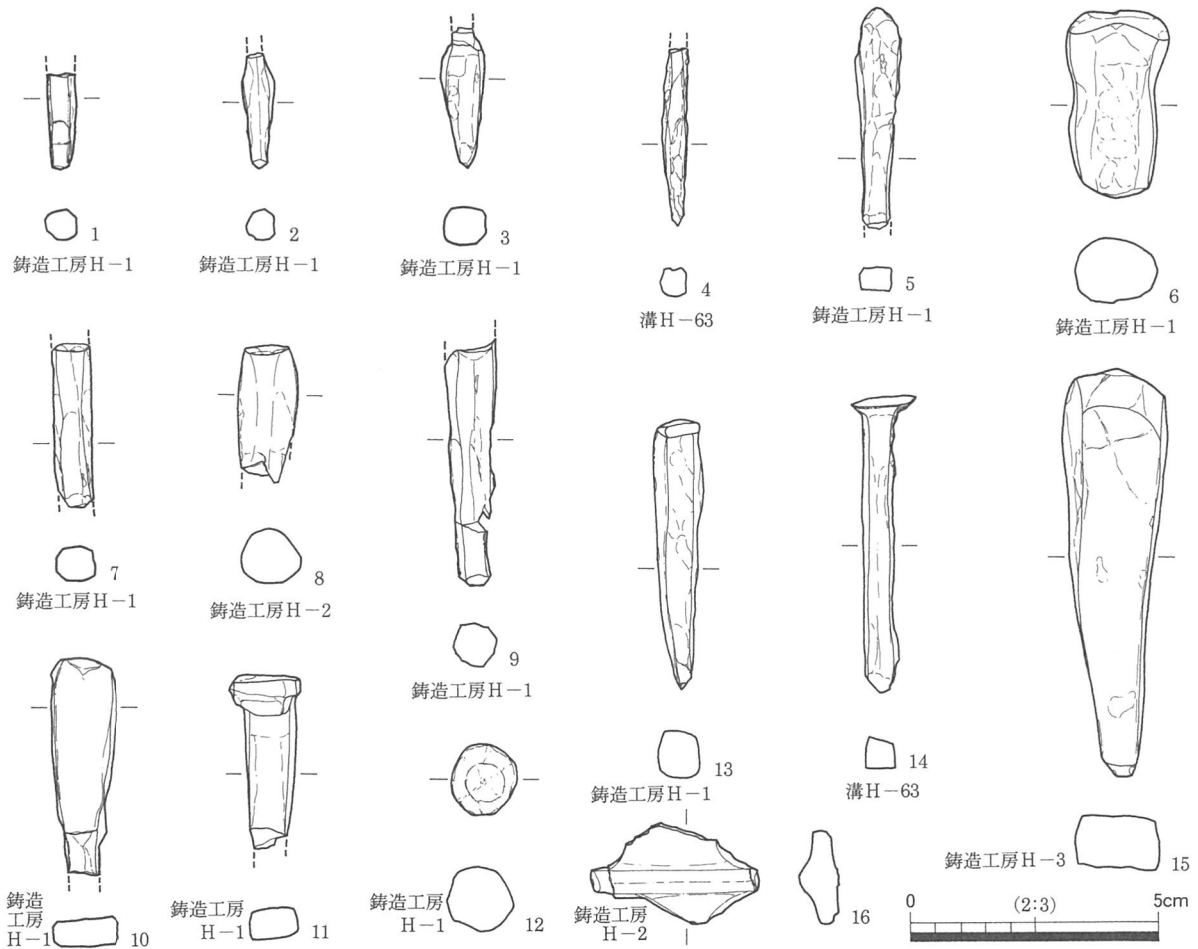
鑄造工房H-3からは数点の鉄製品が出土している。(65-15) は刀子と考えられるものであるが、刃部の最大幅が1.7cmと広いのが特徴的であり、一般的な刀子とは形態を異にする。茎部は欠損しているが、断面形は長方形を呈し、幅6mm、厚さ2mmを測る。

(71-15) はくさび状の鉄製品である。長さ8.2cmで断面形は長方形を呈する。幅および厚さは上部で2.1×1.5cm、先端部で7×6mmである。くさび状を呈しており、鑄造に関わる工具として用いられていたものと判断する。

これ以外に図には示していないが、鉄鏃が1点出土している。



図Ⅱ -70 鑄造工房・溝出土粘土塊



図Ⅱ -71 鑄造工房・溝出土鉄製品

8. 包含層出土の遺物

(1) II層出土遺物

土器 (図II-72-6~9)

いずれもH地区で出土したものである。土師器甕、須恵器杯G・鉢が出土している。(6) および (9) は南半で出土しているが、それ以外は北半で出土したものである。

陶器 (図II-72-1~5)

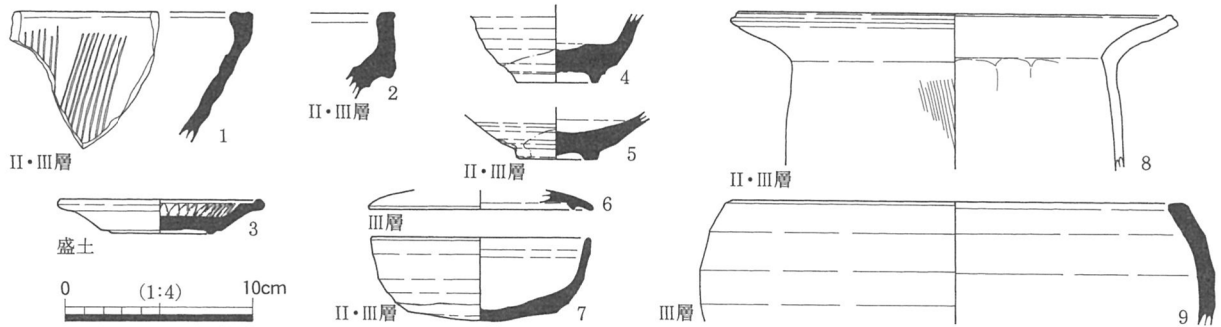
(1) は丹波?の播鉢、(2) は備前播鉢でいずれもF地区で出土したものである。(3) はG地区の盛土内から出土した瀬戸・美濃系の灰釉菊皿、(4) および (5) はF地区から出土したは唐津焼の椀である。

(2) III層出土遺物

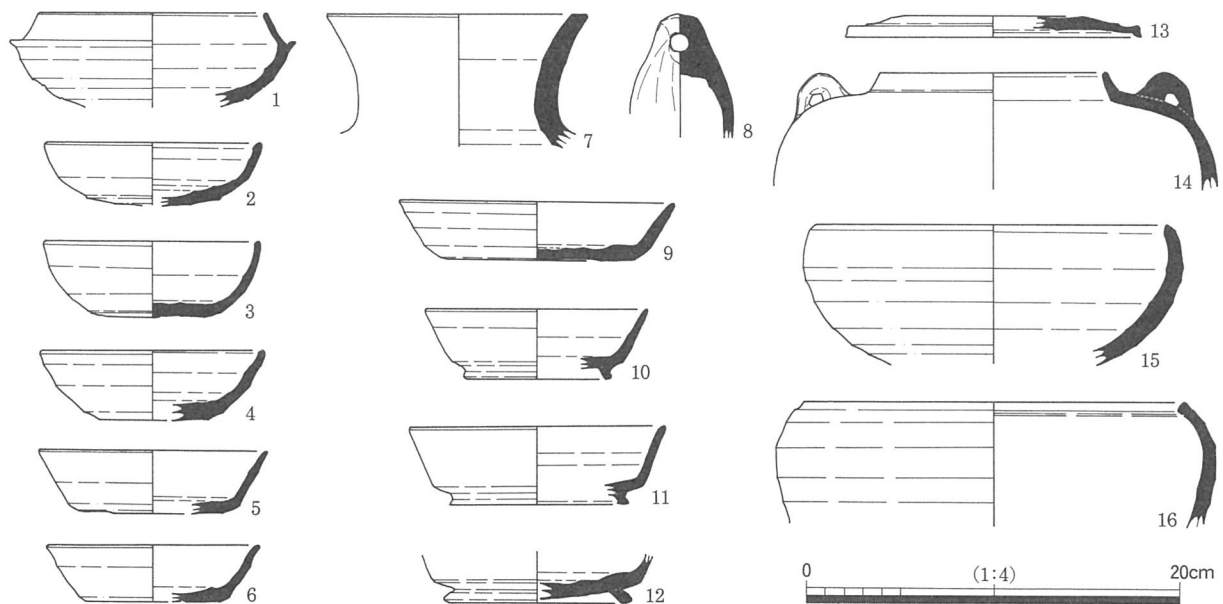
土器 (図II-73、写II-71-2~7)

いずれもH地区から出土したものであり、北半の建物群周辺で出土している。耕作などにより巻き上げられたものと考えられる土器群である。いずれも須恵器であり、明らかに古墳時代にまで遡る杯H (1) 以外は7世紀以降のものである。

杯A・杯B・杯G・壺・鉢のほか、蛸壺が出土している。年代的には7世紀後半から奈良時代にかけてのものであり、遺構群の年代と矛盾するものではない。



図II-72 II層出土土器



図II-73 III層出土土器

第4節 I地区の遺構と遺物

1. 掘立柱建物

(1) 建物 I-16 (図II-75、写II-35)

I地区の南東部から検出した掘立柱建物跡である。構造は桁行4間、梁行2間で、桁行の軸線はおおむね $N-1^{\circ}-E$ である。規模は桁行が8.3m、梁行が4.5mを測り、単純計算で面積は 37.35m^2 を測る。柱穴の掘り方は基本的には方形を呈しており、一辺40～70cm前後を測り、深さは平均して35cmを測る。一部の柱穴では明確に柱痕跡が確認でき、その直径は平均して20cmである。なお、北側の棟持柱のみが直径40cmと小さく、円形を呈している。年代を特定しうる遺物は出土していない。

なお、当該建物の桁行長は先に報告した建物H-3の桁行長と同一であり、なおかつ構造が4間×2間である点も共通し、建物の軸線も近似している状況が看取される。また、この建物跡は大局的にみると北側で検出した溝H-65および溝H-66、さらにはそれと平行して検出している柵I-2に区画されているように見えるが、建物の軸線とは必ずしも直交するものではない。

(2) 建物 I-17 (図II-75)

I地区の南東部から検出した掘立柱建物跡であり、建物I-16の北西に位置する。構造は桁行2間、梁行2間で、南北方向がやや長く、これを桁行と考える。桁行の軸線はおおむね $N-10^{\circ}-E$ であり、近接して検出した建物I-16とは方向を異にしている。なお、南西側の柱穴は近代以降の掘削によって削平されている。規模は桁行が5.0m、梁行が4.3mを測り、単純計算で面積は 21.50m^2 を測る。柱穴の掘り方は基本的には方形を呈しており、一辺50～70cm前後を測り、深さは平均して24cmを測る。当該建物においても柱の抜き取り痕跡は見られず、一部の柱穴では明確に柱痕跡が確認できる。ちなみにその直径は平均して20cm前後である。なお、この建物跡は北側で検出した溝H-65および溝H-66、さらにはそれと平行して検出している柵I-2の方向と比較的近い軸線をもっている。

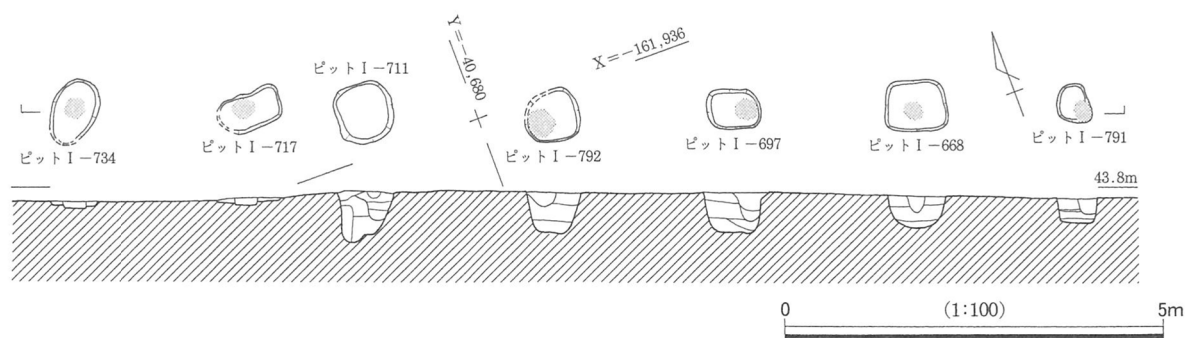
また、建物を復元するまでには至っていないものの、建物の東側からはやや小規模なピットを多数検出している。ただし、この状況は先に記した溝H-66を越えて北には広がらず、いずれにしてもこの辺りが調査区外へに広がってゆく建物群の北の区画にあることは看取できる。

2. 柵

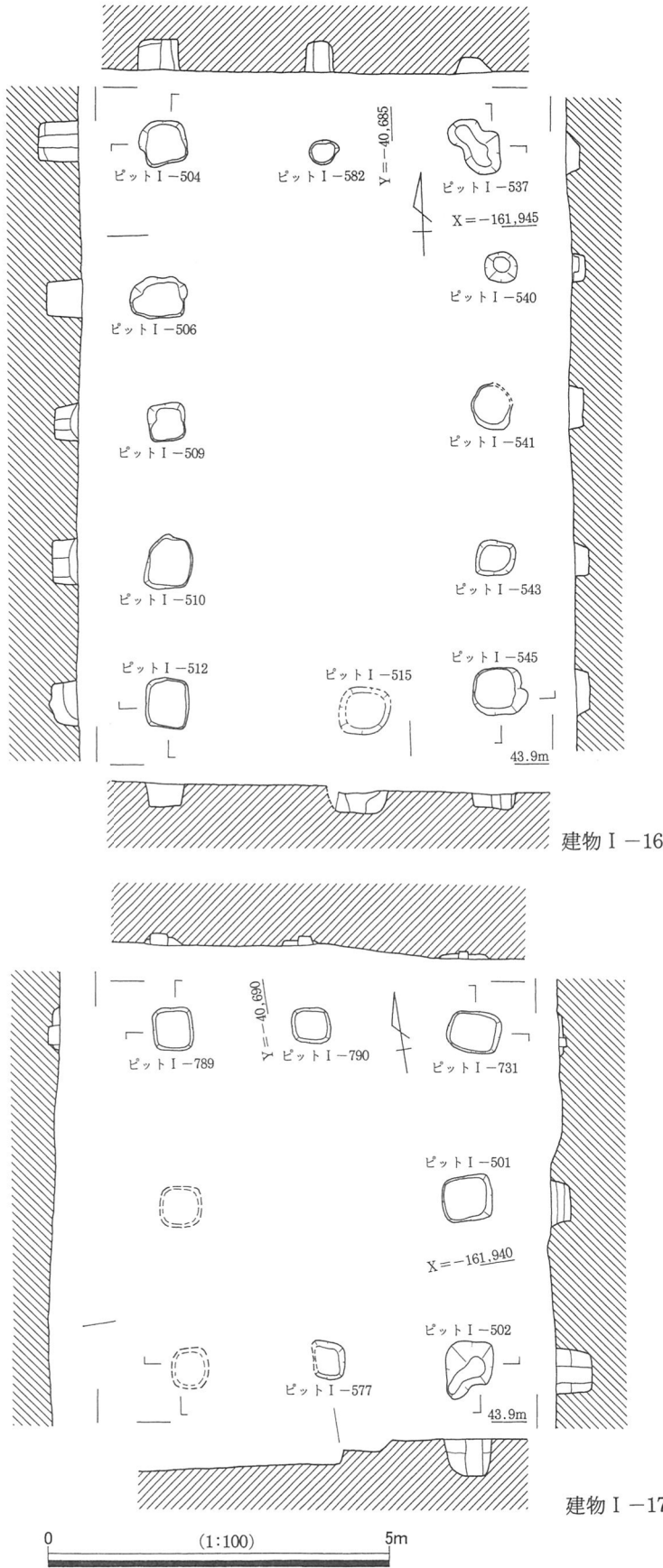
(1) 柵 I-2

A. 遺構の状況 (図II-23・74、写II-34-1)

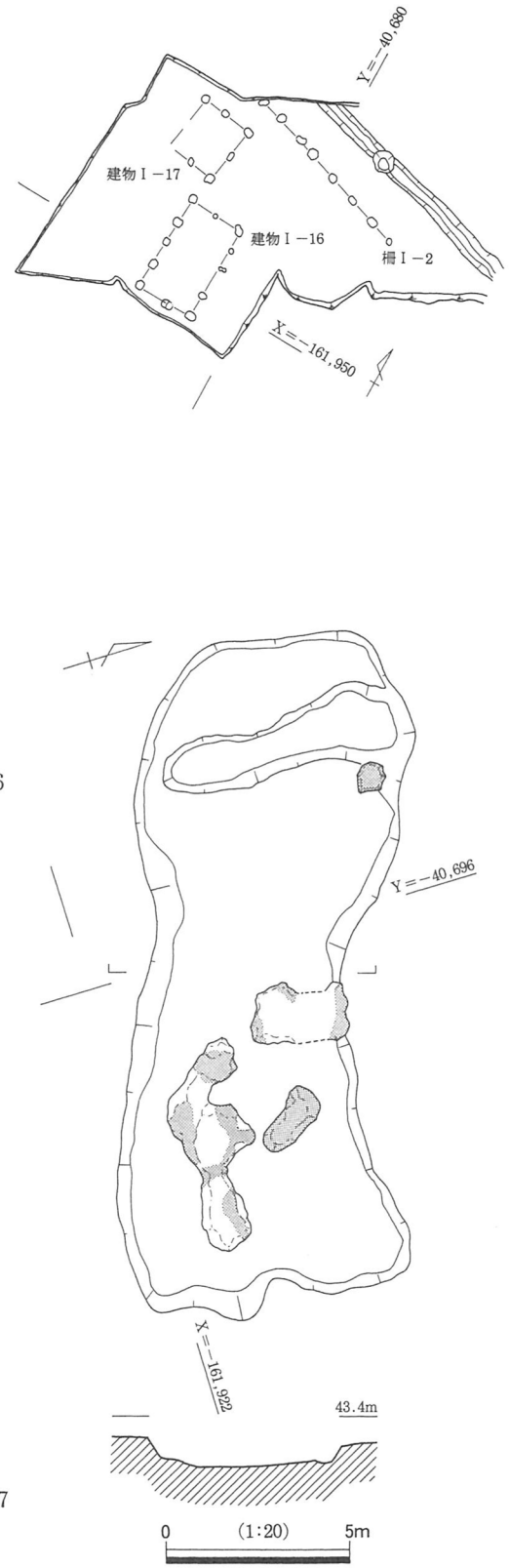
溝H-65の南側で検出した東西方向の柵である。一辺40～85cmを測る方形の掘り方をもつ柱穴を直線的に検出している。柱間寸法は2.3～2.4mである。西側の2基のピットについては深さが浅く、一



図II-74 柵I-2平面・断面図



図II-75 建物 I-16・I-17 平面・断面図



図II-76 土坑 I-71 平面・断面図

連のものではない可能性もある。

B. 出土遺物 (図Ⅱ-78-4)

柵Ⅰ-2を構成する柱穴の一つであるピットⅠ-711から土師器の小型壺が出土している。外面には指頭圧痕が明瞭に残る。

3. 溝

(1) 溝Ⅰ-88・110

A. 遺構の状況 (付図2)

溝Ⅰ-88および溝Ⅰ-110はⅠ地区の北東で検出したものであり、前者はL字状の溝、後者は東西方向の溝である。特筆すべき遺構ではないが、わずかに遺物が出土していることから報告しておくことにしたい。

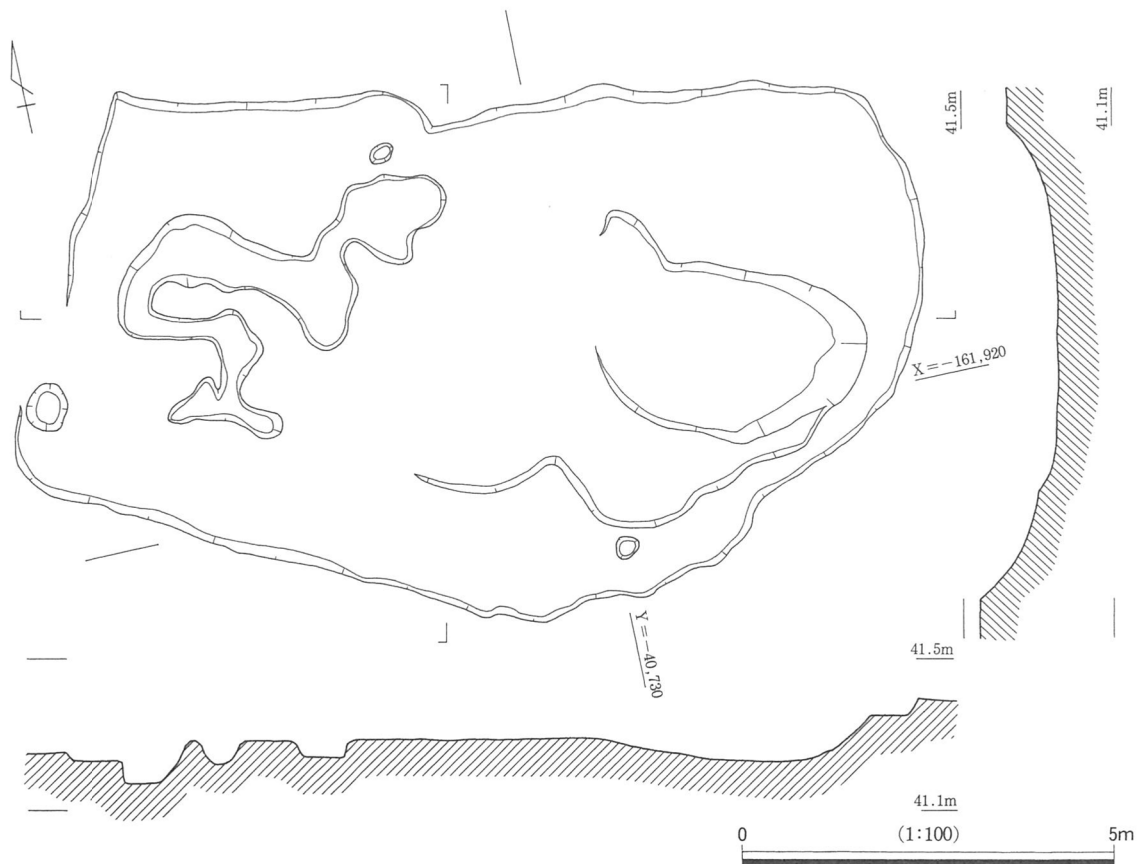
B. 出土遺物 (図Ⅱ-78-3,6)

溝Ⅰ-88からは土師器鍋(6)、溝Ⅰ-110からは須恵器皿(3)が出土している。前者は口径39.6cmを測る大型品であり、後者は大きく平らな底部から口縁部が短く外上方に立ち上がるものである。

4. 井戸

(1) 井戸Ⅰ-14 (付図2、写Ⅱ-38)

Ⅰ地区東側のほぼ中央で検出した素掘りの井戸である。平面形はほぼ円形であり、直径は1.47m、深さは比較的浅く、85cmを測るのみである。図化していないが、埋土中から土師器杯Cが1点出土している。



図Ⅱ-77 土坑Ⅰ-110平面・断面図

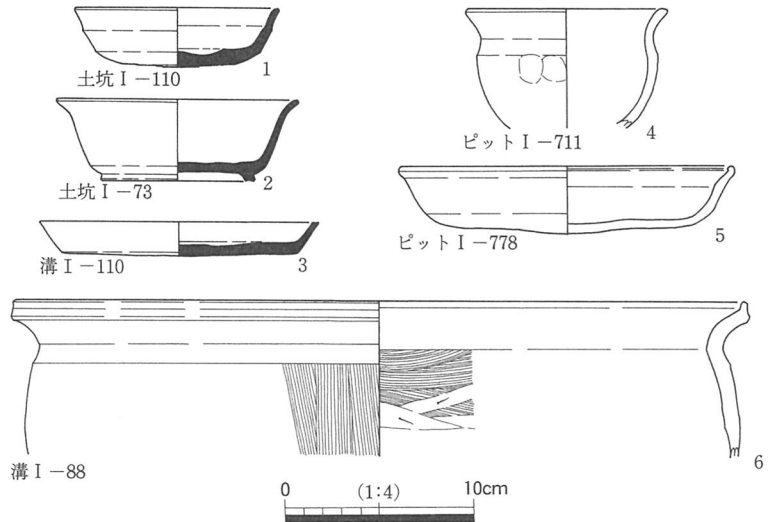
5. 土坑

(1) 土坑 I -71

(図Ⅱ-76、写Ⅱ-33-4,5)

I 地区南東で検出した土坑である。平面形は隅丸の長方形を呈し、長辺を東西方向に向ける。

規模は長辺1.87m、短辺53~78cmで、深さは削平のためか、5~10cmが遺存するのみである。埋土からは炭化物片・須恵器片・スラグなどの細片が出土し、底面東側では被熱して変色した粘土塊を検出している。



図Ⅱ-78 I 地区溝・土坑・ピット出土土器

(2) 土坑 I -110 (図Ⅱ-77、写Ⅱ-37-1)

I 地区の中央やや北東よりで検出した落ち込みである。規模は長辺11m、短辺が5.5~7.0mを測り、深さは東側の最深部で20cm前後、西側では数cmを測るのみである。断面形状は臼状を呈している。埋土は灰褐色のシルトであり、古代以降の土器片が出土している。また、わずかではあるが、トリベの破片と推定される破片が出土している。

そのほか、土坑 I -73 からは口縁部がラッパ状に広がる須恵器杯Bが出土している。

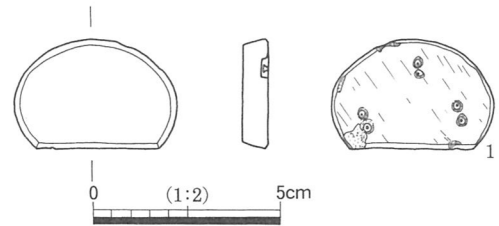
6. 包含層出土の遺物

(1) 石製品 (図Ⅱ-79、写Ⅱ-70-1)

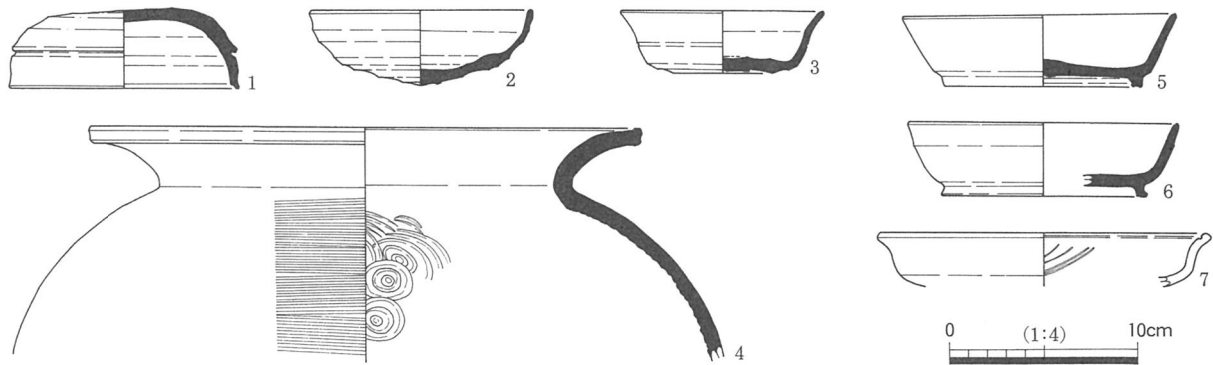
図Ⅱ-2 に示した4 s I トレンチの包含層から出土した石帯である。丸軀で裏面には3ヶ所にくぐり孔が開けられる。材質は頁岩と考えられる。

(2) 土器 (図Ⅱ-80)

I 地区の包含層からは土師器杯A、須恵器杯H・杯G・杯Bのほか、甕が出土している。杯Hは古墳時代のものであるが、それ以外は古代の所産である。また、図には掲げていないが、小型の円面硯も出土している。



図Ⅱ-79 I 地区包含層出土石帯



図Ⅱ-80 I 地区包含層出土土器

第5章 平安時代以降の遺構・遺物

第1節 G・I地区の遺構と遺物

平安時代以降の遺構は調査区全体を通して希薄であり、F地区やH地区では耕作に伴うと考えられる溝や土坑が検出されたものの、特筆すべき遺構は見られない。したがって、ここではG地区およびI地区で検出した平安時代以降、近・現代に至るまでの顕著な遺構および遺物を一括して扱うことにしたい。

1. 掘立柱建物

(1) 建物G-2 (図II-81、写II-39)

G地区の南東部で検出した掘立柱建物跡である。構造は桁行3間、梁行2間であり、東西方向を桁行とする。規模は4.8m×3.1m、面積は14.88㎡である。柱掘り方は円形であり、古代の建物跡に比して小振りである。年代を特定しうる遺物の出土はないものの、柱穴の埋土が室町時代の遺物を含む包含層の近似していることなどから、古くとも平安時代以降の建物跡と考えている。

2. 炉壁集積

(1) 炉壁集積遺構I-1 (付図II-1、写II-37-3,4)

平安時代のもと考えられる炉壁片の集積は6wI、6I、2Iトレンチで検出している。そのうちでも6Iトレンチでは検出した流路の西側肩部から面的に集中して路壁が出土している。炉壁集積遺構I-1としたこの遺構は東西3m、南北10mの範囲で厚さ10cmの炉壁が破砕した状態で堆積しているものである。検出段階において南半の分布の中心が偏る傾向が見られるが、これ以外に特筆すべき事実が認められない。

3. 自然流路

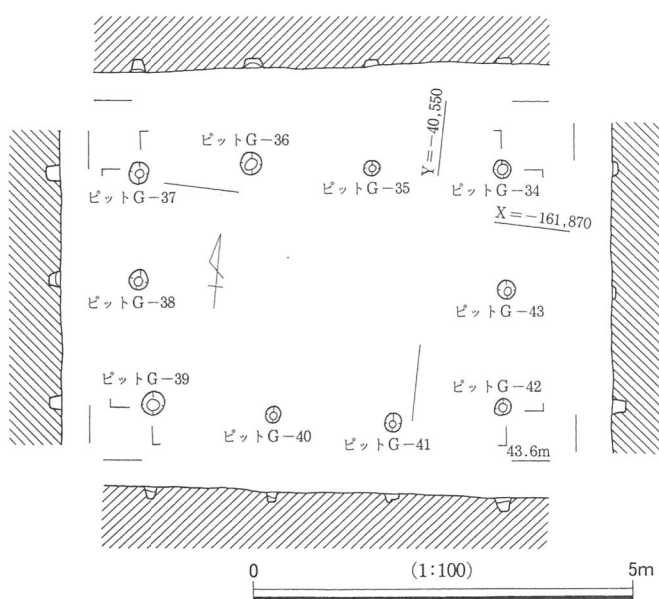
(1) 自然流路I-2 (付図II-1・図II-82-3,4)

I地区の自然流路の状況についてはすでに古墳時代の項で報告を行っているが、その上層では中世以降の遺物が出土している。下図に掲げた(3)および(4)はいずれも自然流路I-2の上層から出土したものであり、龍泉窯系の青磁碗である。

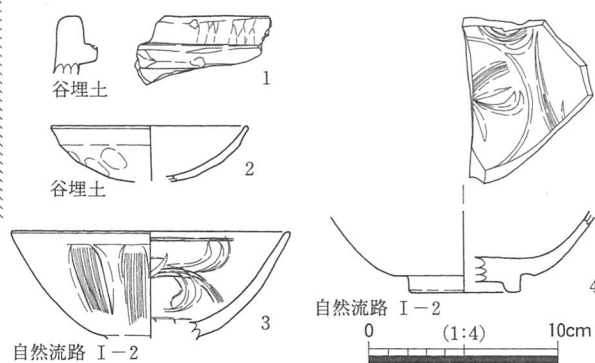
また、これ以外にG地区東寄りの包含層では

石鍋(1)や瓦器碗(2)も出土している。

いずれにしても平安時代から中世にかけての遺構・遺物とも希薄である。



図II-81 建物G-2平面・断面図



図II-82 谷・流路出土遺物

4. 掩体

(1) 掩体 I -1 (図II -83、写II -36-2)

I地区の南東で検出した掩体である。トレンチをまたがって検出したことや、攪乱として扱われていることから不明な点も多いが、簡単ではあるが報告しておくことにしたい。

掩体 I -1は上部を大きく削平されているが、西側では地山を削り込んでいることもあって規模を推定することが可能となっている。掩体の外径は22.5mを測り、その内側は直径7.5mで臼状に掘り込んでいる。したがって、当該遺構を俯瞰するとドーナツ状を呈することとなる。なお、臼状の掘り込み部分は底面で直径3mの円形の平坦面となっており、そこからは完掘していないが、筋状の礫敷きを2ヶ所で検出している。また、掩体の一部は西側の一部が溝状に掘り込まれており、さらにその下面では幅40cmの溝が分岐、屈折しつつ西へと伸びている。

調査地においては高射砲陣地の可能性が考えられていたが、単独で存在することや掩体の形状などから、防空聯隊（高射砲聯隊）傘下の照空中隊もしくは聴測中隊に帰属する分隊の陣地であった可能性が高い。なお、掩体の構造のみで見た場合、90式小聴音機をなどを敷設したものである可能性が高く、この場合、西側にのびる溝は発電自動車からの電線を埋設したものである可能性が浮上する。

いずれにしても、高射砲聯隊のうち、照空中隊や聴測中隊は六個分隊が分散して陣地を構築しており、今回の掩体は現在のところ部隊名までは特定できないが、大阪における戦時下の防空体制を知る上で重要な意味をもつものであるといえる。



図II -83 掩体 I -1 平面・断面図

第6章 まとめ

Ⅱ調査区において検出した主な遺構は小方墳をそれに関連する遺構を除けば、飛鳥・奈良時代の建物群と鑄造関連遺構群に集約される。このほか、わずかに平安時代以降と考えられる遺構も検出してはいるが、遺構・遺物ともに僅少であり、Ⅰ調査区での状況とは対照的である。各時期の遺構の詳細については、すでに報告してきた通りであるが、ここでは調査成果の概略を簡単にまとめておくことにしたい。

1. 弥生時代以前

当調査区においては弥生時代以前の顕著な遺構は全く検出されず、包含層や谷部の堆積層中からわずかに土器・石器類が出土したのみである。土器では縄紋時代晩期のもののほか、弥生時代中期の壺なども出土している。明確な遺構は検出されず、この段階での土地利用のあり方については不明である。

2. 古墳時代

古墳時代の遺構はH地区から検出した方墳4基とそれに近接して検出した埴輪円筒棺と土壙墓である。方墳はいずれも10m以下の小規模なものであり、削平を受けていることもあって墳丘盛土はまったく遺存しておらず、当然のことながら埋葬施設は検出していない。ただし、周溝内からは5世紀末から6世紀初頭頃の須恵器が出土しており、その造営が黒姫山古墳やⅠ調査区で検出したさば山古墳の築造とほぼ同時期に行われたものであると判断される。また、周辺から検出した埴輪円筒棺および土壙墓についても確証はないものの、古墳時代のものである可能性が高いものと考えている。

黒姫山古墳については周辺に小規模な古墳が散在することは知られていたが、今回の調査ではさらに離れて小規模な方墳群が存在していることが明らかとなり、黒姫山古墳周辺の景観を復元する上でいてきわめて重要な要素となりうるものといえる。

3. 古 代

H地区とⅠ地区東部では飛鳥時代から奈良時代にかけての建物群を検出している。

建物群は条里型地割りに沿って掘削された区画溝によって北半の一群と南半の一群に分かれる。また、その間では奈良時代前半の土器を出土する鑄造関連遺構群を検出し、その一つからは和同開珎が出土している。

また、井戸の一つでは円筒埴輪を井戸枠に転用し、積み上げたものも検出している。この井戸H-10では井戸枠転用埴輪のいくつかは堺市にある日置荘埴輪窯の系統の埴輪であることが明らかとなっている。井戸の構造としても非常に興味深いものがあるが、また一方でこれらの大型の円筒埴輪を樹立した古墳が近接して存在していた可能性をも示唆する点でも重要である。

なお、当遺跡特徴づけるものの一つは奈良時代の鑄造工房の検出である。これは平城京内における鑄造遺構との比較においても重要な位置を占めるものであり、冒頭でも記したように当遺跡が所在する地域を本願地とする多治比真人氏との関係も想定されるものである。

4. 中世以降

平安時代以降では顕著な遺構・遺物は検出されず、すでに報告したようにわずかな遺構が検出されたのみであり、奈良時代以降は耕作地としては利用されていた可能性はあるものの、生活空間としては利用されていない。そのほか、昭和時代の遺構ではあるが、防空（高射砲）聯隊に関連するものと考えられる掩体を検出している。

第Ⅲ部 Ⅲ調査区の調査成果

第1章 調査の概要と前提

第1節 位置と地形環境

調査区全体の位置関係については冒頭で記述してきた通りである。

以下では、Ⅲ調査区の位置関係および関連する地形等の周辺環境についてのみ簡潔に記しておくことにしたい。

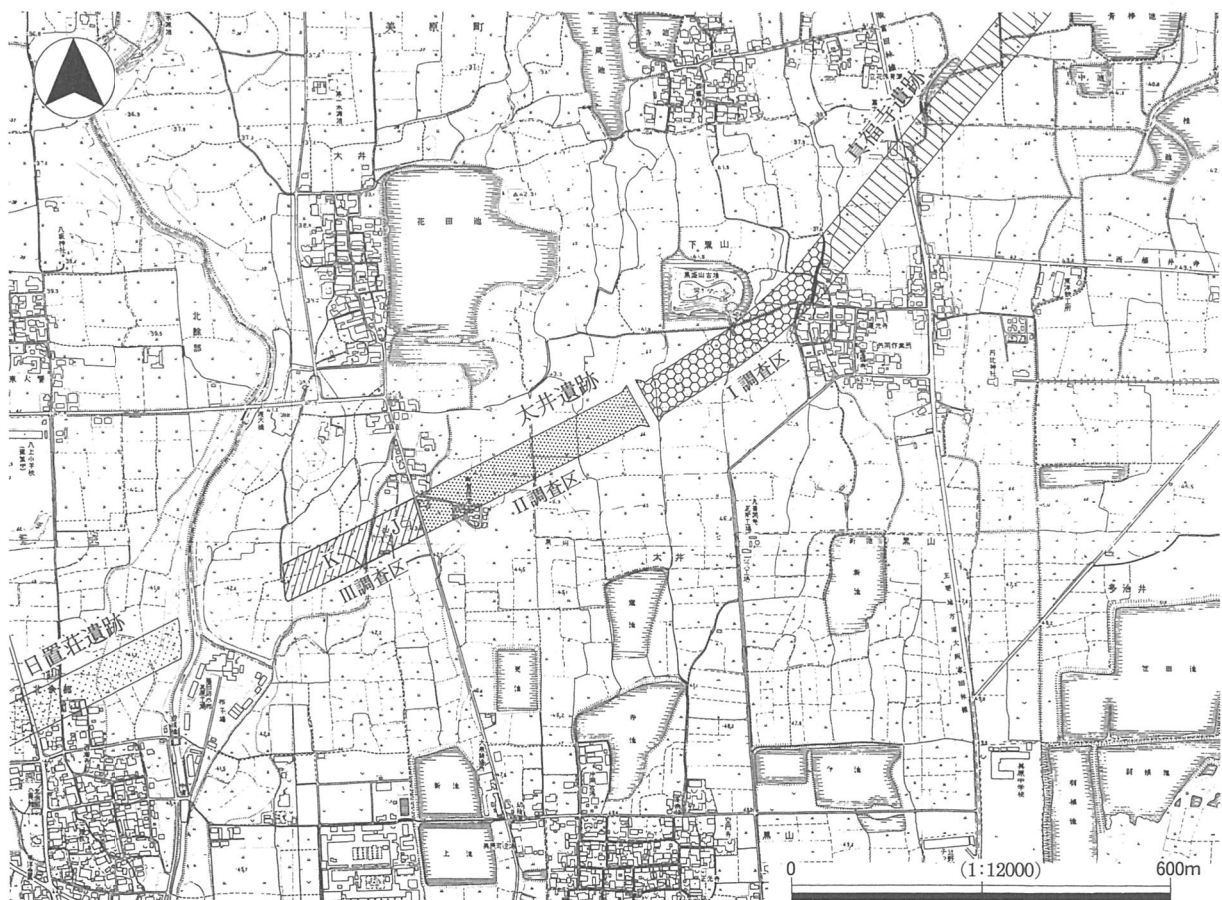
1. 位置 (図Ⅲ-1)

Ⅲ調査区は南北方向にのびる町道太井阿弥線を東端、西除川を西端とする延長約220m、幅70mの間を包括する調査区である。行政的には大阪府南河内郡美原町太井に位置する。

なお、当調査区は太井遺跡として調査を実施した調査地中で最も西側に位置している。東は町道を挟んでⅡ調査区のⅠ地区と隣接している。一方、西側は西除川を挟み、日置荘遺跡とは隔たっている。

2. 地形環境

Ⅲ調査区は遺跡周辺の空中写真(写Ⅰ-1)を一見してもわかるように西半部が西除川の氾濫原に該当しており、北側に所在する菅田池の南西コーナー部分にむけて表層地割が大きく乱れる部分に位置しており、この部分の標高は39～40m前後を測る。東半部はこれに沿うように段丘崖が南北にのびてお



図Ⅲ-1 Ⅲ調査区の位置

り、現地表面の標高は西半部よりも相対的に約2m前後高く、42mを測る。

なお、現況の地形分類では西半部が西除川によって形成された谷底平野にあたり、全体に平坦である。また、東半部は洪積世下位段丘面に該当しており、南から北に向けて緩やかに傾斜していることが窺われる。

第2節 調査方法

全体的な調査方法については本書の冒頭に記述した通りである。ここではⅢ調査区におけるトレンチの設定および調査の経過について記しておく。

1. トレンチの設定 (図Ⅲ-2)

調査区の延長は約220m、幅70mではあるが、地形環境の項でもふれたように当調査区は西半部と東半部でその状況が大きく異なっている。したがって、当調査区では調査地を段丘崖の上端を南北に走る農業用水路を境として東西に2分割し、東からJ・K地区とした。なお、各地区内のトレンチは調査の順序を示す数字を冠して表記を行っている。

調査区全体を通して外側の府道部分は1次調査として全面発掘を行っているが、内側の高速道路部分の2次調査は大阪府教育委員会の立会での判断に基づいて、全面発掘もしくは橋脚部分のみの調査かを決定している。J地区の西半部およびK地区におけるトレンチ形状が複雑になっているのは、上記の理由に起因している。

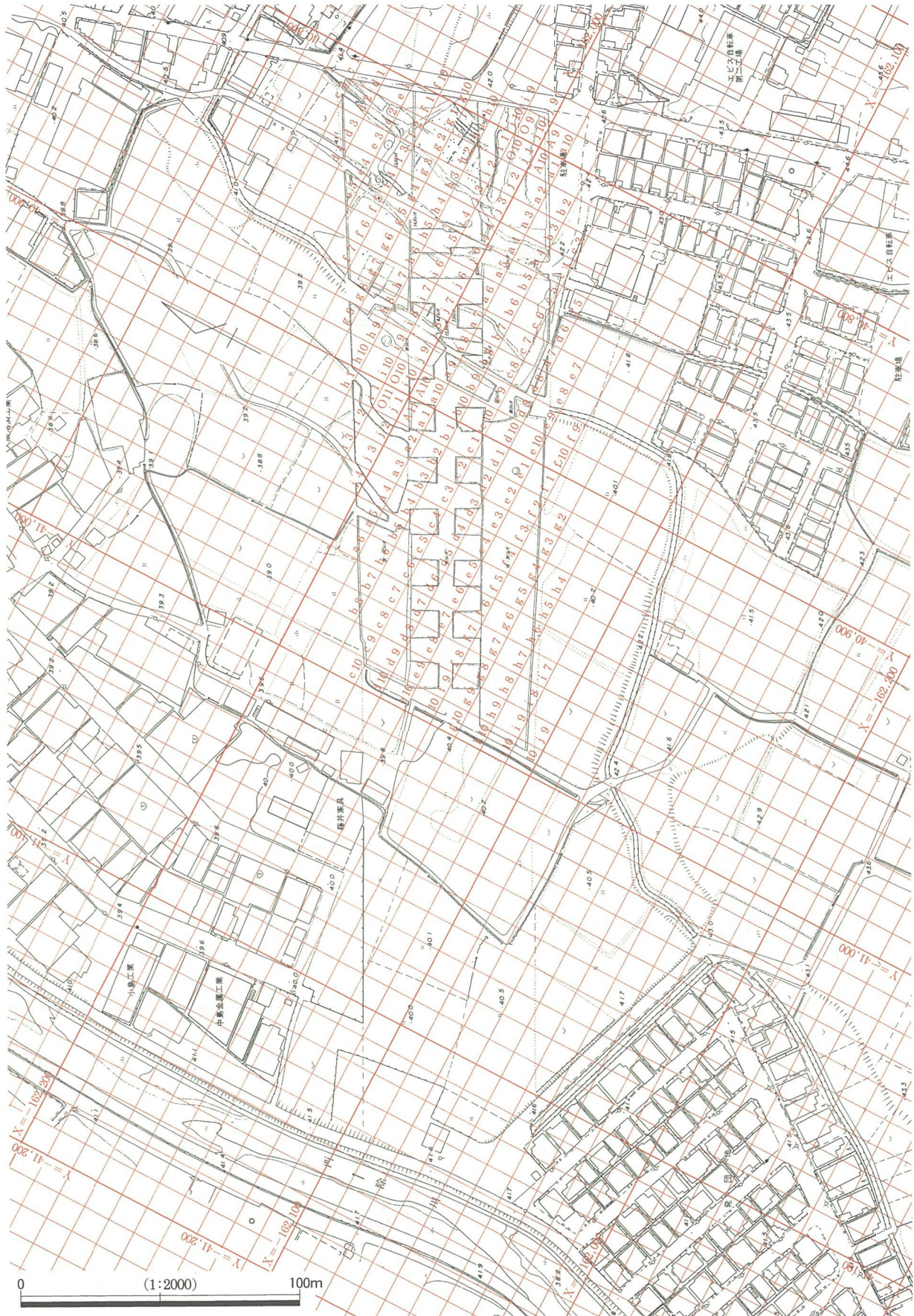
2. 調査の経過 (表Ⅲ-1)

1975(昭和50)年、美原町を北東から南西方向に横切る都市計画道路松原・泉大津線の計画に伴う分布調査を行い、美原町域では丹上、真福寺、太井、余部の4ヶ所で遺物の散布を確認している。

その後、計画が具体化した段階で、都市計画道路松原・泉大津線の施工者—大阪府南部特定事業建設事務所と近畿自動車道と歌山線の施工者—日本道路公団大阪建設局、それに当センターと大阪府教育委員会文化財保護課の四者は発掘調査に関する協義を重ね、当調査区は1985(昭和60)年12月2日に契



図Ⅲ-2 トレンチ配置図



図III - 3 地区割設定図

約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

当調査区もⅠ・Ⅱ調査区と同様に、調査の大半は1986年度に実施しているが、この時点で調査できなかった農業用水路や里道の下層にあたる10J～15Jトレンチおよび6K～8Kトレンチは1988年度に調査を実施している。

各トレンチの発掘年度および担当者、既報告については以下の表の通りである。

表Ⅲ-1 Ⅲ調査区の調査一覧表

調査年度	トレンチ	調査担当者	概要報告書
1986年度	1J～9J, 1K～5K	金光正裕・松山 聡・ 中村淳磯	『太井遺跡（その3）調査の概要』1987
1988年度	10J～15J, 6K～8K	国乗和雄	『太井遺跡（その4ほか）・日置荘遺跡 （その1-2）調査概要』1990

3. 調査の方法（図Ⅲ-2, 3）

全体を通しての調査方法については冒頭に記してきた。ここではとくに当調査区に関する事項のみを記しておく。

発掘調査は、まず現代の水田作土層および盛土層をバックホーによって除去し、包含層や自然流路を含む遺構については人力で掘削を行っている。個々の遺構については臨機に実測を行っているが、最終遺構面の測量はヘリコプターを用いた写真測量により20分の1の図を作製している。

当調査区の地区割りは、他の調査区と同様に国土座標に基づいて行っており、100m四方の第Ⅲ区画をトレンチ配置図（図Ⅲ-2）に明示しているほか、10m四方の第Ⅳ区画についても調査区にかかる部分については煩雑ではあるが明記している（図Ⅲ-3）。遺構の地区表示では、この国土座標による平面的な地区割りをを用いており、遺物の取り上げに際しては、上記の地区割りとともに後述する基本層序に基づいた層位表記によって基本的に10m四方のグリッドを最小単位としている。

第3節 調査成果の概要

1. 基本層序（図Ⅲ-4）

当調査区は先にも記したように洪積世下位段丘および谷底平野にわたって立地することから、起伏に富んだ地形を有しており、段丘上の一部では現代の作土および心土（床土）を除去した段階で地山が露頭する部分もある。したがって、遺跡全体を通しての鍵層となるような堆積土層を見いだすことはできない。

当調査区においてもこれまでに記してきたように複雑にトレンチが設定されており、トレンチの長軸方向の連続する土層断面図を作製することが困難であった。

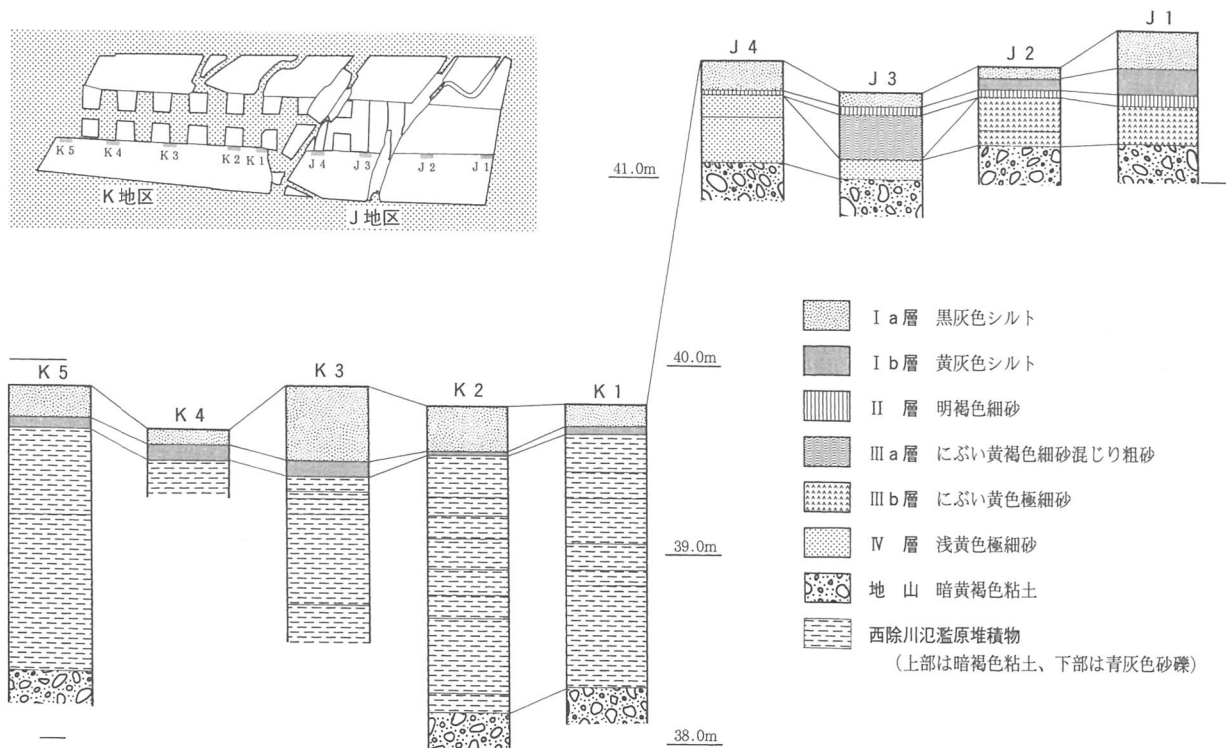
したがって、ここでは基本的な土砂の堆積状況を大局的に捉えるために土層柱状図（図Ⅲ-4）を提示するのみにとどめる。なお、基本層序については、遺跡全体が複雑に交錯する開析谷を横断することもあり、各調査区によって様相を異にしている。したがって、以下に示す層序は基本的にⅢ調査区のみ適用するものと認識されたい。

当調査区における堆積層は大局的にみた場合、J地区では5層に大別が可能である。しかし、J地区

は段丘上に位置することから、堆積作用があまり進んでいない上に削平や整地などの頻繁な地形の改変が行われた状況が窺われる。ここでは、全体をⅠ～Ⅳ層に分けているが、調査区全体に堆積するものは概して少ない。以下、調査区全体を通しての基本層序の記述を行う。

- Ⅰ a 層 黒灰色を呈するシルトで現代まで継続していた水田面の作土層である。なお、J 3およびJ 4とした地点ではこの上面に若干の盛土がみられる。層厚は10～40 cmであり、調査区全面にわたって観察される。遺物はほとんど出土していない。
- Ⅰ b 層 黄灰色を呈するシルト層で、近現代水田に伴う床土（心土）層もしくは旧作土層である。層厚は平均して約10 cm。東半部に局地的に確認されるのみである。
- Ⅲ 層 明褐色からにぶい黄褐色を呈する均質な細砂層である。主としてJ 地区の北半において顕著である。基本的に遺物の混入は認められない。
- Ⅲ a 層 にぶい黄褐色を呈する細砂まじり粗砂である。細分しているものの大局的にはⅢ b層の上部として基本的に同一層と捉えることが可能である。
- Ⅲ b 層 にぶい黄色を呈する極細砂であり、調査区の東半部全域に分布する。北へいくにつれて層厚が漸増する。均質で混入物が少ないが、石器を包含する。
- Ⅳ 層 浅黄色を呈する細砂まじり極細砂である。均質で混入物は少ない。

なお、地山に関しては、当地区の東半部と西半部では様相を異にしており、概略的にみるならば、1 J・3 J トレンチ東半部においては礫層、その他の部分においてはその礫層の上に堆積する暗黄褐色の粘土層をもって地山と認識している。また、4 J トレンチ西半部において確認した石器包含層は局地的に展開し、基本層序との直接的な対応ができないが、当該トレンチの断面観察によれば、Ⅳ層直下、地



図Ⅲ - 4 土層柱状図

山礫層直上に位置づけることができる可能性が高い。

なお、西除川の氾濫原にあたるK地区では上部に灰褐色～暗褐色粘土が堆積し、下部には灰褐色～青灰色の砂および砂礫などの自然堆積層が互層となって確認される。

2. 遺構・遺物の概要

当調査区では、K地区が西除川の流路変化によって形成された谷底平野に該当しており、発掘による調査成果の主体はJ地区にある。J地区ではその帰属時期には問題を残すものの、旧石器時代にまで遡る可能性が高い石器包含層が検出されており、その他は2ヶ所で検出した自然流路との関わりで生活痕跡が検出されている。以下、時代順に概略を記しておくことにしたい。

(1) 旧石器時代

J地区において2地点で石器の包含層を検出している。しかしながら、その所属時期については調査段階においても指摘がなされているように旧石器時代の所産とするには根拠が薄弱である。

(2) 縄紋時代

J地区の南東部で検出した自然流路J-2が南西から北東方向に流れる流路であったことを確認している。当該流路の下層に堆積している黒色粘土層中から出土している流木は、C14年代による測定によって3250±35年B.P.の年代が与えられている。また、堆積層中の比較的上層の部分からは縄紋時代晩期の土器のみを包含する堆積層が形成されており、この流路の初現時期は少なくともそれを遡る時期であることが分かる。

(3) 弥生時代

上記の自然流路J-2が狭小化し、北側部分に小規模な流れが残る段階であると考えられるが、顕著な遺構は確認できず、包含層等から石槍などがわずかに出土しているのみである。

(4) 古墳時代

古墳時代中期には自然流路J-2は再び強い水流に以前の堆積層を抉りこむ形で浸食されて地山の砂礫層に達するまでの流路が形成される。これに伴って流路の西側から北側にかけての肩部をL字形に掘削して流れを屈曲させるなどの人為的改変が行われている。当該期の堆積層からは円筒埴輪や土器類、鋤や弓などの木製品も出土している。このほか、J地区の北西部からはピットが検出されており、そのうちのピットJ-1・J-2では底面に土器を据えた後に礫で埋め戻している状況が確認されている。

(5) 古代

当該期には自然流路J-2は溜め池状を呈しており、その北側の平坦面からは多くの遺構が検出されている。主な検出遺構は奈良時代の灌漑用水路、平安時代の溝、ピット、建物、土坑のほか、炉壁の集積などである。とくに流路の北側からは4ヶ所で炉壁片が集積した遺構（炉壁集中部J-1～4）が検出されており、そこからは鉄滓も出土している。付近に鉄の溶解炉が存在し、鉄生産が行われていたことを示している点では河内鑄物師との関連などを考慮しても重要な調査成果であるといえる。

(6) 中世

建物群や金属生産に関わる遺構が検出された古代とは一変して、当該期には当地区は耕作地となる。この段階に至って自然流路J-2は埋め立てられ、その上面では荷車の轍の痕跡も検出されている。

(7) 近世

基本的に中世の景観と大きく異なるものではないが、西除川の氾濫原である谷底平野には水田が拡大する。

第2章 旧石器時代の遺構・遺物

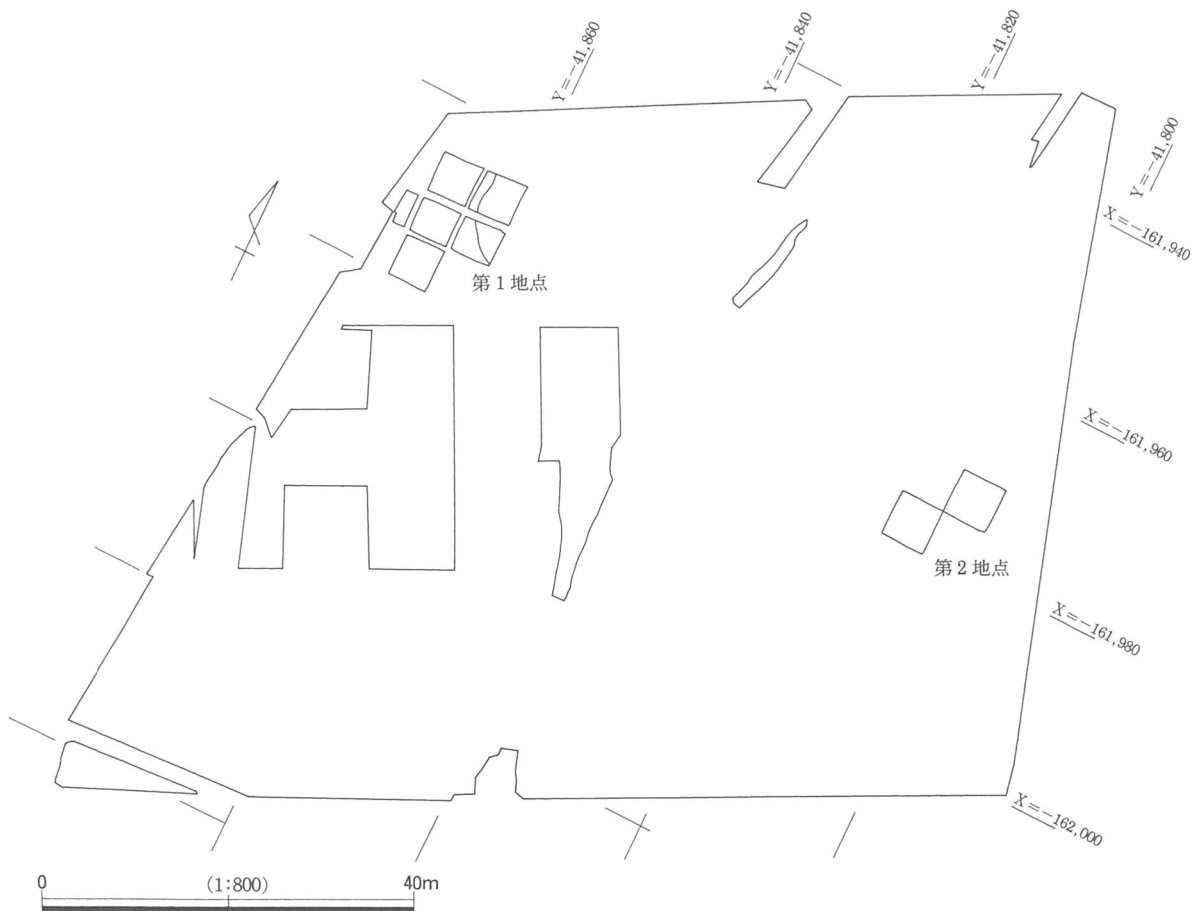
第1節 概要と前提

本章で扱う旧石器時代の状況については概報段階における松山聡氏の詳細な報告があり、これについては現在においても大きく変わるものではない。以下の報告は基本的には松山氏の手による概要報告書の記述の転載であることをあらかじめ断っておく。

本文における「石器」の用語は広義の石器類を指して用いており、石核、剥片、碎片等をすべて包括するものとしている。したがって狭義の「石器」に対しては「ツール」の用語をあて、両者を明確に区別して混乱を避けている。ただし、固有の器種に対応する名称（例えば「ナイフ形石器」など）に関してはこの限りではない。

当遺跡からは約900点にのぼる石器が出土している。チャート製の尖頭器1点以外は総てサヌカイト製である。その内860点はJ地区より出土しているが、それらの大半は後世の遺物包含層中に混入した遺物であり、原位置を保っていない。また前記の状況から、旧石器時代から弥生時代に至るまでの各期の遺物が混在している。

しかし、その分布範囲はJ地区でも東半部に偏っており（図Ⅲ-5）、単純に2次元平面に投射した分布密度をみると、1㎡あたり0.5個前後という高密度で分布している。



図Ⅲ - 5 石器包含層検出地点

周辺諸遺跡では石器の出土数が2桁のオーダーを超えないという状況と比較してもその出土量、密度共に際立った様相を呈している。

沖積平野のような遺物の重層堆積がさほど期待できない洪積台地上にあってこのように高密度で石器が出土するという事実は、少なくとも当調査区の周辺に石器時代の良好な遺跡が存在することを示唆しており、仮に遺物数を単純に3分して各期にあてたとしてもこの傾向が減じられることはない。

出土石器を概観すると剥片類がその過半数を占めるが、石核、ツールもまんべんなく含まれており、大きな盤状剥片から小さな石鏃に至るまで様々な種類の石器が渾然と出土している。

第2節 J地区の石器包含層と石器

当調査区においては2地点で旧石器時代に属すると考えられる包含層が検出されており、その西側部分を第1地点、東側部分を第2地点とする(図Ⅲ-5)。

基本層序の項でも若干触れているが、いずれの層も調査途中までは地山あるいは段丘礫層上に乗る無遺物層として扱われていたものであり、土器類の混入は認められない。少なくとも歴史時代とは明確に一線を画する時期に形成された層として考えられる。

出土石器はほとんどが石核、剥片であり、ツールは1点のみである。

ただし、これらの包含層の調査は、便宜上グリッド調査に頼らざるを得なかったために、それぞれの地点において国土座標軸に沿った5m×5mのグリッドを設定し、そのいくつかに関して調査を行った。

したがって、それらの包含層の全貌を明らかにしえたとは言い難いが、第1地点に関しては包含層の分布が局所的であり、ほぼ全掘に近い状況であるといえる。第2地点に関しては調査所見によれば、その分布がさらに広範囲にわたる可能性が指摘できる。

1. 第1地点(図Ⅲ-6上段)

(1) 包含層の状況

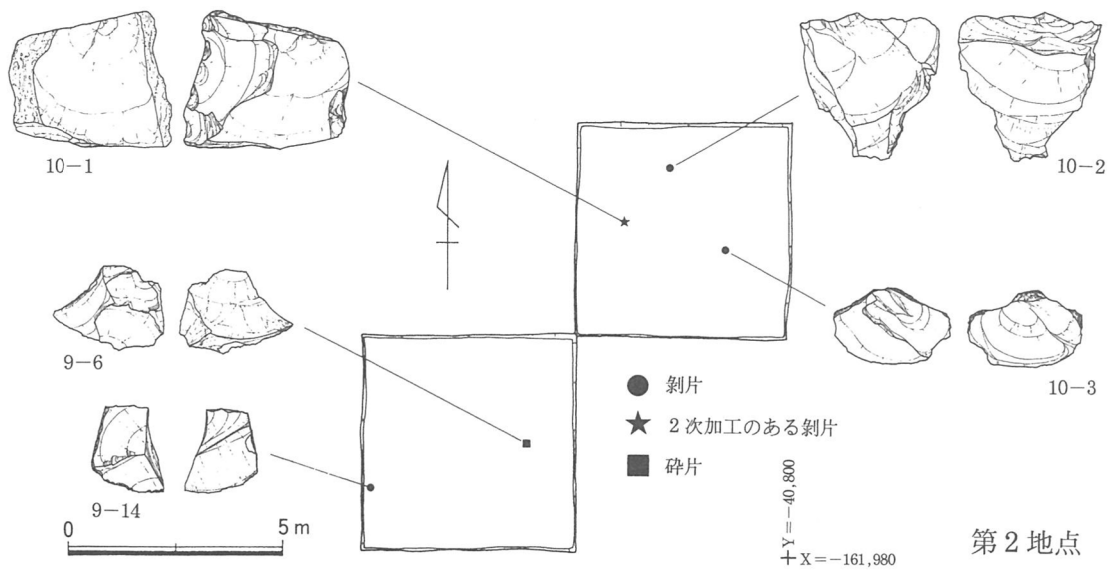
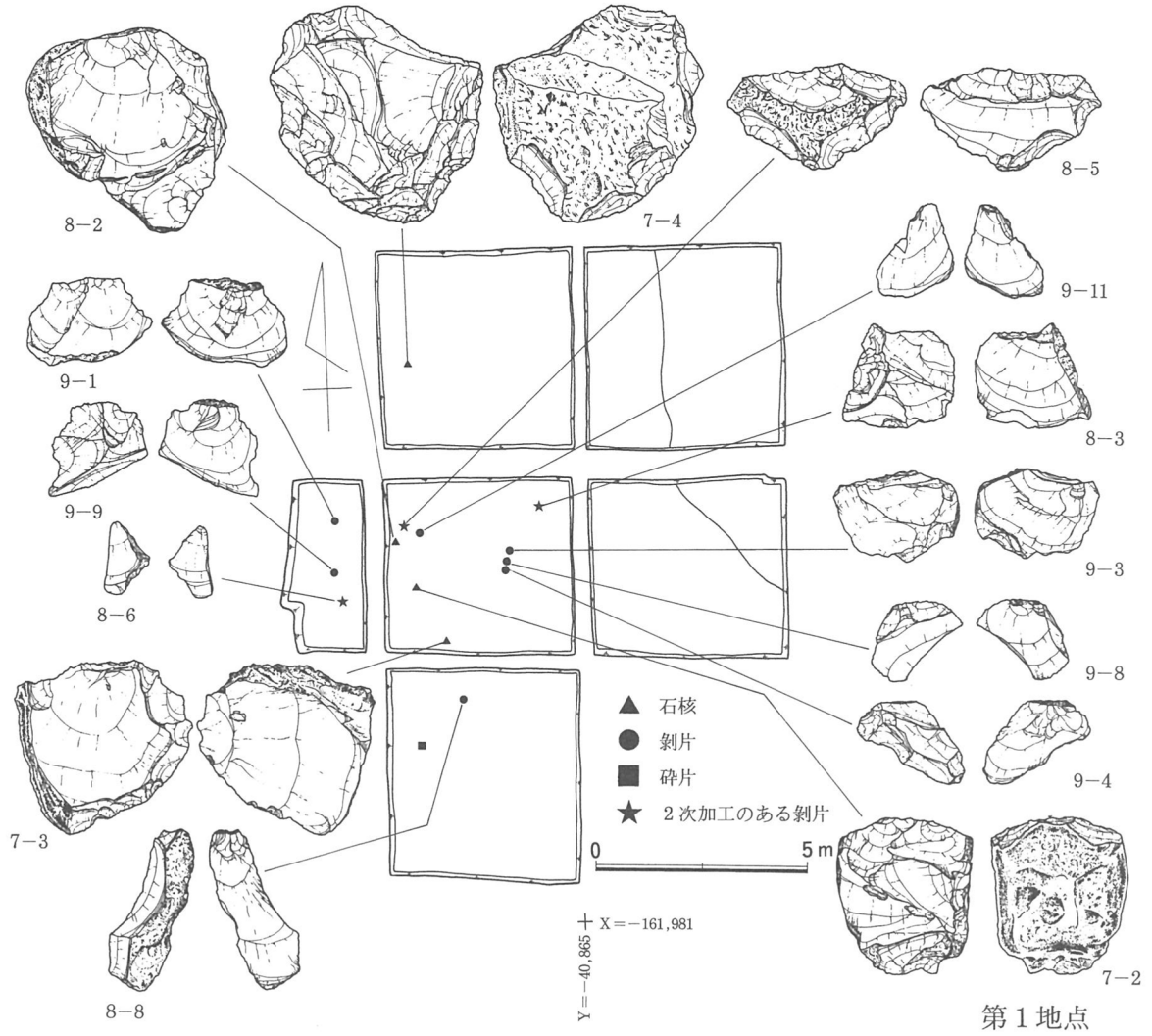
第1地点はJ地区の北西部に位置する。当該地点においては、包含層は段丘礫層の直上にのり、黄褐色(10YR5/6)で礫・細砂・シルトが混在した状況を呈する。

層厚はおおよそ20cmである。酸化が著しく、しまりも不良であり、二次堆積の様相を呈している。石器はすべてこの層中に包含された形で出土しており、個体間のレベル差も比較的顕著である。したがってその石器はこの層の形成過程において包含されたものであり、原位置を保っていないと考えられる。しかし、後述するように接合資料も認められる点を見ると、さほど大きな移動は考えられず極めて近接した位置にその原位置が求められよう。計28点の石器が出土している。

なお、第1地点における石器群の所属時期に関しては、様々な条件から大きく見て旧石器時代に属するものであろうと推測されるに過ぎない。判断基準となった条件を列記すると以下ようになる。

- ①土器類の混入が全く認められない。
- ②古墳時代の遺構面から無遺物層を2枚挟む段丘礫層の直上層中に石器が包含される。
- ③石器の風化が目立つ。
- ④出土した唯一のツールの系譜を縄紋時代以降には求め難く、単に形態的に見るならば、大きくみてナイフ形石器の範疇に属すると考えられる。

さらに、瀬戸内技法がその痕跡も全く認められないという点は極めて示唆的であるが、具体的な所属時期に関しては言及を避ける。



図Ⅲ - 6 第1地点・第2地点石器分布図

(2) 出土石器群

石核5点、剥片14点、二次加工のある剥片4点、ツール1点、碎片4点が出土している。相対的に石核の出現頻度が高く、碎片を除いた石器中で約19%を占める。

A. 石核 (図Ⅲ-7-2～4・8-1,2、写Ⅲ-15・16)

主要な剥離面がネガティブな面からなり、そこから得られる剥片に有用性を推定し得る石器を石核として扱う。ただし二次加工によりツールへの転用が明らかな場合は除外する。

いずれもこぶし大程度までの自然亜円礫をその素材としている。整形はほとんど行っておらず、生産される剥片の形状的な規格性に関する意図は希薄である。打面は自然面が主体であり、必要に応じた便宜的な調整を行うのみである(7-2,4)。打面の再生はすべての石核において認められない。作業面を1面のみに設定するものが主体的であるが、(7-3)では表裏2面、(8-1)では90度転移して3面を設定しているようである。

(7-4)および(8-2)では打点が作業面の縁辺を反時計廻りに巡る求心方向の剥離を行っているが、いずれも先行する一連の剥離によって生じたネガティブな面を背面にすべて取り込むような大きな剥片を剥離している。

(7-3)には石核の形状に沿った大きな剥離が1面認められる。(8-1)ではさらにその後に作業面を90度転移させて作業を継続している。(7-4)は基本的には、調整を施した打面を設定しそこから単一方向の剥離を繰り返しているが、最終剥離はそれらと対向するように同一作業面上において逆方向からの剥離を自然面を打面として行っている。

なお、(7-4)および(7-3)では最終的に縁辺上に連続する小剥離を施しており、ツールとして転用した可能性がある。また(8-1)は剥片(9-2)と最終剥離面において接合する。

B. 剥片 (図Ⅲ-8-7,8・9-1～5,8～12、写Ⅲ-17)

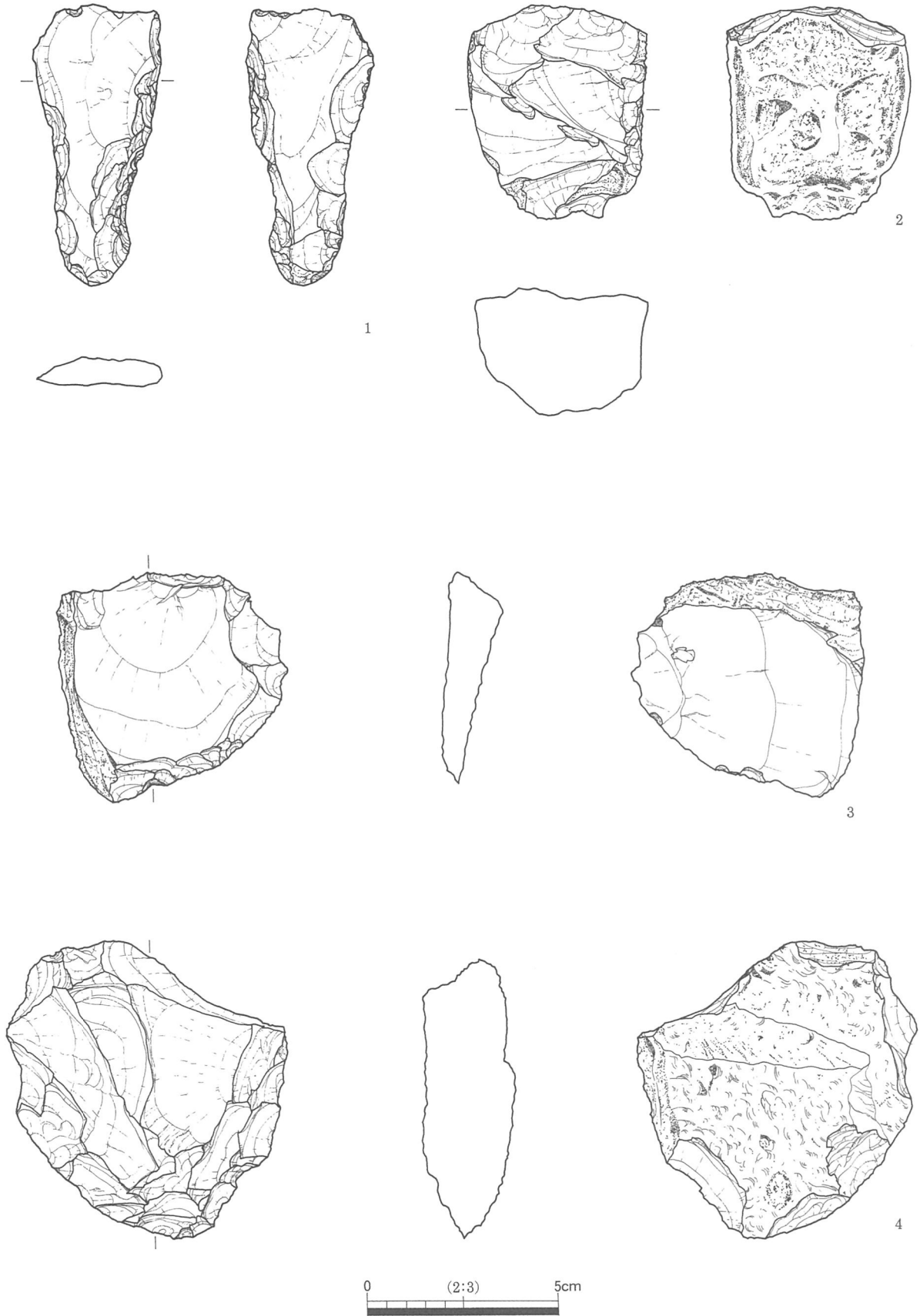
打点の有無に関わらず、その一次的な形状を決定する主要な剥離面がポジティブな面によって構成され、全周にわたりそれより新しい連続する剥離面が認められない石器を剥片とする。ただし剥離面境辺にのみ微小な剥離が認められるもの、折れ面を有するものは、それが二次加工と認定されない限りこの範疇に含めるものとする。

14点の剥片の内、2点は明らかに調整剥片であろうと考えられる小型扁平な剥片であり図示はしていない。残り12点の中で10点は自然面打面の剥片である(8-7, 8, 9-1, 2, 4, 5, 8～11)。(9-10)は単設打面であり、(9-3)は打面が欠損している。打面が2面以上の剥離面から構成される剥片は認められない。背面構成を概観すると3面以上の複数面によって構成されているものが主体的であるが、その方向は単方向、対向、求心状のものなどが認められる。(9-2)は石核(8-1)と接合する。

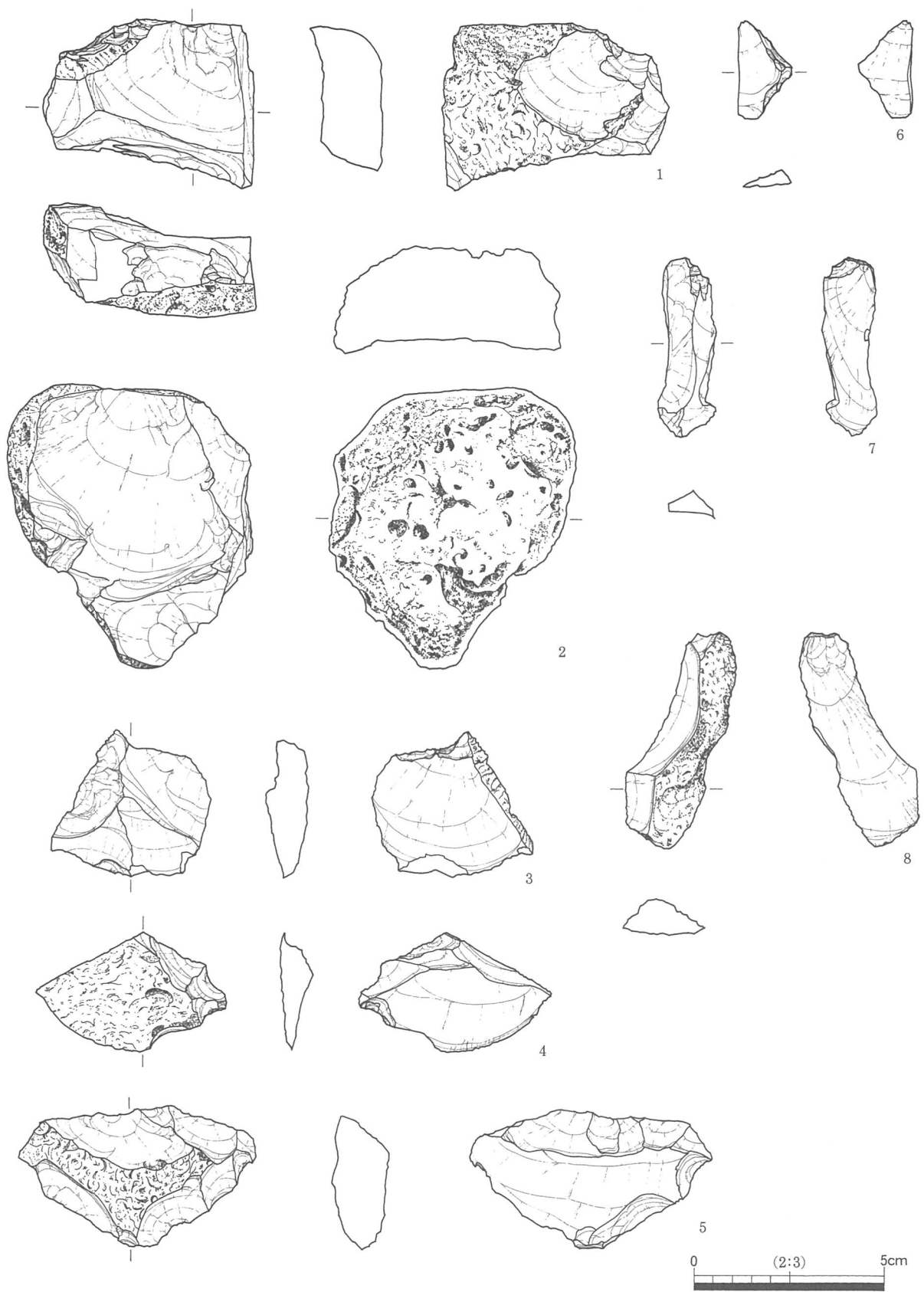
C. 二次加工のある剥片 (図Ⅲ-8-3～6、写Ⅲ-16)

前記の剥片のうち、主要剥離面より新しい連続する剥離面を有するもので、定型的なツールの範疇に包括されない剥片をすべて含む。

(8-6)は比較的小型の剥片であり、右側縁に小さな剥離を連続的に施しているが、左半部は発掘時に欠損しその全体の形状は不明である。(8-3)は素材剥片のバルブを除去するような剥離を施した後に小剥離を数回施してその一部分を尖頭状に作出しているようである。(8-6)と(8-4)は比較的類似している。素材はいずれも横長の剥片であり、バルブを除去するような加工を行った後に、右側縁を尖頭状に仕上げるようなやや粗い剥離を背腹両面より施している。



図Ⅲ - 7 出土石器 (1)



图Ⅲ-8 出土石器 (2)

D. ツール (図Ⅲ-7-1)

横長の剥片を素材としたバチ形のツールである。素材剥片の一次剥離の鋭いエッジを上縁に残し、両側縁を背腹両面から丁寧に剥離を重ねて形を仕上げている。左側縁では背面側から、右側縁では腹面側からの剥離が切っており、加工の大まかな前後関係が捉えられる。各側縁での剥離作業の方向には一定の傾向は認められないが、おおむね基部周辺の加工の方が新しいようである。背面側の基部には一部自然面が残っている。また、刃部には微小剥離が若干認められるが、その形成過程は定かではない。

2. 第2地点 (図Ⅲ-6下段)

(1) 包含層の状況

第2地点においては、5Jトレンチの表土直下に展開する基本層序Ⅲ層中から8点の石器が出土した。この地点を挟み込むように南北に2つの大きな池状の落ち込みが展開するが、すでに地形概要の項でも若干触れたように、このあたりを削ってその落ち込みを埋めたと考えられる。その埋土中からの石器の出土頻度が非常に高いことなどを考え合わせると、石器時代の遺跡がこの地点を中心として展開していた可能性を指摘することができ、後世の地形改変を免れた部分はその痕跡として、今回の調査によって検出されたと考えられる。ただし、出土石器は層中に包含された形で出土しており、そのレベルにも幅がある。したがって生活面を構成するものであったことを積極的に肯定する根拠には乏しく、二次堆積資料であることも否定しきれない。

第2地点の石器群に関しては、後章で剥片類の分析を通して第1地点の石器群との簡単な比較を行っているが、その分析結果を見る限り第1地点の石器群との積極的な差異は認め難く、現状においては同一の石器群とみなすことができよう。

以下、各石器群ごとにその内容を概観する。なお各石器の番号は図版番号をもって代用する。

(2) 出土石器群

剥片5点、二次加工のある剥片1点、碎片2点が出土している。

A. 剥片 (図Ⅲ-9-7,13,14・10-2,3・12-12)

5点の剥片の内、2点には微小剥離が認められる。打面部が欠損している3点(9-13,14、10-2)を除く2点の剥片(9-7、10-3)は自然面打面であり、いずれもやや横長の剥片である。

(12-12)は自然面が両側面にまでまわりこみ、剥片の大きさとさほど変わらない自然礫を石核として用いていることがうかがえる。(9-13)は打面部は識別できない。上縁から下縁に向かうやや扁平で細かな剥離が背腹両面に連続して認められる。ピース・エスキューとして考えることも可能であるが、下線部付近は発掘時に欠損しており、ここでは微小剥離のある剥片として扱う。

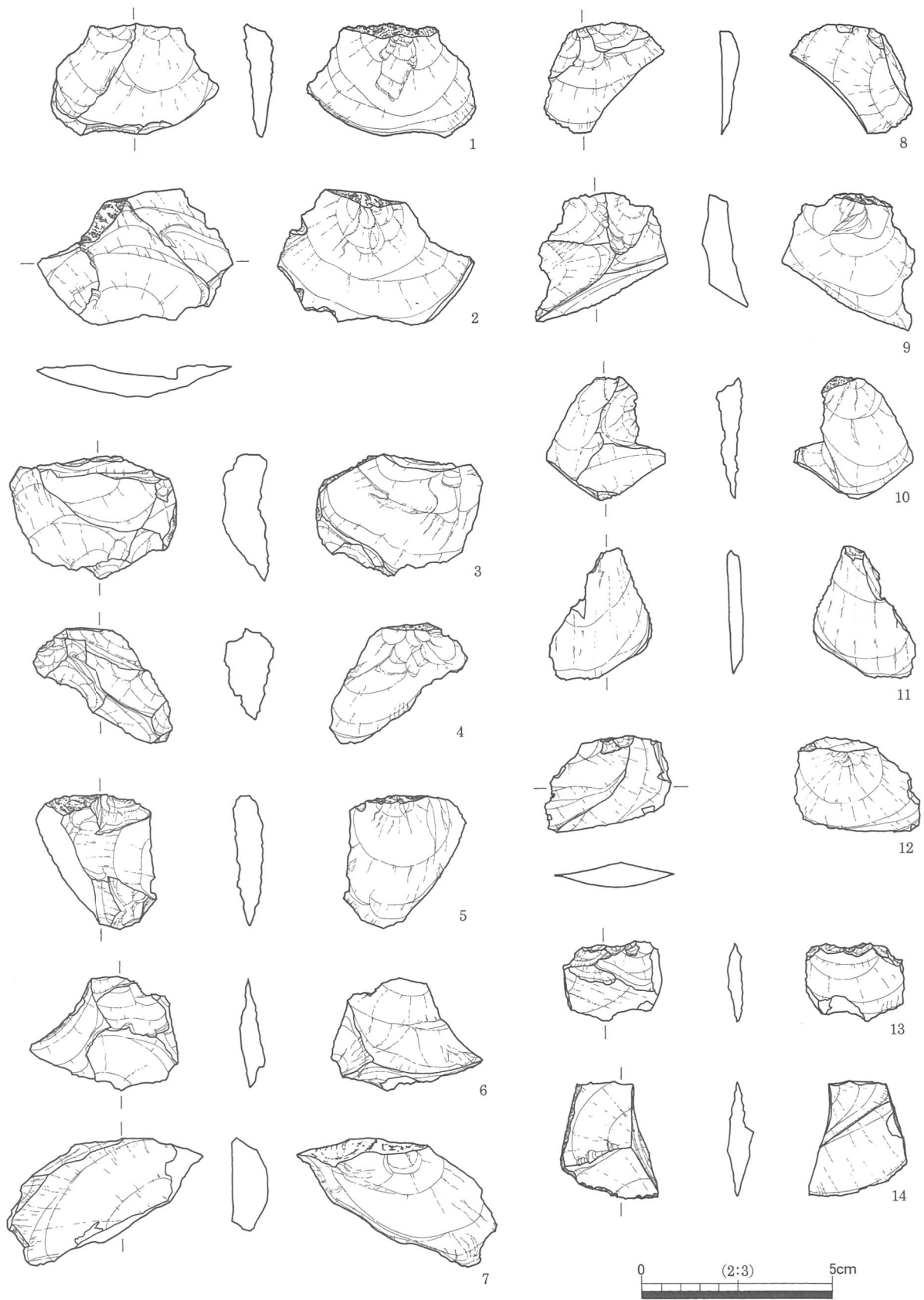
(9-14)はバルブを除去するような加工を加えているようにもみえるが、右側縁および上縁の一部が欠損しており詳細は不明である。下線部には主に背面側に比較的連続する微小剥離が認められる。碎片である可能性もあるがこの範疇に含める。

いずれの剥片も背面は複数の剥離面より構成されているが、単方向の剥離が主体的である。

B. 二次加工のある剥片 (図Ⅲ 10-1)

石核の形状に沿うような大きな剥片で、自然面を打面とする。下縁は折れ、または小剥離で構成されている。右側縁と左側縁下部に背面側から連続する剥離を施している。

以上、概観したように、包含層出土石器は石核、剥片がその組成の中心をなす。とりわけ第1地点においては石核の出現頻度が高く、その性格を堆定するのに示唆的な状況を示すが、ここでは調査によっ



图Ⅲ - 9 出土石器 (3)

て確認された事実に基づいた記述にとどめる。

また、この他にも、後世の包含層中の混入遺物であるが多数の石器が出土しており、以下、その代表的なものを概観する。

3. その他の石器

(1) ナイフ形石器 (図Ⅲ-11-1,2,6,7)

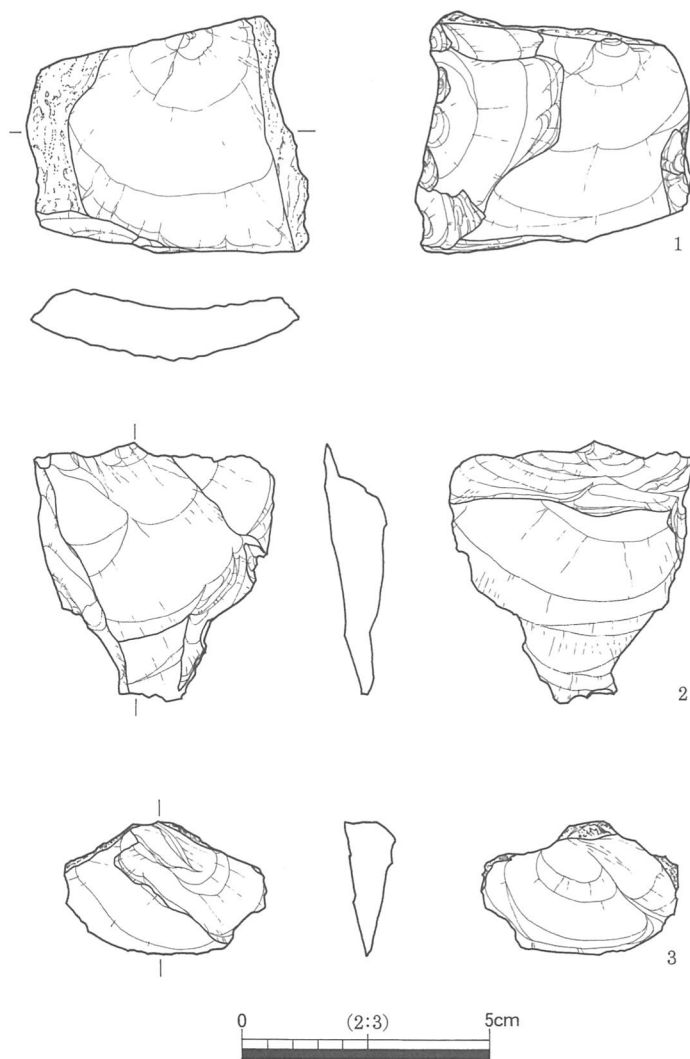
剥片を素材とする石器で、一次剥離の鋭いエッジを残し、その他の部分にブランティングの認められるものをこの範疇に入れる。調査区からは4点出土している。(11-1)は下半部が一部欠損しているが典型的な国府型ナイフ形石器である。(11-6)は横長剥片を素材とした両側縁加工のナイフ形石器であり左側縁上部に一次剥離の鋭いエッジを残す。背面側には入念な基部加工が認められるが腹面側には目立った加工は認められない。(11-2,7)はいずれも横長剥片を素材としている。(11-2)は上半部、(11-7)は上下両端が欠損しており、その細部の加工に関しては若干不明な点もあるが、いずれも右側縁のみ腹面側からブランティングを施している。また、(11-7)は厚みがあり、断面三角形を呈する。

(2) 尖頭器 (図Ⅲ-11-4・18-11,14・14-2,3)

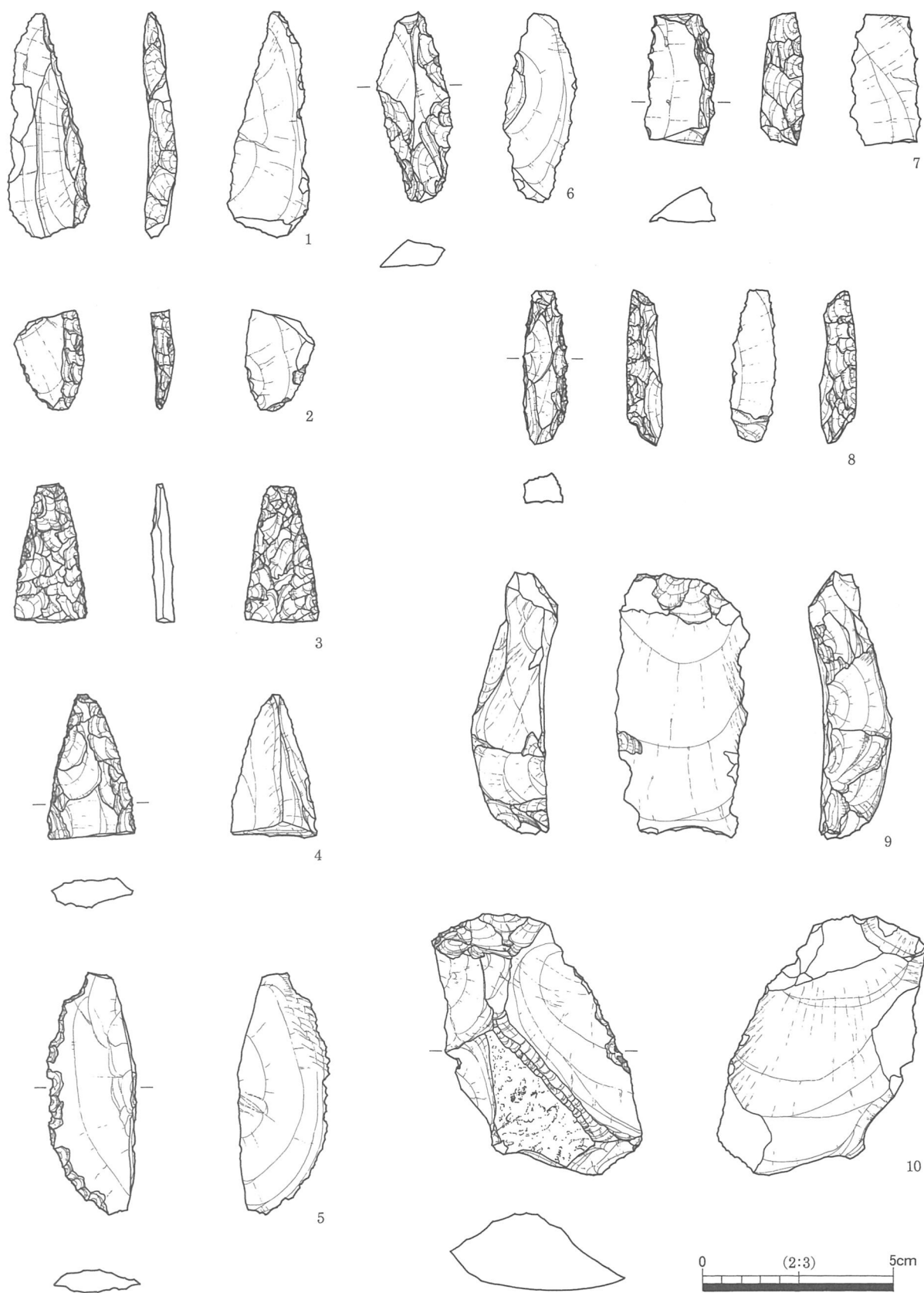
素材に関わりなく二次加工によって尖頭部が作出されている石器をすべてを扱い、狭義の尖頭器だけでなく、いわゆる尖頭状石器もこの範疇に含む。10点が出土している。形態的にも、技術的にも多様であり、一貫性は認められない。他の時期のものが混入している可能性もあるが識別する手段を持たず、ここでは一括して扱う。

(11-4)は横長剥片が素材であろう。下半部は欠損している。加工は腹面側に集中し、おおむね基部から先端部へ向かう方向に行っている。

(18-11)は縦長剥片が素材であり、打点部方向に尖頭部を作出している。加工は、主に大まかに腹面側からの成形を行った後に尖頭部周辺を入念に仕上げるように行っている。(14-2)は基部を素材剥片の打点部に据え、その剥片の加撃軸上に尖頭部を作出している。基部の一部には素材剥片の打面となる自然面が残っているが、全周にわたり背腹両面から比較的丁寧な剥離を施している。ただし素材の形状に多少影響を受けているようであり、その平面形は左右対称ではない。(14-3)は横長の剥片を素材としているようである。背面側に大きく自然面



図Ⅲ-10 出土石器 (4)



图Ⅲ-11 出土石器 (5)

を残しているが、全周にわたり大まかな成形を主に背面側から行っており、尖頭部周辺のみは腹面側からもやや入念な剥離を施している。(18-14) は上下両端が欠損しているが、残存部の形状からこの範疇に含めた。横長剥片が素材であり背腹両面より大まかな成形を行っている。ただしこれは弥生時代の石槍の未成品あるいは破損品である可能性もある。

(3) 舟底形石器 (図Ⅲ-11-8,9)

平坦な1枚の剥離面を打面とした同一方向の剥離がほぼ全周をめぐる石器をこの範疇に考えるが、2点出土している。(11-8) は横長剥片が素材であろう。背面の一部に素材剥片の背面を構成する剥離面が残っている。主要剥離面を甲板面とする剥離がほぼ全周をめぐるが、下端には背面側からの剥離が認められる。(11-9) は縦長剥片を素材とする。主要剥離面を甲板面として背面側に向けての連続的な剥離が認められ、断面は三角形を呈する。通例に比べるとやや大型であり石核である可能性もある。

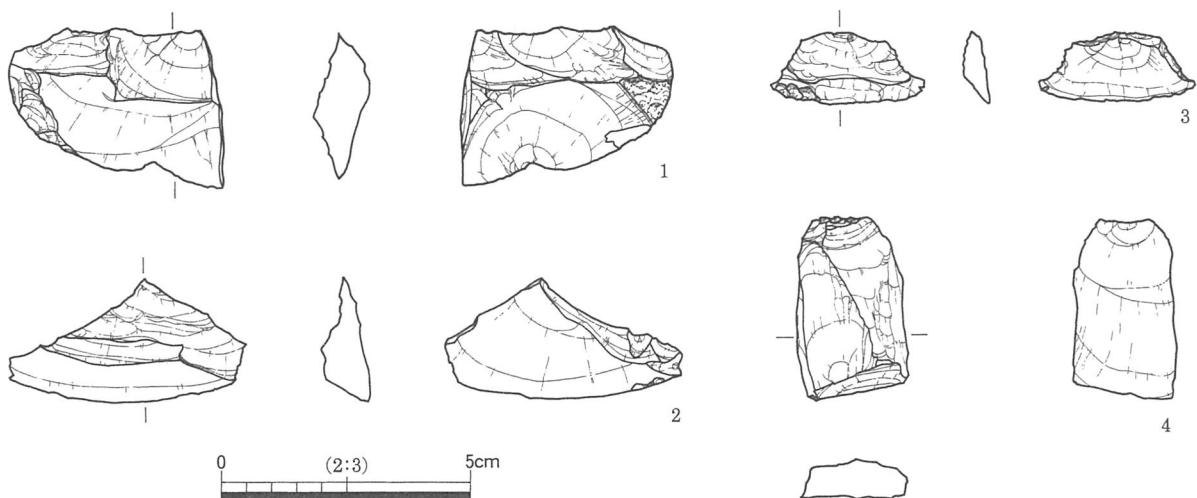
(4) 有舌尖頭器 (図Ⅲ-11-3・18-16)

(11-3) は丁寧に仕上げられた尖頭器である。先端部および基部が欠損しているが、形態的、技術的にみてこの範疇に入れた。チャート製である。(18-16) は横長剥片を素材とする有舌尖頭器であり、先端部および基部の一部が欠損している。仕上げは若干粗く、側縁はやや直線的であるが、丹上遺跡、太井遺跡Ⅰ調査区で出土している有舌尖頭器と形態的にも技術的にも極めて近接したものである。

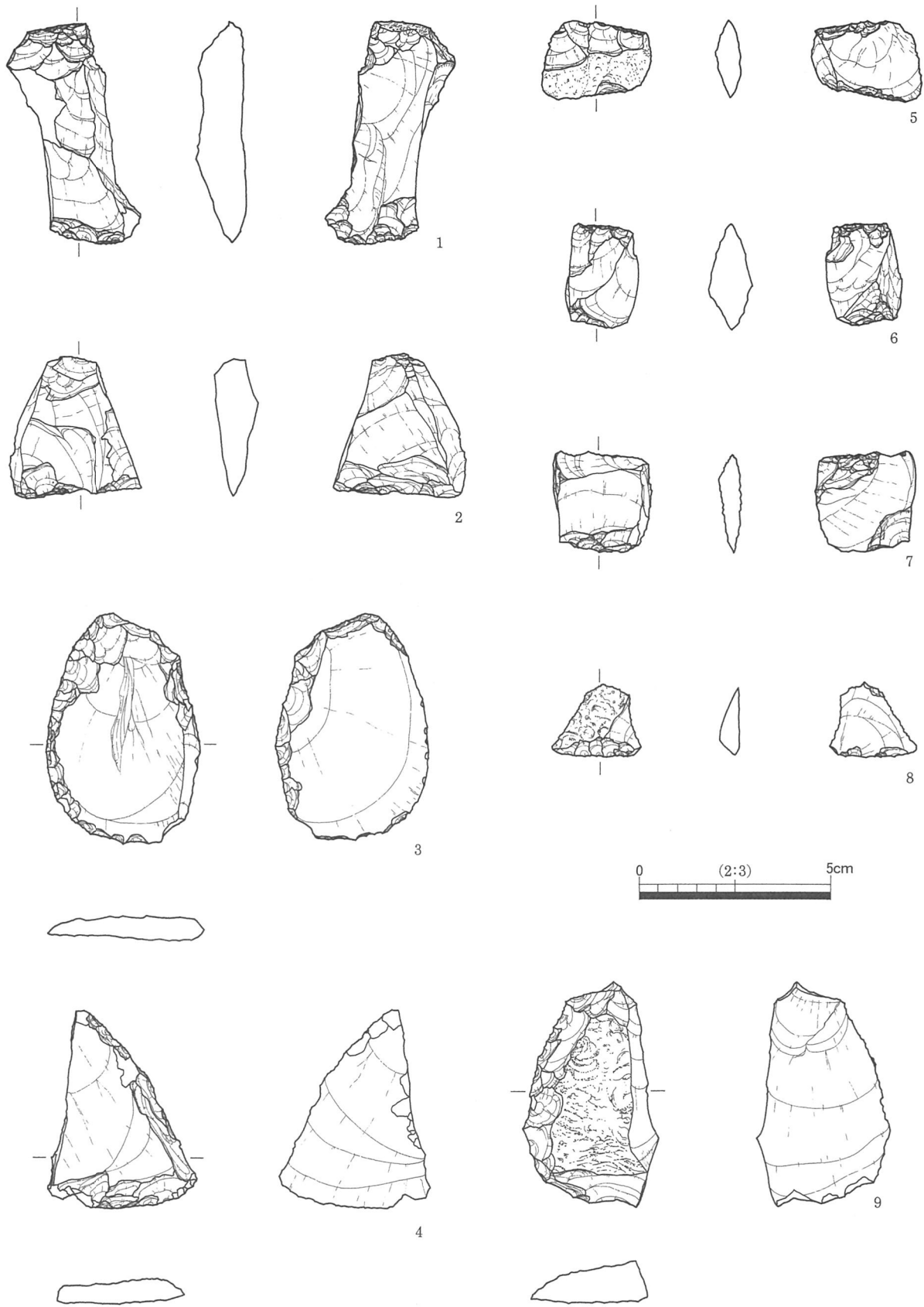
(5) スクレイパー (図Ⅲ-13-3,4,8,9・14-1)

縁辺部が急角度のエッジを形成するように連続的に剥離を施した石器。ナイフ形石器との相違は一次剥離の鋭いエッジがその石器の主要な構成要素と認定されるか否かに依存する。

(14-1) は腹面側、(13-9) は背面側のそれぞれ左側縁にやや急角度な刃部を作出している。周辺部は(14-1) では折れ面によって構成されるが、(13-9) には明瞭な二次加工は認められない。(13-3) は比較的薄い横長剥片の左側縁に腹面側から連続するやや小さい剥離を施し刃部を作出していると考えられるが、同様の加工は全周に及ぶ。(13-4) は左半部が発掘時に欠損したために全体の形状は不明であるが、周縁に腹面側から連続的に剥離を施して刃部を作出しているようである。(13-8) は小型の剥片を素材としており、背面に自然面を多く残す。バルブを除去するように腹面側から連続した剥離を施して刃部を作出している。その他の部分には明瞭な加工は認められない。



図Ⅲ-12 出土石器 (6)



图III -13 出土石器 (7)

(6) ピエス・エスキーユ (図Ⅲ-13-1,2,5~7)

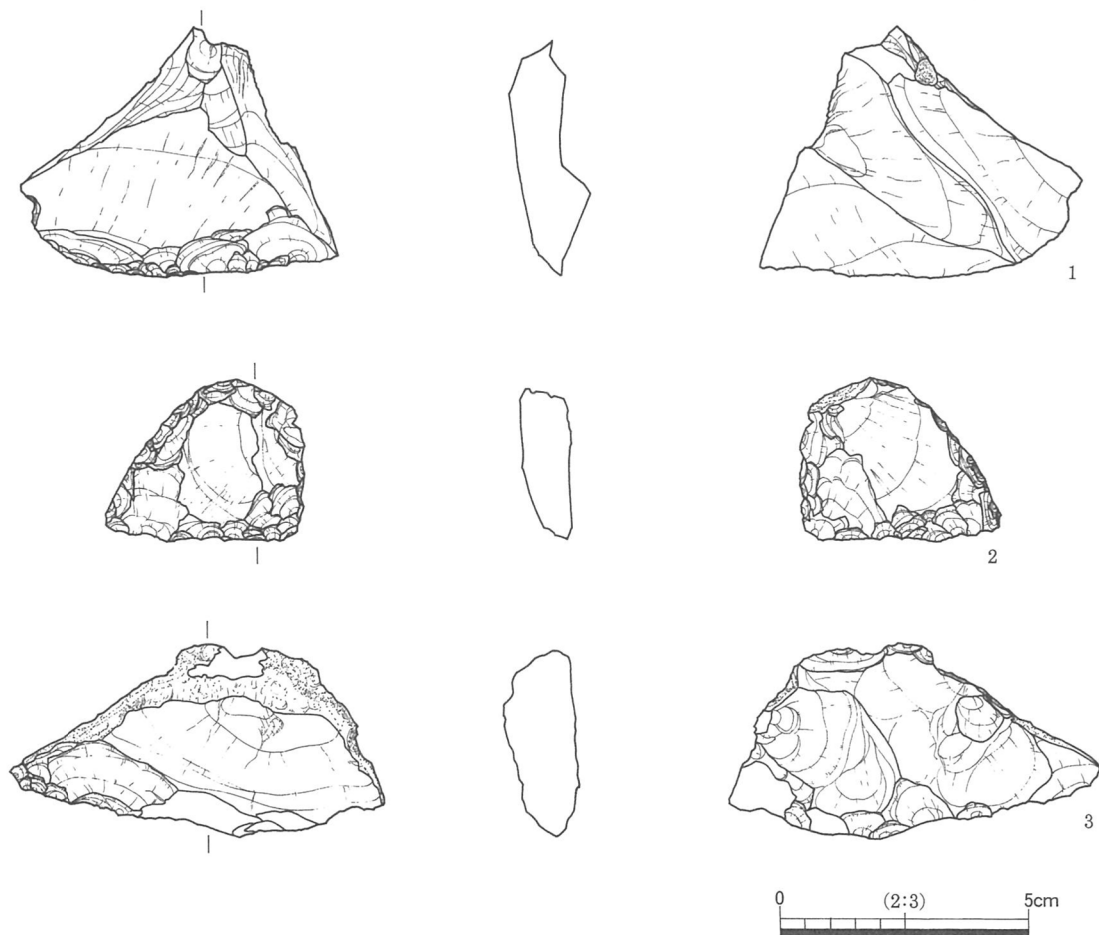
少なくとも一組の平行する縁辺上に対向するような小剥離あるいは潰れが連続的に背腹両面に認められる石器をこの範疇に入れる。このツールでは側面も前記の小剥離の加撃軸と平行する軸を有する剥離面によって構成されている場合が多く、特に(13-2)の腹面側右側面を構成する剥離面はリングが両端に向けて収束しているようであり、両極剥離痕の様相を呈する。

(7) 鋸歯縁石器 (図Ⅲ-11-5)

連続的あるいは断続的な剥離により縁辺部が鋸歯状を呈する石器をこの範疇に入れる。当調査区からは1点のみ出土している。横長剥片を素材としている。左側縁に連続する小剥離を腹面側から施して刃部を鋸歯状に仕上げている。右側縁は腹面側からの折れ面あるいは小剥離によって構成されているが意図的な二次加工であるか否かは定かではない。

以上のツールの他に、(12-1)にみられるような翼状剥片の石核、(12-2,3)にみられるような翼状剥片が出土しているが量的には極めて少なく、翼状剥片が全剥片中に占める割合は約4.7%にしか過ぎない。また、その他には(11-10・12-4)でみられるような特異な形態の剥片も出土しているが量的な保証が全く無い。

したがって、現状ではその性格、系譜等を論じられるまでには至っていない。また、その他の石器としてあつかったツールに関しては層位的な保証が得られない上に形態的、技術的にみてもその所属時期の決定が困難なものであることを付記しておきたい。



図Ⅲ-14 出土石器 (8)

第3章 縄紋・弥生時代の遺構・遺物

当調査区では後述するような自然流路を検出し、それに関連して縄紋時代晩期の土器片が比較的まとまって出土している。古代以降の開発に伴う地形改変が著しく、古墳時代以前の遺構が遺存しにくい状況にあって重要な調査所見であるといえる。また、弥生時代では顕著な遺構は確認できないものの、包含層中からは当該期に帰属する石器が出土するなどしている。

第1節 J地区の遺構と遺物

1. 自然流路

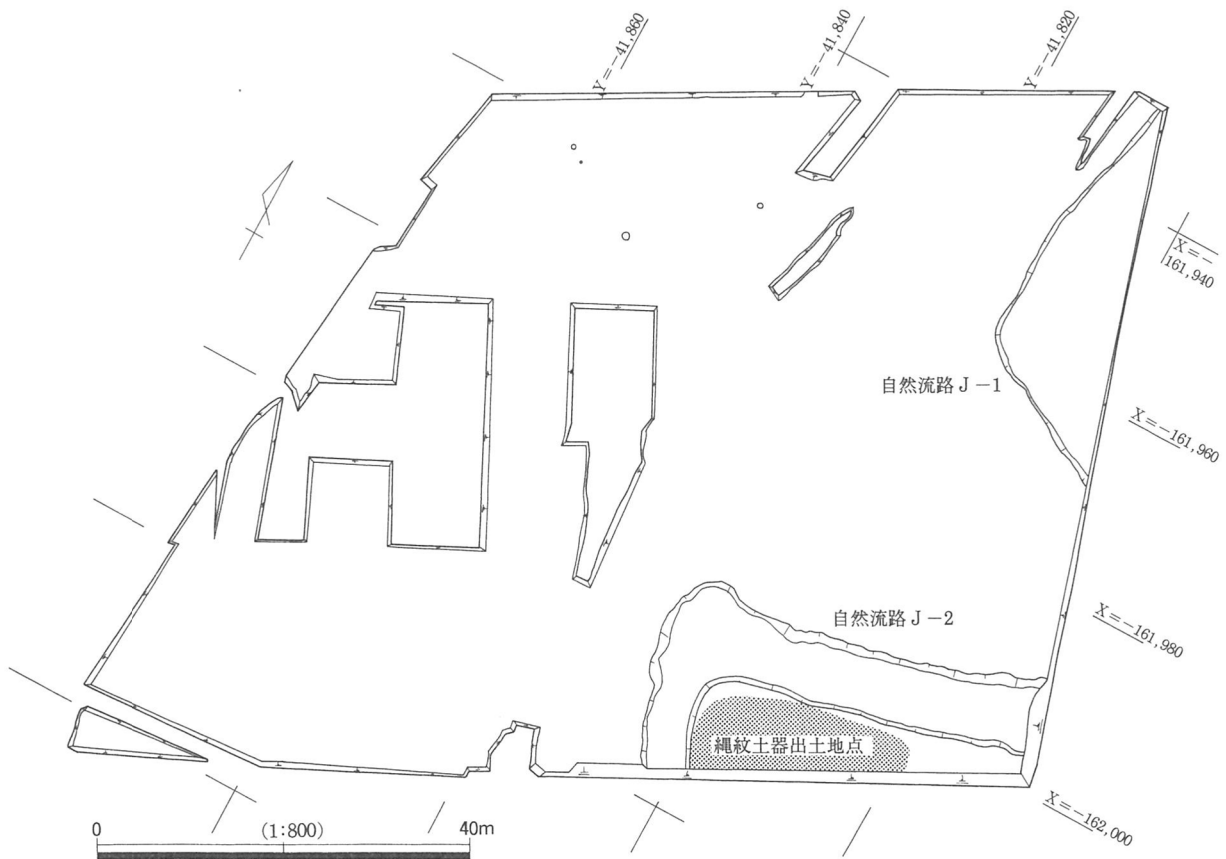
(1) 自然流路 J-1 (図Ⅲ-15)

J地区の北東で検出した流路である。東側は町道がある調査範囲外にのびており、全容は不明である。すでに報告を行ったⅡ調査区のI地区で検出した自然流路と一連のものと考えられる。堆積状況が後述する自然流路 J-2と共通しており、年代的にどこまで遡るかは不明であるが、少なくとも古墳時代以前にその初源をもとめることが可能である。詳細については古墳時代の項において報告する。

(2) 自然流路 J-2

A. 遺構の状況 (図Ⅲ-15、写Ⅲ-2)

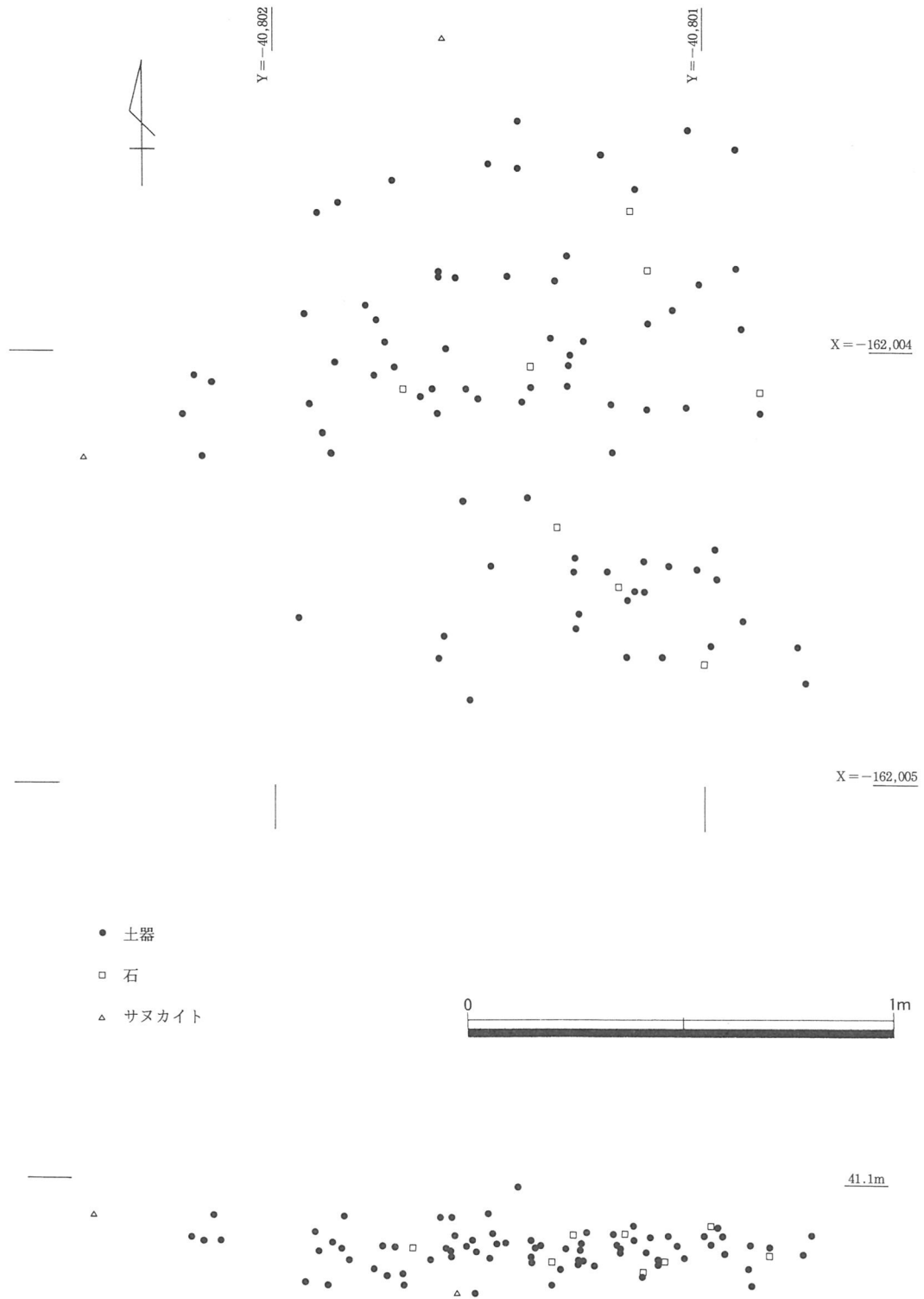
J地区の南東で検出した流路である。自然流路 J-1と同様に古墳時代以降も継続する流路である。



図Ⅲ-15 縄紋～弥生時代遺構平面図

この流路は古墳時代以降に強い水流による浸食を受けており、当該期の状況を復元することは困難であるが、おおむね形を変えずに流路として機能していたものと判断される。

なお、L字状に検出した流路の南側では砂礫層の上面に堆積した灰黄色細砂層から縄紋土器が比較的まとまって出土している。分布の範囲はかなり集中している状況が看取されるが、原位置をとどめるも



図Ⅲ-16 縄紋土器出土分布